

らないのである。

書普慈長老壁

普慈長老の壁に書す

普慈寺後千竿竹。普慈寺後千竿の竹、

醉裏曾看碧玉椽。醉裏曾て看る碧玉の椽。

倦客再遊行老矣。倦客再遊すれば行く、老いぬ、

高僧一笑故依然。高僧は一笑して故らに依然たり。

久參白足知禪味。久しく白足に參して禪味を知り、

苦厭黃公聒晝眠。苦ろに厭ふ黃公の晝眠に聒しきを。

惟有兩株紅百葉。惟兩株の紅百葉あつて、

晚來猶得向人妍。晚來猶ほ人に向つて妍なることを得。

【字解】(一) 普慈 京口志に、城西南有壽岳、宋武帝家、此、至三陳時、即其宅基、建慈和寺、至宋改普慈。京口は今の江蘇丹徒縣治。(二) 倦客 漢書、司馬相如傳に、長卿故倦游、雖貧、其人才足、依也。倦は疲なり、遊學に疲厭するをいふ。(三) 故依然 樂府に、圍碁燒敗、棋、著子故依然。南史、沈文季の傳に、依然猶有故情。(四) 白足 釋曇始の足は、面よりも白く、泥水に踏涉しても、未だ嘗て沾濕しなかつたから、白足和尚と稱された。それより僧を白足といふ。劉禹錫の詩に、都人禮白足。李商隱の詩に、白足禪僧思敗道。(五) 禪味 維摩經に、維摩詰雖復飲食、而以禪悅爲味。東坡の詩にも、不知禪味深、但取饑腸饜。(六) 黃公 東坡の自注にいふ、鳥名と。黃鸝、黃鳥などいふに同じ。(七) 紅百葉 江浙の間、花あり、之を百葉紅といふ。韓退之の詩に、百葉雙桃晚更紅。

【題義】 此詩も熙寧七年二月の作。紀昀いふ、三四用二文句、極其自然、無宋人文句之野氣と。

【詩意】 普慈寺の後庭には、千竿もの竹が茂つて居る。曾て醉裏に之を看たときは、碧玉の椽のやうであつた。遊學に倦んで、再び寺に來り遊ぶと、漸く老いて居つた。併し、寺の長老は、相變らず故情があつて、一笑された。久しく白足禪僧に參じて、禪學の面白い味の處を知つた。黃鸝の聒しく鳴いて、晝寢の妨げをしたのも、全く厭になつた。ただ寺に兩株の紅百葉があるので、日が暮れ、あたりが暗くなつても、人に向つて美はしい色を見ることが出來たのである。

書焦山綸長老壁

焦山綸長老の壁に書す

法師住焦山。而實未嘗住。法師焦山に住して、實は未だ嘗て住せず。

我來輒問法。法師了無語。我來つて輒ち法を問ふ、法師了に語なし。

法師非無語。不知所答故。法師語なきにあらず、答ふる所の故を知らず。

君看頭與足。本自安冠屨。君看よ頭と足と、本自から冠屨を安んず。

譬如長鬣人。不以長爲苦。譬へば長鬣の人の如し、長を以て苦と爲さず。

一旦或人問。每睡安所措。一旦或人問ふ、毎に睡りて措く所に安んず。

歸來被上下。一夜無著處。歸り來りて上下に被り、一夜著くる處なし。

展轉遂達晨。意欲盡鑷去。展轉して遂に晨に達す、意盡く鑷み去らんと欲す。

此言雖鄙淺。故自有深趣。此の言は鄙淺と雖も、故自から深趣あり。

持此問法師。法師一笑許。此を持して法師に問ふ、法師一笑許。

【字解】【一】未嘗住。金剛經に、若心有住則爲非住。【二】法師。法師の名は、十住毗婆娑論に、行三四法名法師とある。四法とは、一、博學にして、能く一切の言辭・章句を持す。二、決定して、善く世間の諸法の生滅の相を知る。三、禪定の智を得、諸經法に於いて隨順して諍ふことなし。四、不増・不損、所説の如く行する。【三】頭與足。安冠履。漢書に、鞞固與黃生爭論、景帝前生曰、冠雖敝必加於首、履雖新必貫於足。【四】長鬣人。左傳、昭公七年に、使長鬣者相。鬣は鬚、長い鬚の人を選んで享禮を助けしめる。同、十七年に、使長鬣者三人、潛伏於舟側。【五】展轉。展轉に同じ。輾は半轉、轉は周轉。臥して席に安んぜざるをいふ。詩、周南關雎に、悠哉悠哉、輾轉反側。【六】鄙淺。卑淺といふに同じ。隋書、經籍志に、遷卒以後、好事者、亦頗著述、然多鄙淺、不足相繼。【七】深趣。宋史の崔遵度傳に、善鼓琴、得其深趣。

【題義】此詩は熙寧七年二月の作。焦山の綸長老は、東坡が前に遊焦山詩に、老僧下山驚客至、迎笑喜作巴人談と。其の老僧である。紀昀いふ、直作禪偈、而不下以禪偈爲病、語妙故也、不討人厭一處、在揮洒如意、微不滿人意處、在剽而不留と。

【詩意】焦山に住して焦山を忘る。焦山を忘れて始めて焦山に住する。綸長老は山に住して、實は未だ嘗て住して居ない。住と不住との外に居るからである。我來つて法を問ふと、法師は了に語らない。法師は語らないのではない、答へる所の故を知らないからである。君試みに看よ、頭と足とは、本、自から冠と履とを安んじて居る。故に冠は敝れたりとも雖も、必ず頭に加へる。履は新なりとも雖も、

必ず足に貫くではないか。冠を忘れるは、頭に安んずるからであり、履を忘れるは足に安んずるからである。譬へば鬚の長い人のやうなもので、長いのを苦にはしない。(鬚は馬首にあり、髪は人頭に在る。故に髪を謂つて鬚となす。)かくて、一旦、或人が問ふも、法師は毎に睡つて居り、すべて棄て置いて構はない。それで、我は歸り來つて上下に衣を被つて寢に就いた。所が或る夜、著くる所がなく、臥して席に安んじない。寢て寐ぬることが出来なく、遂に晨に達した。意も鑷み去られようとした。さて、此の言は、鄙淺ではあるが、自から深い趣があると思ふ。此を持して法師に問ふと、法師は語らないで、一どに笑つた。(王注にいふ、此篇、先生用小説一段事、裁以爲詩、而意最高妙。)

刁景純席上和謝生二首

刁景純 席上和謝生に和す 二首

悞入仙人碧玉壺。悞つて入る仙人の碧玉壺、

一歡那復問親疎。一歡那ぞ復親疎を問はん。

盃盤狼藉吾何敢。盃盤狼藉吾何ぞ敢てせん、

車騎雍容子甚都。車騎雍容子甚た都なり。

此夜新聲聞北里。此の夜新聲北里に聞え、

他年故事記南徐。他年故事南徐を記す。

古今體詩 刁景純席上和謝生二首

【字解】【一】碧玉壺。神仙傳に

費長房爲市掾、壺公來賣藥、嘗懸一空壺於坐上、日入之後、輒跳入壺中、積久、語房曰、卿便可依我、我跳、長房依言、已入、見仙宮世界、樓觀、重門、閣道、公語長房曰、我仙人也、見責、因謫人間耳。【二】盃盤狼藉。史記、淳于髡の傳に、杯盤狼藉、堂上燭滅、主人留髡而送客。東

欲窮風月三千界。窮めんと欲す風月三千界。

願化天人百億軀。願くは化せん天人百億の軀を。

は和らぎたるすがた。【四】新聲聞北里。梁。元帝纂要に、古豔曲、有北里靡靡之曲。史記に、紂使師涓作新淫聲、北里之舞、靡靡之樂。【五】記南徐。東晉は、南徐州を置いて京口を治む、今の潤州なり。南史に、徐君蒨善絃歌、好聲色、載妓肆、意、游行荆楚山川、時、襄陽魚宏亦以豪俊稱、於是府中謠曰、北路魚南路徐。【六】風月三千界。歐陽永叔の詩に、翰林風月三千首、吏部文章二百年。翻譯名義に、三界通有三三種、謂三千、大千、大千、也、千三倍小千、爲一中千、千三倍中千、爲二大千。【七】百億軀。柳子厚の詩に、若爲化作三身千億、徧上三峯頭、望故鄉。李義山の詩に、何當百億蓮華上、一一蓮華見佛身。

【題義】潤州の刁景純が家に會し、席上、謝生に和したのである。

【詩意】仙人の碧玉壺に入ると、一世界が開く。樓觀があり、重門があり、閑道がある。我は悞つて其の仙郷にも比すべき刁氏の席上に列つた。一歡何ぞ復、親疎を問はん。我は歡を盡しても、盃盤狼藉といふ所には至らない。車騎を従へて、和らいた姿の子は、甚だ都雅である。此夜、新聲北里靡靡の曲を聞く。昔、徐君蒨は絃歌を善くし、意を肆にして、荆楚の山川に游行した時、襄陽の魚宏も、豪俊を以て稱せられた。府中謠うて、北路魚、南路徐といつたさうである。南徐の此故事も、思ひ出される。風月の三千世界、徧く天人百億の身を化したいものである。摩訶衍(大乘)にいふ、周二匝千葉上、復現二千釋迦、一華百億國、一國一釋迦、故釋迦牟尼佛名、千百億化身也と。

縱飲誰能問挈壺。

縱飲誰か能く挈壺を問はん、

不知門外曉星疎。

知らず門外曉星の疎なるを。

綺羅勝事齊三閣。

綺羅の勝事は三閣に齊しく、

賓主談鋒敵兩都。

賓主の談鋒は兩都に敵す。

榻畔烟花嘗嘆杜。

榻畔の烟花嘗て杜を嘆じ、

海中童卯尙追徐。

海中の童卯尙ほ徐を追ふ。

無多酌我君須聽。

多く我に酌む無れ君須らく聽くべし、

醉後麤狂膽滿軀。

醉後麤狂膽軀に滿つ。

【字解】(一)縱飲。杜子美に、縱飲久拚人共棄。(二)挈壺。周官に、有挈壺氏。鄭注にいふ、懸壺以爲漏と。(三)綺羅勝事。綺はあやぎぬ、羅はうすぎぬ。顔氏家訓に、車乘填三街衢、綺羅盈三府寺。勝事は勝會といふに同じ。盛んなよりあひ。(四)三閣。南史に、陳後主於三光昭殿前、起臨春、結綺、望仙三閣、後主自居臨春、張貴妃居結綺、龔孔二貴嬪居望仙、竝複道交相往來。(五)賁。兩都。漢、班固の兩都賦は、西都の賓、東都の主人を設けて、以て相辨答す。(六)榻畔。杜牧の詩に、今日鬢絲禿榻畔、茶煙輕颺落花風。(七)童卯尙追徐。白樂天の詩に、童男卯女舟中老。漢書の伍被傳に、秦又使徐福入海求三仙藥、多齎珍寶、童男女三千人、五種百工而行、徐福得平原、廣澤、止王不來。(八)無多酌我。漢書に、蓋寬饒曰、無多酌我、我廼酒狂。(九)膽滿軀。三國志に、趙雲與曹公戰、先主明且視戰處、曰、子龍、一身都是膽也。子龍は雲の字。

【詩意】十分に酒を飲んで、歡を盡し、夜漏(水時計)の移るも構はない。又、必ずしも漏の淺深を問はないのである。陳后山の談叢に據ると、刁學士約は、交結や、請調や、宴談を喜んで、常に半夜に至つたので、刁半夜と號けられたさうである。長夜の飲をなし、門外、天色漸く白く、曉星の疎

になるをも知らなかつた。綺羅の盛會は、陳後主が臨春。結綺・望仙の三閣に齊しく、賓客と主人との言論の勢が鋭いことは、漢の班固の兩都賦に、西都の賓と、東都の主人とを設けて、相辨答するやうであつた。今日鬢絲禪榻の畔、茶煙軽く颺る落花の風と言つた杜牧之は、其の詩藻を嘆ずる。又、烟は深し蓬萊の神山に、仙薬を求めた徐福は、童男卯女の追ふ所である。酒を多く我に酌むなかれ、君よ須らく聴くべし。多く我に酒を飲ませると、酔うた後、癡狂を發し、一身すべて膽となる。

留別金山寶覺圓通二長老

金山の寶覺・圓通二長老に留別す

沐罷巾冠快晚涼。沐し罷んで巾冠晚涼快し、

睡餘齒頰帶茶香。睡餘齒頰茶香を帶ぶ。

艤舟北岸何時渡。舟を北岸に艤す何の時か渡らん、

晞髮東軒未肯忙。髮を東軒に晞して未だ肯て忙しからず。

康濟此身殊有道。康濟此身殊に道あり、

醫治外物本無方。醫治外物本方なし。

風流二老長還往。風流二老長へに還往、

顧我歸期尙渺茫。我が歸期を顧みれば尙ほ渺茫たり。

【字解】(一)留別 旅立つ人が

留まれる人に別を告げる。(二)巾

冠 巾帽といふに同じ、頭巾をいふ。

(三)艤 舟を北岸に舟を整へて岸に向

ふ。史記、項羽本紀に、欲東渡三島江、

亭長艤船待。左太沖の蜀都賦に、

艤輕舟。因にいふ、江蘇武進縣の東

南に艤舟亭あり、東坡常に舟を此に

繫ぎしより、後人、亭に名く。(四)

晞髮 晞は露などのかわく義。詩、

秦風に、白露未晞。楚辭に、與汝

沐兮咸池、晞汝髮兮陽之阿。後漢、張平子の思玄賦に、且余沐於清源兮、晞余髮於朝陽。注にいふ、既沐三髮於清源、而乾三髮於山東一矣、朝陽、山東也と。(五)康濟 民を安んじ、すくふ。書經の蔡仲之命に、蕃王室、以和三兄弟、康濟小民。(六)風流二老 杜子美が寄三賢上人詩に、與予成二老、來往亦風流。(七)渺茫 韓退之の詩に、歸來辛苦欲誰爲、坐令再往之計墮三渺茫。渺茫は渺茫に同じ。

【題義】此詩は熙寧七年二月、再び金山に遊び、寶覺・圓通の二長老に留別した作である。金山志に、宋、寶覺禪師、乃育王璉禪師法嗣云云と見ゆ。紀昀は此詩を評して、此則宋調之取厭者矣と言つて居る。

【詩意】髮の毛を洗ひ了つて、頭巾も軽く、晚涼を覺えて、心地がよい。睡餘茶を啜る、齒も頰も茶香を帯びる。舟よそほひして、北の岸に向ふ、何れの時に渡らうぞ。髮を朝日の射す東軒に晞かして、未だ肯て忙はしといふでもない。民を安んじ助けるといふ康濟は、此身殊に道がある。醫治は身外の物で、もと方がない。風流の二老は、長へに來往する。我が歸る期日を顧みると、渺茫の中にあつて、一寸豫定がつかない。

和蘇州太守王規父侍太夫人觀燈之什。余時

以劉道原見訪滯留京口不及赴此會二首

蘇州の太守王規父が太夫人に侍りて燈を觀るの什に和す。余時に劉道原訪は

古今體詩 留別金山寶覺圓通二長老 和蘇州太守王規父侍太夫人觀燈之什二首

るを以て、京口に滞留して、此の會に赴くに及ばず

二首

不覺朱轡輾後塵。覺えず朱轡の後塵を輾るを、

爭看繡幃錦纏輪。争ひ看る繡幃錦纏輪。

洛濱侍從三人貴。洛濱侍從三人貴し、

京兆平反一笑春。京兆平反一笑春。

但逐東山攜妓女。但逐東山の妓女を攜ふるを、

那知後閣走窮賓。那ぞ知らん後閣窮賓を走らすを。

滞留不見榮華事。滞留見ず榮華の事、

空作賡詩第七人。空しく賡詩を作る第七人。

【字解】(一) 蘇州 禹貢、揚州

の地、周の時、吳國たり。後漢、順

帝永建四年、浙江以東を割いて會稽

となし、浙江以西を吳郡となす。隋、

開皇九年、改めて蘇州となす。(三)

王規父 王誨、字は規父、熙寧六年、

朝散大夫、尚書司勳郎中を以て蘇州

に知たり。(三) 太夫人 漢書、文

帝紀の注に、列侯之妻稱太夫人、列侯

死、子復爲列侯、乃得稱太夫人。

【四】 觀燈 上元の夜、燈火を見る。

【五】 劉道原 宋の劉恕字は道

原、年十八、進士第一に擧げらる。官歴て秘書丞に至る。【六】 京口 舊名は須口、即ち西浦。【七】 朱轡 車の覆ひ、塵や泥を

ふせぐもの。漢書、景帝紀に、二千石車、朱轡。【八】 後塵 文選、七命に、余雖不敏、請尋後塵。同じく注に、應璩與桓元一書、

敬尋後塵。【九】 繡幃錦纏輪 宋史、輿服志に、厭翟車、寶緋繡幃。李適の詩に、悠悠思錦纏。幃は倉頡篇に、帛張車上爲幃と

見ゆ。【一〇】 洛濱侍從云云 晉、汝南王亮傳に、伏太妃、嘗有疾、祓於洛水、亮兄弟三人侍從、竝持節鼓吹、雲纒洛濱、武帝登

凌雲臺、望見曰、伏妃可謂富貴矣。【一一】 京兆平反云云 漢書に、雋不疑爲京兆尹、每行縣、錄囚徒、還、其母輒問不疑、有所

平反、活幾何人、即不疑多有平反、母喜笑爲飲食、語言異於他時、或無所出、母怒、爲之不食。【一二】 東山攜妓女 晉書

謝安傳に、謝安、字は安石、少より重名あり。東山に棲遲し、常に臨安の山中に往き、情を丘壑に放にする。然れども遊賞する毎に、

必ず妓女を以て従ふと見ゆ。【一三】 後閣走窮賓 漢書、游俠傳に、陳遵每大飲、輒關門、取客車轄、投井中、客雖有急、終不

得去、嘗有三部刺史、奏事過遵、值其方飲、刺史大窮、候遵酒醉時、突入見遵母、叩首白、當對尚書、有三期會狀、母令從後閣

出去。【一四】 賡詩 歌をつぎうたふ。書經の益稷に、乃賡載歌。

【題義】 此詩は、熙寧七年二月の作である。劉恕と京口に期したので、蘇州の王誨が催しの會合に

赴くことが出来なかつた。そこで、誨が燕に侍して燈を觀るの詩に寄せ和したのである。

【詩意】 上元の觀燈の時は、朱色の覆ひある立派な車が後塵を輾つて來るのをも知らないで、我先に

と争つて、繡幃や錦纏輪などを看る。(繡幃は縫ひ取りの幌である。)又、伏太妃の病氣で、洛水に被ひ

をしたとき、汝南王亮の兄弟三人が侍從して、水濱を耀かした。其の時、たまたま武帝は凌雲臺に登

つて、伏妃は富貴と謂ふべしと仰せられたさうである。洛濱侍從三人貴は、此事を言つたのである。

京兆平反一笑春は、漢の雋不疑の故事を言つたのである。雋不疑、京兆の尹となつて、縣を行き、囚

徒を録して、平反(訴訟をしらべ反し、前裁判を改めて公平な宣告をする)する所が多いと、母は喜

び笑ふ。王規父が太夫人に侍するにつけても、洛濱の伏太妃、京兆尹雋不疑の母の事が思ひ出される。

觀燈の盛宴は、ただ謝安が東山の妓女を攜へる古意を逐うて居る。那ぞ陳遵が家の酒宴最中に、後閣

から窮賓を走らしたことを知らうぞ。我は來客があり、京口に滞留して、當日の榮華の事を見ること

が出来なかつたから、ここに空しく賡詩を作る。かく和韻する第七人となつたのである。

翻翻緹騎走香塵。翻翻緹騎香塵に走り、
 激激飛濤射火輪。激激飛濤火輪を射る。
 美酒留連三夜月。美酒留連三夜の月、
 豐年傾倒五州春。豐年傾倒す五州の春。
 安排詩律追強對。詩律を安排して強對を追ひ、
 躡躡歸期爲惡賓。歸期を躡躡して惡賓と爲る。
 墮珥遺簪想無限。墮珥遺簪想ふに限りなし、
 華胥猶見夢回人。華胥猶ほ見る夢回る人。

【字解】(一) 緹騎。漢の制、執金吾の管する所の兵をいふ。緹は赤、赤衣を衣る騎兵。後漢書、百官志に執金吾一人、中二千石、丞一人比千石、緹騎二百人。周禮、注疏に、今時五百緹衣、古兵服之遺色。(二) 香塵。拾遺記に石季倫(石崇、字は季倫)屑沈水之香、如塵末、布象床上、使所愛者踐之、無迹者、賜以眞珠。沈佺期の洛陽道詩に、香塵撲地遙。(三) 激激。韓退之の詩

に、水聲激激風吹衣。【四】火輪。日輪をいふ、韓退之の詩に、火輪飛出客心驚。【五】留連。居つづける。淮南子に、愚夫蠢婦、皆有留連之心。【六】三夜。杜子美が夢李白詩に、三夜頻夢君、情親見君憶。【七】傾倒五州春。鮑照の詩に、能令三君傾倒。顏延年の詩に、望幸傾五州。【八】安排。按排に同じ、程よく加減する。孟郊の詩に、弱力謝剛健、寒策貴安排。【九】強對。吳志、陸遜傳に、劉備今在境界、此強對也。王注には、強對字出晉書とある。【一〇】躡躡。道に疲れる。木玄虛の海賦に、或乃躡躡躡窮波。李太白の詩に、躡躡躡躡。【一一】爲惡賓。西京雜記に、公孫弘爲丞相、故人高賀從之、弘食之脫粟飯、覆以布被、賀怒曰、何用故人富貴、爲脫粟布被、我自育之、弘大慙、賀告人曰、公孫內服貂蟬、外衣麻桌、內厨五鼎、外膳一肴、云何以示天下、於是、朝廷疑其矯焉、弘聞之歎曰、寧逢惡賓、不逢故人。【一二】墮珥遺簪。史記、滑稽傳に、淳于髡言、州閭之會、前有墮珥、後有遺簪。舊唐書に、玄宗每年十月、幸華清宮、國忠姊妹五家扈從、每家爲一隊、遺珥墮珥、珠翠爛爛、芳艷於路。【一三】華胥。云

云。列子、黃帝篇に、黃帝居大庭之館、齋心服形、三日不親政事、晝寤而夢游華胥氏之國。

【詩意】翻翻として鳥の飛ぶやうな緹騎は、香塵の地を撲つて走る。晉の石崇は、沈香を屑にし、其の塵末を床上に布いて、人をして之を踐ましめ、迹のないものをば體の軽いものとなした。此詩は此の故事を借りて、緹騎の輕捷を言つたのである。其の輕捷の狀を形容すると、激しい飛濤が火輪を射るやうであつた。かくて、盛宴に集り、美酒を飲んで留連し、三夜の月を眺める。殊に蘇州は豐年で春の賑ひは、五州を傾ける有様であつた。(東坡の自注に、時、浙西皆以不熟罷燈、惟蘇獨盛とある。)詩律を安排して、強對をなし、疲れて歸る期を失ひ、所謂惡賓となつた。昔、公孫弘が丞相となる時、故人の高賀が訪れた。弘は之に脱粟飯を食べさせ、布の被を衣せたので、賀は怒つて言をなし、又人に告げて、公孫は内に貂蟬を服し、外に麻桌(桌は麻の一種)を衣る。内厨は五鼎、外膳は一肴と言つたので、朝廷では其の矯飾を疑つた。弘は之を聞いて歎じて、寧ろ惡賓に逢ふとも、故人に逢つてはならないと言つたさうである。想ふに、酒宴の席は、定めし連袂踏歌して、墮珥や遺簪の數も限り知られなかつたであらう。この華胥の國に遊んで、猶ほ夢みる人の多いを見るのである。

常潤道中有懷錢塘寄述古五首

常潤道中錢塘を懷ふあつて述古に寄す 五首

古今體詩 常潤道中有懷錢塘寄述古五首

從來直道不辜身。從來直道不辜の身、

得向西湖兩過春。西湖に向つて兩ながら春を過ぐるを得。

沂上已成曾點服。沂上已に成る曾點の服、

泮宮初采魯侯芹。泮宮初めて采る魯侯の芹。

休驚歲歲年年貌。驚くを休めよ歲歲年年の貌、

且對朝朝暮暮人。且つ對す朝朝暮暮の人。

細雨晴時一百六。細雨晴るる時一百六、

畫船鼉鼓莫違民。畫船鼉鼓民に違ふこと莫れ。

服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。【五】泮宮初采云云 泮宮は古、諸侯の學校、東西門以南は、水

をめぐらし、以北は、水なし。故に沂といふ。詩、魯頌、泮水に、思樂泮水、薄采其芹。【六】歲歲年年 劉希夷の詩に、年年歲歲

花相似、歲歲年年人不同。【七】朝朝暮暮 宋玉の神女賦に、朝朝暮暮、陽臺之下。【八】一百六 元微之が連昌宮詞に、初過寒食

一百六。宋、葛立方の韻語陽秋に、自冬至一百有五日、至寒食、或謂、自冬至至清明、凡七蒸（氣に同じ）、至寒食、止一百三日云

云。荆楚歲時記に、寒食合、在清明前二日、亦云、去冬至一百六日。【九】鼉鼓 鼉（鼉の一種）の皮をはつた太鼓。一説に鼉の鳴

くに象る。詩、大雅に、鼉鼓逢逢、矇瞍奏功。

【題義】此詩は、熙寧七年、三月の作。常州・潤州の道中で、錢塘を懷うて陳述古に寄せたものであ

る。

【詩意】世道が衰へて、人情枉れるを好む。故に道を直うして人に事へれば、何れの國に往きても三

たび黜げられることがなからうぞ。黜けられる。述古は是れまで、道を守つて違はなかつたから、世

に容れられない。併し、固より罪がない身である。それで悠悠西湖に向つて春を送ることが出来たの

である。（述古は、五年の八月に杭州に來り、七年に至つたから、二度の春を過した譯である。）曾點は

いふ、暮春三月、郊遊の好時節に、春衣も出來て、冠者（元服のすんだ青年）五六人、童子六七人を

伴ひ、城南なる沂水の濱に出でて浴し、舞雩の小高い處に上つて、風に當つて、涼を納れて歸らうと。

述古も浴沂風詠して、悠悠自適、樂しく日を暮らされるのである。泮水の學問所、人はこれ程、結構

な處はないと思ひ慕つて、集つて見物する。（芹を取るにかこつけて見物する。そして泮宮には魯の倍

公が出来るから、魯侯の芹と言つたのである。驚くを休めよ、年年歲歲、顔色が改まつて、人の同

じでないことを。暫くまあ、朝夕我に事へる人人に對するのである。（何焯いふ、當緣述古有家奴一

故上也と。）細雨の晴れるときは、冬至より一百六日の清明であるが、其の時、美しい船に乗り、鼉鼓

を打ちて歡樂するのみで、民に違うてはならないと思ふ。

【餘録】陳襄の古靈集に、東坡が京口憶西湖寒食出遊一見寄詩を和したのが載つて居る。即ち乞得

湖山養病身、花時曾共憶行春、嚶鳴幽鳥還遷木、鬢沸清泉復采芹、皂蓋尋芳邱有李、彩樓觀戲

巷無人、錦袍公子歸何晚、獨念溝中菜色民といふのである。

草長江南鶯亂飛。草長うして江南鶯亂飛す、
 年來事事與心違。年來事事心と違ふ。
 花開後院還空落。花は後院に開いて還空しく落ち、
 燕入華堂怪未歸。燕は華堂に入り未だ歸らざるを怪まん。
 世上功名何日是。世上の功名何の日か是なる、
 樽前點檢幾人非。樽前點檢すれば幾人か非なる。
 去年柳絮飛時節。去年柳絮飛ぶ時節、
 記得金籠放雪衣。記し得たり金籠雪衣を放ちしを。

【字解】【一】草長江南鶯亂飛 南史、邱希範の書に、莫春三月、江南草長、雜花生園、羣鶯亂飛。【二】年來事事與心違 魯康の幽憤詩に、事事與心違。【三】樽前點檢 白樂天の詩に、樽前百事皆依舊、點檢惟無薛秀才。點檢は官名、五代より宋初に至るまで、殿前都點檢あり、侍衛扈從の事を掌る。【四】金籠放雪衣 東坡の自注に、杭人以放

【詩意】暮春の好時節となつて、風和らぎ、日も煦かな時分、江南は一面に芳草長じ、色の花が園を飾り、羣鶯も亂れ飛んで居る、然るに我は年頃、事事心と違つて、樂しくもない。花は後の院に開いて、また空しく落ちる。燕は美しい堂に入つたまま未だ歸らないのを怪しむ。(王文誥いふ、此聯は李太白の鳥歌後院、花舞前簷より化し出せりと。)世上の功名は紛紛、何れの日にか定まる。白樂天の詩に花下忘歸因美景、樽前勸醉是春風とある。樽前の春風は、相變らず醉を勸めて居るが、殿前の都點檢爲太守壽。唐諱賓録に、天寶中、嶺南獻白鸚鵡、養之宮中、歲久、頗聰慧、通曉言詞、上及貴妃、呼爲雪衣女。ここに鸚鵡呼んで雪衣となすは、故事を借用するなり。倦游録に、王丞相生日、羣大卿籠雀鸚鵡造相府以獻、摺笏開籠一放之。

【餘錄】陳襄は此詩を和して、春陰漠漠燕飛飛、可惜春光與子違、半嶺烟霞紅旆入、滿湖風月畫船歸、緜生一曲人何在、遼鶴重來事已非、猶憶去年題別處、鳥啼花落客沾衣。宋、趙令時の侯鯖録に、述古飲子容周韶、泣求落籍詩曰、隴上巢空歲月驚、忍看回首自梳翎、開籠若放雪衣女、長念觀音般若經、韶時有服衣白、一坐嗟歎、遂落籍と見ゆ。

浮玉山頭日日風。浮玉山頭日日の風、
 湧金門外已春融。湧金門外已に春融。
 二年魚鳥渾相識。二年魚鳥渾て相識り、
 三月鶯花付與公。三月鶯花公に付與す。
 剩看新翻眉倒暈。剩へ看る新翻の眉暈を倒にするを、
 未應泣別臉消紅。未だ應に別に泣く臉紅を消すべからず。
 何人織得相思字。何人か相思の字を織り得て、
 寄與江邊北向鴻。江邊北向の鴻に寄與せん。

【字解】【一】浮玉山 題に常潤道中とあれば、浮玉は自ら金山を指す。【二】日日風 劉夢得の詩に、山頭日日風和雨。【三】湧金門 杭州西城の三門は、曰く清波、曰く錢塘、曰く湧金、皆、西湖に臨む。杭州圖經に、湧金門屬錢塘縣、去縣三里半。【四】春融 春の氣ののどかなるをいふ。沈佺期の詩に、烟景共春融。【五】魚鳥渾相識 世説に、晉、簡文帝入華林園云、鳥獸禽魚、

自來親人。【六】倒暈。十眉圖内に在ること、潘確類書に見ゆ。【七】臉消紅。白樂天が王昭君の詩に、滿面胡沙滿鬢風、眉消殘黛、臉消紅。【八】織得相思字。晉書、列女傳に、寶滔妻蘇氏、思酒織錦、爲三回文詩以贈。李義山の詩に、欲織相思花、寄與遠。【九】北向鴻。月令に、季冬之月、雁北向。漢書に、蘇武留匈奴、不得歸、使者謂單于、言、天子射上林、得雁、足有係三帛書、言武等在某澤中、單于驚召武、官屬隨武還。

【詩意】浮玉山頭の風は、毎日吹いて來るが、杭州の湧金門外は、既に春景色である。日日の風といひ、已に春融といふのは、京口（今の江蘇丹徒縣治）には風が多いから、武林（錢塘縣に武林山がある。今、杭縣を武林と通稱す）の春景色の融らげるには及ばない。ここに居ること已に二年、魚や鳥とも、何時しかお馴染みになつた。（韓退之の詩に、朝游孤嶼南、暮游孤嶼北、所以孤嶼鳥、與公盡相識とあるも、思ひ合はさせる。）かくて陽春三月、鶯鳴き花咲ふ烟景は、特にあなたに付與したやうにも思はれる。（紀昀いふ、説得大雅と。）おまけに、當時の新しい眉様に、倒暈といふがある。倒暈の新眉様は、横雲、卻月、遠山、蛾眉の外に在る。東坡また嘗て詩あり、云ふ倒暈連眉秀嶺浮と。此を謂つたのであらう。其の暈を倒にする眉の新様を見るも別れに泣く臉（目の下、頬の上に當る）は、少しも紅の色を消すことが出来ない。何人かかの寶滔が妻の蘇氏のやうに相思の回文詩を織り成し、そして蘇武の故事のやうに江邊を北に向つて行く雁に託して切な音信を傳へるものぞ。儘にならぬは浮世である。

國豔天燒酒半酣。

國豔天燒酒半ば 酣なり、

去年同賞寄僧簷。

去年同じく賞して僧簷に寄す。

但知撲撲晴香軟。

但知る撲撲として晴香軟かなるを、

誰見森森曉態嚴。

誰か見ん森森として曉態嚴かなるを。

穀雨共驚無幾日。

穀雨共に驚く幾日もなきを、

蜜蜂未許輒先甜。

蜜蜂は未だ許さず輒ち先づ甜きを。

應須火急回征棹。

應に須らく火急征棹を回すべし、

一片辭枝可得黏。

一片枝を辭す黏するを得べけんや。

【字解】【一】國豔 宋の張翥義が貴耳集に、壽皇使畫工寫帶、牡丹一枝、命徐本中作贊、云、一枝國豔、兩鬢東風。韓琦の芍藥詩に、國豔天姿相照射。東坡の梅花詩に、天香國豔肯相顧、知我酒熱詩清溫。陸游の杏花詩に、忽逢國豔帶三卯酒、坐覺天地無餘春。【二】撲撲 吳融の詩に、濃翠撲撲撲。撲は拂ふ意。岑參の詩に、花撲玉鉅一春酒香。【三】森森 杜子美の詩に、丞相祠堂

何處尋、錦官城外柏森森。樹木茂盛の貌をいふが、こゝは整肅の義に用ふ。【四】穀雨 善い雨。五代史に、穀雨三月中。【五】蜜蜂云 唐の羅隱（字は昭諫、錢塘の人）の蜜蜂の詩に、不知辛苦爲誰甜。【六】火急 唐の武后の詩に、明朝游上苑、火急報春知。【七】一片辭枝云 杜子美の詩に、一片花飛減却春、風飄萬點正愁人。殷文圭の詩に、花黏繁鬢錦。

【詩意】李正封が牡丹の詩に、天香夜染衣、國色朝酣酒とあるが、國豔の少くてなまめかしい姿は、酒半ば 酣なるやうである。去年も同じく賞して僧の簷に寄つたが、但、撲撲として晴香の軟かなるを覺えた。誰も其の森森として曉態の嚴かなるを見ないやうである。穀雨が下つて、共に驚く花の幾日もなきを。蜜蜂はまだ花の甜きを許さないやうである。まさに急いで征く舟を回すがよい。一片花

が飛んで枝を辭したなら、再び黏（ねばり著く義）することが出来ないであらう。（紀昀は此詩を評して、多不_レ成_レ語と言つて居る。）

【餘録】陳襄の古靈集に、東坡が京口憶_二吉祥寺牡丹_一見_レ寄詩に和したのが載つて居る。即ち新接_二枝頭_一色倍添、馬蹄尋處帽欹_レ簷、春江別與_二鉛華_一麗、佛地偏資_二好相_一嚴、紅蕊欲_レ開丹未_レ渥、素香堪_レ茹雪非_レ甜、詩翁何事辜_二眞賞_一、不_レ許浮根浪葉黏といふ詩である。

惠泉山下土如_レ濡 惠泉山下土濡_レふが如し、

陽羨溪頭米勝_レ珠 陽羨溪頭米珠に勝る。

賣_レ劍買_レ牛吾欲_レ老 劍を賣り牛を買つて吾老いんと欲す、

殺_レ雞爲_レ黍子來_レ無 雞を殺し黍を爲つて子來ること無し。

地偏不信_レ容高蓋 地偏にして高蓋を容るるに信せず、

俗儉眞堪_レ著腐儒 俗儉にして眞に腐儒を著くるに堪へたり。

莫怪江南苦留_レ滯 怪む莫れ江南苦だ留滯して、

經營身計一生迂 身計を經營する一生迂なるを。

【字解】_一 惠泉山下云云 惠

山泉は、常州に在る。詩、縣縣篇の疏に、土堅而濡濡。

_二 陽羨溪頭云云 陽羨米、亦、常州の事。太平

寰宇記に、常州の宜興縣は、本の陽羨縣とある。周處風土記に、本

名、荆溪、陽羨古城在今縣南二一名蝦虎城、荆溪在縣南二十步、漢志云、

中江首_二蕪湖_一、東至陽羨、入_レ海、即此溪也。

_三 賣_レ劍買_レ牛 漢書、循吏傳に、龔遂爲_二渤海太守_一、見_レ齊俗

奢修、好_二末技_一、不_レ田作、通躬奉_二以_レ儉約_一、勸_二民務_二農桑_一、民有_二帶_二持刀劍_一者、使_二賣_レ劍買_レ牛、賣_レ刀買_レ犢、吏民皆富實。

_四 殺_レ雞爲_レ黍 論語の微子篇に、止_二子路_一宿、殺_レ雞爲_レ黍而食_レ之。また、文選、范雲贈_二張謐_一詩に、恨_レ不_レ具_二雞黍_一、得_レ與_レ故人_一揮_二李善_一の注に後漢書を引いて、山陽范式、字巨卿、與_二汝南張元伯_一爲_レ友、春別_二京師_一、以_レ秋爲_レ期、至_二九月十五日_一、殺_レ雞作_レ黍、二親笑曰、山陽去_レ此幾千里、何必至、元伯曰、巨卿信士、不_レ失_レ期者、言未_レ絕而巨卿至。

_五 地偏 陶淵明の詩に、心遠地自偏。

_六 容_二高蓋_一 漢書に、子公曰、少高_二大閭門_一、令_レ容_二駟馬高蓋車_一。

_七 腐儒 漢、高祖は酈食其を媿罵して曰く、腐儒、爲_二天下_一、安用_二腐儒_一。

_八 留滯 魏志、管輅傳に、尋_レ聲投_レ響、音無_二留滯_一。

_九 經營身計 一身上の計をはかり營む。詩、大雅に、經_二始靈臺_一、經_二之營_一之。身計は身圖といふに同じ。王禹偁の詩に、官途多_二齟齬_一、身計頗_二悲涼_一。

【詩意】東坡の熙寧中、杭州に倅であつた日は、或は惠泉山に、或は陽羨溪に、詩を賦し、居を卜する。惠山の泉は滾滾として山下の土は濡へるやうである。陽羨溪の米は白くて珠のやうである。久しい間、書劍江湖に遊んだが、今は劍を賣つて牛を買ひ、農耕に就かうとする。そして此地に老しようとする。雞を殺し、黍の飯を爲つて、人を饗應しようとしても、君は見えない。地が邊鄙であるから、貴人の來訪を得ない。高蓋の車を容れることが出来ないと言つたのは、李賀が高軒過の意を用ひたのである。（高軒は高い軒車をいふ。唐書の文藝傳に據ると、李賀字は長吉、七歳にして辭章を能くす。韓愈も皇甫湜も、初、聞いて未だ信じなかつた。其の家に過ぎり、賀をして詩を賦せしむ。筆を援つて輒ち就り、素構の如くであつた。そして自ら目して高軒過といつたので、二人は大に驚いた。是から有名になつたといふことである。）土地が既に偏、風俗も亦儉であるから、眞に我が如き腐儒を處くに足るのである。江南に留滯することが久しく、一身の計圖を爲すことが至つて迂拙であること

を怪しみなさるな、(王文誥いふ、東坡是時初至荆溪、此詩之意、因舊與蔣之奇有卜居陽羨之約、而發、非買田時也。蔣之奇は、字は穎叔、宜興の人、東坡と同年の進士である。嘗て東坡と與に陽羨に卜居するの約を定めたこと、名高い。官は、觀文殿學士知杭州に至つた。)

杭州牡丹開時、僕猶在常潤、周令作詩見寄、次其韻、復次一首、送赴闕

杭州牡丹開く時、僕猶は常潤に在り、周令詩を作りて寄せらる、其の韻に次し、復一首を次し、闕に赴くを送る

羞歸應爲負花期。歸るを羞づるは應に花期に負くが爲なり

已見成陰結子時。已に見る陰を成し子を結ぶ時。已に成りし、

與物寡情憐我老。物と情寡くして我が老いたるを憐み、

遺春無恨賴君詩。春をして恨みなからしむるは君が詩に

玉臺不見朝酣酒。玉臺見ず朝酣の酒、頼れり。

金縷猶歌空折枝。金縷猶ほ歌ふ空しく枝を折る。

從此年年定相見。此より年年定ず相見ん、

【字解】(一) 成陰結子 杜牧

之の詩に、自是尋春去較遲、不須

惆悵怨芳時、狂風落盡深紅色、綠葉

成陰子滿枝。(二) 玉臺 天帝の

居所、漢書、禮樂志に、遊園闔觀

玉臺。閭闔は、天界の最初の門、轉

じて宮門の稱となる。(三) 朝酣酒

李正封が詩に、國色朝酣酒、天香夜

染衣。(四) 金縷猶歌云云 杜牧

之が杜秋娘詩序に、杜秋娘、金陵女

欲師老圃問樊遲。老圃を師として樊遲に問はんと欲す。

云、勸君莫惜金縷衣、勸君須惜少年時、花開堪折直須折、莫待無花空折枝。【五】師老圃問樊遲 論語、子路篇に、樊遲請學稼、子曰、吾不如老農、請學爲圃、子曰、吾不如老圃。圃は蔬菜を種うるをいふ。老圃は、年久しく實踐し來つた農作をいふ。

【題義】此詩は熙寧七年四月の作である。周邠が杭州牡丹の詩を作つて寄せられたのに次韻し、また一首を次して闕に赴くを送る。前のは、牡丹を賦したものであり、後のは、闕に赴くを送つたものである。

【詩意】花見の季節に、春を尋ねなかつたので、今更、歸るのも羞かしい。已に花も散り盡して、緑葉は陰を成し、木の實も枝に満ちたではないか。我も老い去つて、物に接するも情が寡く、花も昔となつた。ただ春をして恨みなからしめるのは、全く君の寄せられた詩の賜である。玉臺見ず朝酣の酒といふは、玄宗の開元中、内殿で花を賞して宴を開いたとき、上は程修己(字は敬之)に問うて曰く、京師、牡丹を傳唱するものがあらうが、誰のが第一であるかと。對へていふ、李正封が詩に、國色朝酣酒と。時に楊貴妃は方に寵せらる。因つて妃に謂つて曰く、粧鏡臺前飲一紫金盞、則正封之詩可見と。此の故事に據つたものである。又、金縷猶ほ歌ふ空しく枝を折るといふのは、杜秋娘の故事である。年十五で李錡の妾となり、錡の爲に詞を唱へていふ、勸君莫惜金縷衣、勸君須惜少年時、花開堪折直須折、莫待無花空折枝と。是からは毎年必ず御目に懸ることが出来ようと思ふ。老い

た鳥作りの人でも師として樊遲と問答でもしたいものである。

莫負黃花九日期。黃花九日の期に負くこと莫れ、

人生窮達可無時。人生の窮達時無かるべし。

十年且就三都賦。十年且つ就す三都の賦、

萬戸終輕千首詩。萬戸終に輕し千首の詩。

天靜傷鴻猶戢翼。天靜にして傷鴻猶ほ翼を戢め、

月明驚鵲未安枝。月明かにして驚鵲未だ枝に安んぜず。

君看六月河無水。君看よ六月河に水無く、

萬斛龍驤到自遲。萬斛の龍驤到ること自から遲きを。

有命、吉凶由人。【四】三都賦 晉書に、左思(字は太冲)欲賦三都、乃詣著作郎張載、訪岷邛之事、遂構思十年、門庭藩溷、皆著紙筆、遇得一句、即便疏之、自以所見不博、求爲祕書郎、及賦成、豪貴之家、競相傳寫、洛陽爲之紙貴。【五】萬戸終輕千首詩 杜牧之が寄張詰詩に、誰人得似張公子、千首詩輕萬戸侯。【六】傷鴻 戰國策に、有鴻雁從東方來、更羸引弓虛發而下之、魏王曰、射可至此乎、更羸曰、此孽也、其飛徐而鳴悲、故瘡未息而驚心未去也、聞弦音烈而高飛故瘡限也。唐、傳奕傳に、傷弓之鳥驚三曲木。【七】戢翼 郭璞の詩に、戢翼棲椽椹。【八】月明驚鵲云云 魏武樂府に、月明星稀、烏鵲南飛、遶樹三匝、無枝可依。【九】龍驤 大舟をいふ。龍の騰驤の如きより名を得。又、將軍の名號にも用ふ。晉、王濟を以て龍驤將軍と

なし、吳を伐つ。

【詩意】黃花は晩節が香しい。凡そ花は春を以て盛に、秋を以て實る。獨り、菊は秋に花さいて、風霜揺落の時に茂る。此れ其の時を得る、他の花に異つて居る。仙人費長房は桓景に謂つていふ、九月九日高きに登つて菊花の酒を飲むべし、以て災を消すことが出来ると。陶令(陶淵明)は歸るを思つて未だ歸ることが出来なく、黃花の東籬を繞るを想つて已まなかつたのである。それで黃花九日の節句に負いてはならないと言つたのである。人生の窮達は命であるが、吉凶は人に由る。凶を去り吉に就くべきである。昔、左太冲は、十年思を構へて三都の賦を作つた。賦が出来ると、人争うて之を傳寫し、洛陽の紙價も貴くなつたといふことである。して見ると、萬戸侯も、千首の詩よりも輕い。人は必ずしも富貴利達を求めない。併し弓に傷ける鳥は、曲木を見ても驚く。天が靜かであつても、傷いた鴻は翼を戢める。月明にして驚いた鳥鵲は、枝に安んじない。何れの處にか安心立命を求めようぞ。君看よ、六月の炎暑、河が水も無く、萬斛の大舟、到ること自から遲きことを。援つて以て濟ることがないと、大才も進み難い。河に水がなくなつて龍驤の舟の行くことが出来ないやうなものである。ここに此の言葉を述べて君が闕に赴くを送るのである。

常州太平寺觀牡丹

武林千葉照觀空。武林千葉觀空を照す、

古今體詩 常州太平寺觀牡丹

【字解】太平寺 毘陵志に、

別後湖山幾信風。別後湖山幾信の風。

自笑眼花紅綠眩。自ら笑ふ眼花紅綠眩し、

還將白首對靚紅。還白首を將て靚紅に對す。

西十五里に在る。漢書に、錢塘縣有武林山、武林水所出。今、杭縣を通稱して武林といふ。【三】觀空 杭州、吉祥寺の閣名。【四】幾信風 歲時記に、江南自初春至初夏、五日一番風候、謂之花信風、梅花風、最先、楝花風、最後、凡二十四番。唐詩に、二十四番花信風。春の風を得る、風、信ならざれば、其の花成らざるより、花信風と名く。【五】眼花 目がかすむをいふ。杜子美の飲中八仙歌に、知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠。【六】靚紅 牡丹の別名。煬帝、西苑を闢き、易州牡丹二十種を進む、靚紅、靚紅等の名あり。

太平講寺在郡東門外、齊高祖創建、

乾元(唐の年號)中、僧法僧始大之、

宋改太平興國禪寺。【二】武林

山の名。即ち靈隱山で、浙江杭縣の

【題義】此詩は、熙寧七年三月、常州に至り、太平寺に遊び、牡丹を觀て作つたのである。

【詩意】武林山の八重ざきの花は、觀空閣を照らして美事である。一別の後、湖山は幾度の花信風があつたらう。自ら笑ふ、眼がかすみて、紅・緑の色が眩するを。そして又、白首の此の身が紅の牡丹に對つて居るのを。

遊太平寺淨土院觀牡丹中有淡黃一朵特奇 爲作小詩

太平寺淨土院に遊び牡丹を觀る、中に淡黃一朵ありて特に奇、爲に小詩を作る

醉中眼纈自爛斑。醉中眼纈自から爛斑、

天雨曼陀照玉盤。天曼陀を雨らして玉盤を照す。

一朵淡黃微拂掠。一朵淡黃微しく拂掠す、

靚紅魏紫不須看。靚紅魏紫看るを須みず。

【字解】【一】眼纈 眼に花を生ずるをいふ。宋の孫觀(字は仲益)の詩に、眼纈眩紅綠。【二】爛斑 まだらなるをいふ。東坡の詩に曉得異石青爛斑。皮日休の詩に、爛斑似帶湘娥泣。【三】雨曼陀 法華

經に、佛說法已、入於無義量處三昧、是時天雨曼陀羅花。大藏法數に、梵語曼荼羅華、言適意、又曰白華。【四】玉盤 漢武內傳に、以玉盤盛仙桃七顆。【五】拂掠 韓退之の戲題牡丹詩に、雙燕無機還拂掠、遊蜂多思正經營。【六】靚紅魏紫 牡丹の別名であること、歐陽花譜に見ゆ。牡丹譜に、姚黃・紫魏花、以姓著、青州・丹州・延州紅、以州著。姚黃は、姚家に黃牡丹あり。魏紫は、魏家の紫牡丹をいふ。

【題義】此詩も熙寧七年三月の作。外集に題していふ、同狀元行老學士秉道先輩、遊太平寺淨土院、觀牡丹、中有淡黃一朵、特奇絶、爲作小詩一と。

【詩意】醉中眼に花が出来て、ちらちらと紅の色や緑の色を眩せしめる。天が曼陀羅華を雨らして玉の盤を照らした。(曼陀羅華は白蓮華と譯する。微妙香潔であつて、見聞するものをして、身神を快適ならしめる。)一朵の淡黃は、微しく掠めて眼前を過ぎる、特に奇絶で、之に對すれば、靚紅も魏紫も看るを須みない。(靚紅も魏紫も花の奇なるものである。)

無錫道中賦水車

無錫道中水車を賦す

翩翩聯聯銜尾鴉

翩翩聯聯尾を銜む鴉

犖犖确确蛻骨蛇

犖犖确确骨を蛻する蛇

分疇翠浪走雲陣

疇を分つ翠浪は雲陣を走らせ

刺水綠鍼抽稻芽

水を刺す綠鍼は稻芽を抽く

洞庭五月欲飛沙

洞庭五月沙を飛ばさんと欲す

鼃鳴窟中如打衙

鼃は窟中に鳴いて打衙の如し

天工不見老翁泣

天工見ず老翁の泣くを

喚取阿香推雷車

阿香を喚取して雷車を推す

【字解】無錫 史記に、太伯始居吳、即ち此地。漢志に、會稽郡下有無錫縣。今の江蘇、蘇常道。

【一】水車 東坡いふ、水車之利、不レ及雷車所レ需者廣也。【二】犖犖确确 山に大石の多い貌。韓退之の詩に、山石犖犖行徑微。【三】翠浪 孟郊の詩に、晴湖瀉翠嶂、翠浪多萍蘚。【四】雲陣 孔稚珪の表に沿江入漢、雲陣萬里。【五】鼃 洞庭 太湖の洞庭を指す。【六】鼃

鼃の一種、江淮の間、鼃の鳴くこと鼓の如きより、之を鼃更といふ。晉安海物記に、鼃宵鳴如桴鼓、今江淮間、謂鼃鳴爲鼃鼓。【七】鼃

【題義】此詩は熙寧七年五月の作。紀昀いふ、節短勢險、句句奇矯と。王文誥いふ、公詩有洞庭五月欲飛沙句、據是可知常潤賑饑事竣、歸舟已在五月矣と。【詩意】蜀の馬鈞は、巧思絶世にして、嘗て翻車を作り、兒童をして之を轉じて灌がしむ。水は自か

ら覆り、更に出で更に入る。翩翩聯聯として尾を銜む鴉のやうである。又、骨を脱した蛇のやうでもある。(江浙間の人、水車を龍骨車といつて居る。)見渡すと、疇を分つ翠色の浪は、雲陣を走らすやうであり、水を刺す緑の鍼は、稻の芽を抽くやうである。洞庭湖の邊も五月に水が涸れて、沙を飛ばさうとして居る。鼃は巖窟の中に鳴いて鼓を桴つ衙に異ならない。(埤雅に、鼃欲雨則鳴とある。)かくて天公は老翁の泣くのも顧みず、阿香を喚び取つて雷車を推さしめた。(これは昔、姓を周といふもの、都に出でて、途中日暮れ、道傍の新しい草小屋に宿つたとき、一更の時分、戸外に小兒の阿香と喚ぶ聲があつた。阿香は此の小屋の女子である。女子は乃ち辭し去つた。明朝、其の宿處を視れば、一の新塚であつたといふことが搜神後記といふ書に見えて居る。此の故事に據つたのである。)

成都進士杜暹伯升出家名法通往來吳中

成都進士杜暹伯升出家して法通と名け、吳中に往來す

欲識當年杜伯升

當年の杜伯升を識らんと欲せば、

飄然雲水一孤僧

飄然たる雲水の一孤僧

若教俛首隨韁鎖

若し首を俛して韁鎖に隨はしめば、

料得如今似我能

料り得たり如今我が能に似たることを。

【字解】進士 唐宋の時、發解舉子、皆進士と稱す。殿試中るを及第出身となす。發解舉子は、州縣の試験で、優等の者に其の地方の官廳から、解(公文書)を發達し、更に京師で試験するをいふ。

蓋簪錄に、解、本文狀之名、唐時舉子赴京、本州給解、故謂之披解・發解。【三】吳中、今の江蘇吳縣、古、亦、吳中と稱す。春秋の時、吳の國都たり、故に名く。史記に、項梁殺レ人、與レ籍、避レ仇於吳中。【三】飄然雲水、溫庭筠の詩に、飄然隨二釣艇、雲水是天涯。豐干禪師の詩に、一身如二雲水、悠悠任二去來。【四】輻鎖、輻は馬を制し止める輻。漢書、絳傳に、班嗣曰、貫二仁義之羈絆、繫二名聲之輻鎖。白樂天の詩に、身去輻鎖累、耳辭朝市喧。

【題義】此詩は熙寧七年正月の作である。本集に、贈二法通一詩に跋を書していふ、僕偶云、通師子不レ脱二屣場屋、今何爲乎。柳子玉云、不レ過二似二我能一と。

【詩意】蜀の成都の杜遷伯升は、州縣の試験に、優等で進士となつたが、出家して法通と名け、江蘇吳中に往來して居る。當年の杜伯升の眞面目を識らうとせば、雲水僧の法通に在つて、進士及第の伯升にはない。もし雲水の自由を得ないで、官遊して他の束縛を受けるやうになつたら、只今の我等が能に似たるのみであると思はれる。(東坡の自注に、柳子玉云、通若及第不レ過二似二我と。)

虎邱寺

虎邱寺

入門無平田。石路細穿嶺。

門に入れば平田なく、石路細にして嶺を穿つ。

陰風生澗壑。古木翳潭井。

陰風澗壑に生じ、古木潭井を翳す。

湛盧誰復見。秋水光耿耿。

湛盧誰か復見ん、秋水光耿耿。

鐵花秀巖壁。殺氣噤蛙黷。

鐵花巖壁に秀で、殺氣蛙黷を噤む。

幽幽生公堂。左右立頑礦。

幽幽生公の堂、左右に頑礦を立たしむ。

當年或未信。異類服精猛。

當年或は未だ信せず、異類も精猛に服す。

胡爲百歲後。仙鬼互馳騁。

胡爲ぞ百歳の後に、仙鬼互に馳騁する。

窈然留清詩。讀者爲悲哽。

窈然として清詩を留む、讀者爲に悲哽す。

東軒有佳致。雲水麗千頃。

東軒に佳致あり、雲水千頃に麗し。

熙熙覽生物。春意破淒冷。

熙熙として生物を覽、春意淒冷を破る。

我來屬無事。暖日相與永。

我來つて無事に屬す、暖日相與に永し。

喜鵲翻初日。愁鳶蹲落景。

喜鵲は初日に翻へり、愁鳶は落景に蹲る。

坐見漁樵還。新月溪上影。

坐に見る漁樵の還るを、新月溪上の影。

悟彼良自哈。歸田行可請。

彼を悟れば良に自ら哈ぶ、歸田行く、請ふべし。

【字解】【一】虎邱、山の名、一名は海湧山、江蘇吳縣の西北七里に在る。相傳ふ、闔閭此に葬る。三日にして虎、其上に踞す、故に名く。唐の時、虎を諱んで改めて武丘といふ。吳越春秋に、闔閭葬二國西、發二五都之士十萬人二作冢、銅棺三重、水銀爲二池、金玉爲二鳧雁、扁諸之劍三千、榮郢魚腸在焉、葬後三日、金精之氣、上揚化爲レ虎、踞其墳、故號二虎丘。【二】湛盧、吳越春秋に、越王允常使二歐冶子鑄二五劍、曰純鉤・湛盧・豪曹・魚腸・巨闕、以二湛盧獻レ吳、吳公子光以弒二其君僚、湛盧夜飛入レ楚。【三】秋水光耿耿

秋水は刀の異名。越絶書に、太阿之劍、其色如秋水。耿耿は光の明かなこと。晉語に、其光耿々於民矣。越絶書に、王取純鉤、薛燭觀其光、渾渾如水之溢於塘。又、風胡子曰、欲知秦阿觀其氣、嶽嶽翼翼、如流水之波。【四】鐵花秀巖壁。寺中に鐵花巖が劍池の側に在る。秀、當に繡に作るべし。【五】噤蛙。噤蛙は青蛙、金線蛙ともいふ。噤は口を閉ぢる。【六】幽幽生公堂。幽幽は深遠な貌。詩、小雅に、幽幽南山。十道四蕃志に、生公、異僧竺道生也、講經於此、人無信者、乃聚石爲徒、與談至理、石皆點頭、寺有生公禪堂。釋氏稽古略に、羅什法師弟子道生袖手來晉、入平江虎邱山、鑿石爲三聽徒、講涅槃經、至闍提有佛性一處、曰、如我所說義、契佛心否、羣石皆首肯之。【七】馳騁。考工記に、終日馳騁。【八】竊然。深くして暗い。列子、力命篇に、竊然無際、天道自會。【九】留清詩。幽獨君の詩は、青松多悲風、蕭蕭清且哀、白日徒昭昭、不照長夜臺。李道昌は刺史と爲つて其事を奏す。陸龜蒙、皮日休、松陵唱和、皆之に及ぶ。【一〇】東軒有佳致。寺中に佳致軒あり、池堂の東に在る。或はいふ、佳致軒は、後日、東坡の詩に因つて作つたものと。【一一】照照。和らぐ貌。老子に衆人熙熙如享太牢。【一二】相與永。杜子美の詩に、藜藿雖披去、天水與相永。【一三】良自怡。文選、吳都賦の注に、楚人謂相笑爲怡。孟東野の詩に、靜言還自怡。【一四】歸田。官を罷め、郷に歸つて農業を營む。陳の沈炯（字は禮明）の詩に、閉門窮巷裏、靜掃吟歸田。

【題義】此詩は、熙寧七年五月、東坡が金閭（今、蘇州を通稱して金閭といふ）に至り、虎邱寺に遊んだ時の作である。紀昀いふ、通體精神と。金閭は、一に金昌に作る。江蘇吳縣閭門内に在る。舊、金閭亭があつた。劉宋の時、徐羨之は廢帝を金昌亭に弑した。

【詩意】蘇州の虎邱山に遊ぶ。先づ山門に入ると、平田もなく、石路は細に、嶺を穿つて居る。さびしく闇い風が谷川や谷底に生ずる。澗は山と山とに夾まれた水、壑は水の落ちこみを受ける深い溝。元和郡縣志に據ると、虎邱山は、閭閻を葬つた處であるから、秦の始皇帝は之を鑿して、其の珍異を求めたが、所在が知れなかつた。鑿つた所は、今は深い澗をなして居る。太平寰宇記に據ると、山澗

は、是れ孫權が發掘して閭閻の寶器を求めし處。澗側に平石があつて、千人を容れることが出来る。又、古い木が潭井（深い井戸）を翳して居つて、かの名高い湛盧の劍は、嘗て見たものはない。ただ秋水の光が耿耿たるのみである。（ここは刀の異名でなく、秋の水の意、莊子、秋水篇に、秋水時至、百川灌河。吳越春秋に據るに、楚昭王、臥して寤め、湛盧の劍を牀に得、風胡子を召して問ふ。風胡子曰く、臣聞く、吳王は越の獻せし所の寶劍三枚を得、一に曰く魚腸、二に曰く磐郢、三に曰く湛盧。魚腸の劍は、己に用ひて吳王僚を殺す。磐郢は以て其の死女を送る。今、湛盧は楚に入るなりと。）寺の中には、劍池の側に鐵花巖といふがある。殺氣が青蛙をも噤ましめる。（紀昀いふ、十字精采。）又、奥深い生公の禪堂には、左右に頑礪を立てて居る。生公は異僧竺道生で、經を此處で講じたが、誰も信じなかつたから、石を聚めて徒となして、與に至理を談じた。すると、石は皆、點頭したといふことである。其の頃、或は信じなかつたであらうが、事實、異類も生公の精猛に服したのである。胡爲ぞ百歳の後に、仙と鬼とが互にかけ走つて居る。（仙といふのは、清遠道士と沈恭子とである。鬼といふのは、幽獨君である。清遠道士は、沈恭子と同じく虎邱寺に遊んで作つた詩がある。商周及び近代二千年の事を歴論し、顏真卿は、之が爲に石に刻した。）鬼の幽獨君にも詩がある。讀むもの、爲に悲しみ哽ぶ。寺中には、佳致軒といふが池塘の東に在る。水や空、空や水、雲と水とが千頃の廣きに連つて麗はしい。熙熙として和らぐ生物を覽るにつけても、春意が凄冷を破る。我は此處に來つて無事である。暖日相與に永い。喜ぶ鳥鵲は朝日に翻へり、愁へる鳶は夕暮に蹲る。坐に漁人や樵夫の還るを見る。

新月溪上の影、彼を悟れば良に哈ぶべきである。故山に歸つて田を耕すは、我が願ひであるから、早晩さうしたいと思ふ。

蘇州閭邱江君二家雨中飲酒二首

蘇州閭邱江君二家雨中に酒を飲む 二首

小圃陰陰徧灑塵。小圃陰陰として徧く塵を灑ぎ、

方塘激激欲生紋。方塘激激として紋を生せんと欲す。

已煩仙袂來行雨。已に仙袂を煩はして行雨を來たし、

莫遣歌聲便駐雲。歌聲をして便ち雲を駐めしむる莫れ。

肯對綺羅辭白酒。肯て綺羅に對して白酒を辭せんや、

試將文字惱紅裙。試みに文字を將て紅裙を惱す。

今宵記取醒時節。今宵記取す醒時節、

點滴空塔獨自聞。空塔に點滴するを獨り自ら聞くことを。

春江激激清且急。【五】仙袂 白樂天の詩に、風吹仙袂飄飄舉。【六】來行雨 唐、咸通の末、淮南李公、江に遊ぶ。舟子船を刺し、誤つて水を濺いで、侍女の衣を濡し、公、色を變ず。裴慶餘、時に暮に在り。遂に一絶を獻じていふ、半額鵝黃

金縷衣、翠翹浮動玉釵垂、從教水濺羅襦濕、疑是巫山行雨歸と。李、之が爲に顔を霧らす。巫山行雨は、巫山神女の記事による。

楚王、神女と會す、神女去るに臨み、妾在巫山之陽、高丘之岨、且爲朝雲、暮爲行雨。【七】駐雲 列子、湯問篇に、薛談學謳於

秦青、未窮青之技、自謂盡之矣、遂辭歸、青弗止、饒於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行云、談乃謝、求返、終身不敢言歸。

【八】綺羅 あやぎぬ、うすぎぬ。顔氏家訓に、車乘填街衢、綺羅盈三府寺。無名氏の蠶婦の詩に、遍身綺羅者、不_レ是養蠶人。【九】

白酒 禮記に、酒清白、酒に清酒と白酒とあるをいふ。梁、武帝の詩に、玉盤著朱李、金杯盛白酒。李太白の詩に、白酒初熟山中歸。

【一〇】紅裙 杜子美の詩に、越女紅裙濕、燕姬翠黛愁。

【題義】此詩も熙寧七年五月の作である。東坡が密州に赴くとき、蘇州を過ぎ、閭邱公顯の家で酒を

飲んだが、時に早と蝗と特に甚しかった。歌唱方に酣にして雨ふつたから、詩中に已煩仙袂來行雨、莫遣歌聲便駐雲といひ、今宵記取醒時節、點滴空塔獨自聞といったのである。即ち早が久

しくして、雨を得た喜を詩にしたのである。紀昀いふ、推過一步作結、便脫三窠白と。王文誥いふ、

時方閔雨、故結句重申之、曉嵐以爲三結脫三窠白者非也。又いふ、是時久旱得雨、詩首敍雨中、次

及三閭邱、皆閭邱家事、無江君一也と。

【詩意】天氣が曇つて來て、乾ききつた小さな圃(蔬菜を種うる處)の塵も雨に灑がれた。四角な塘

にも、小波紋を生じようとして居る。閭邱の家では、歌唱が方に酣で、風は仙袂を吹いて飄飄として擧るの舞がある。歌聲をして雲を駐めしめてはならない。(歌聲のすぐれたるを美めて遏雲といふ)それで肯て綺羅の宴に對して白酒を辭する。試みに詩を將て紅裙を惱まして見よう。それは、今晚、

酔の醒めた時分に、空塔に點滴する雨の音を、獨り自ら聞いた時の心持である。何遜の詩に、夜雨滴

空塔、滴滴空塔裏、空塔滴不入、滴入愁人耳とある。此の雨の音を耳にして何と感せられるか。

五紀歸來鬢未霜 五紀にして歸り來れば鬢未だ霜ならず、

十眉環列坐生光 十眉環列して坐に光を生ず。

喚船渡口迎秋女 船を喚んで渡口に秋女を迎へ、

駐馬橋邊問泰娘 馬を駐めて橋邊に泰娘を問ふ。

曾把四絃娛白傅 曾て四絃を把つて白傅を娛ましむ、

敢將百草鬪吳王 敢て百草を將て吳王に鬪はさんや。

從今却笑風流守 今より却つて笑ふ風流の守、

畫戟空凝宴寢香 畫戟空しく凝す宴寢の香しきを。

【字解】【一】五紀歸來 十二年

を一紀といふ、歲星の一周に取る。

中吳紀聞に、朝議大夫閻邱公孝終、

以安居歸老。【二】十眉 天寶遺事

に、唐明皇幸蜀、令畫工作十眉圖。

白樂天の夜遊西虎邱寺詩に、搖曳

雙紅旆、娉婷十翠娥、自注にいふ、容

滿嬋態等十妓從遊也。【三】坐生

光 梁元帝の詩に、文入室生光。

【四】迎秋女 杜牧之の杜秋娘詩

に、卻喚吳江渡、舟人那得知。【五】

把四絃 娛白傅

白樂天の詩に、四絃千遍語、一曲萬重情。白樂天の琵琶行序に、送客湓浦口、聞舟中夜彈琵琶、聞其人、本長安倡女、年長色衰、嫁

爲商人婦、樂天爲作琵琶行。【七】將百草 鬪吳王 吳王、西施と百草を鬪はすの戲を作す。劉禹錫の寄蘇州白使君詩に、若共

吳王鬪百草、不如應是欠西施。【八】畫戟 云云 韋應物の詩に、兵衛森畫戟、宴寢凝清香。王維の詩に、畫戟雕戈白日寒、連

旗大旆黃塵沒。

【詩意】 宦遊すること多年、六十にして歸り來るも、鬢髪は未だ霜を戴かない。室に入ると十妓が環列して坐に光を生ずる。昔の詩に卻つて喚ぶ吳江の渡、舟人は那ぞ知るを得んとあるが、船を喚んで渡口に秋娘を迎へる。又、馬を駐めて橋邊に泰娘を問ふと、泰娘は走つて橋に上り、花を折つて戯れる。白樂天は客を湓浦口に送り、舟中、夜、琵琶を弾するを聞き、四絃一聲帛を裂くが如しで、爲に琵琶行を作つた。昔、吳王は西施と百草を鬪はすの戲を作したが、今は敢て百草を將て吳王に鬪はさんや。却つて笑ふ、蘇州の風流太守、百草を鬪はすは、西施を少くにかかれないと思ふ。宴が寢んで空しく清香を凝し、美しく色どれる戟の森たるを看るのである。

蘇州姚氏三瑞堂

蘇州姚氏の三瑞堂

君不見董召南

君見すや董召南

隱居行義孝且慈

隱居義を行ひ孝且つ慈

天公亦恐無人知

天公も亦恐る人の知るなきを、

故令雞狗相哺兒

故らに雞狗をして相哺兒せしめ、

又令韓老爲作詩

又韓老をして爲に詩を作らしむ。

爾來三百年

爾來三百年

【字解】【一】姚氏三瑞堂 東坡

の自注に、姚氏世以孝稱。中吳紀聞

に、閻門西、姚氏園亭、頗足雅致、所

居有三瑞堂。吳郡志に、三瑞堂在

楓橋、孝子姚淳所居、家世業儒、蘇

文忠爲賦三瑞堂詩。【二】董召南、

隱居行義云云 韓退之が嗟哉董生

行に、壽州厲縣有安豐、唐貞元時、

縣人董生召南、隱居行義於其中。又

名與淮水東南馳。名は淮水と東南に馳す。

此人世不_レ乏。此の人世に乏しからず、

此事亦時有。此の事亦時に有り。

楓橋三瑞皆目見。楓橋三瑞皆目に見、

天意宛在虞鰥後。天意は宛として虞鰥の後に在り。

惟有此詩非昔人。惟此の詩昔人にあらざるあり、

君更往求無價手。君更に往いて價なきの手を求めよ。

いふ、嗟哉董生孝且慈、人不識、惟有天翁知、生祥下瑞無三休期、家有狗乳出求食、雞來哺其兒、啄三啄庭中、拾三蟲蟻、哺之不食鳴聲悲、徬徨躑躅久不去、以翼來覆待三狗歸。

【三】楓橋。吳郡圖經に、楓橋、在吳縣西九里。舊、封橋に作る。後、張繼の詩に因つて、相承けて楓に作る。

【四】虞鰥。書、堯典に、有鰥在。下曰虞舜。虞舜は、蓋し姚氏の自つて出づる所である。

【題義】此詩は熙寧八年正月、東坡四十歳の時の作である。或は東坡が常州・潤州より還り、蘇州を過ぎし時の作といひ、或は六年癸丑、東坡が杭州に在りし日の作ともいふ。今は王文語の説に従つて熙寧八年とする。紀昀いふ、凡鄙太甚と。

【詩意】君見ずや壽州の董召南を。董召南は、壽州安豊の人で、進士に擧げられたが、志を得なかつた。唐の貞元の時、去つて河北に行いて遊んだ。董生は貧しいが、能く古人の書を読み、孝行である。そして隱居して常に義を行ふ所の立派な人物であつた。人は生を識らないが、天は生を知つて居る。天公は人が董生を知らないことを恐れてか、特に祥を生じたり、瑞を下したりして少しも休まな

い。故に雞や狗をして哺兒せしめる。即ち狗があつて董生の兒に乳を飲ませ、雞が外から來つて其の兒に哺を與へ、翼を以て覆ふ。更に韓退之をして詩を作らしめる。爾來三百年、其の名は淮水の流と、東南に馳せて居る。此の人は世に乏しくないし、此の事も亦、時にある。今の姚氏は即ち其の人である。蘇州の楓橋や三瑞（王文語いふ、三瑞、不審何物）は皆、目に見る。獨り雞や狗の類を出さないのみである。併し天の意は、宛として虞鰥の後たる姚氏に在る。ただ、我の此詩は昔人の韓退之のやうに美くはない。君更に往いて、價をなすことも出來ぬやうな立派な手を求めて、好い詩を得られよ。

【餘錄】韓退之の作つた董生行といふのは、淮水出桐栢山、東馳遙遙、千里不能_レ休、淝水出其側、不能_レ千里、百里入_レ淮流、壽州屬縣有_三安豊、唐貞元時、縣人董生召南、隱居行_三義於其中、刺史不能_レ薦、天子不_レ聞_三名聲、爵祿不_レ及_レ門、門外惟有_レ吏、日來徵_レ租更索_レ錢、嗟哉董生朝出耕、夜歸讀_三古人書、晝日不_レ得_レ息、或山而樵、或水而漁、入_レ厨具_三甘旨、上_レ堂問_三起居、父母不_三感感、妻子不_三咨咨、嗟哉董生孝且慈、人不_レ識、惟有天翁知、生祥下_レ瑞無_三休期、家有_レ狗乳出求_レ食、雞來哺_三其兒、啄_三啄庭中、拾_三蟲蟻、哺_レ之不_レ食鳴聲悲、徬徨躑躅久不去、以_レ翼來覆待_三狗歸、嗟哉董生、誰將與_レ儔、時之人、夫妻相虐、兄弟爲_レ讎、食_三君之祿、而令_三父母愁、亦獨何心、嗟哉董生無_三與儔、である。

次韻沈長官三首 沈長官に次韻す 三首

家山何在兩忘歸。家山何在兩ながら歸るを忘る、
盃酒相逢慎勿違。盃酒相逢ふ慎んで違ふこと勿れ。
不獨飯山嘲我瘦。獨り飯山我瘦せたるを嘲るのみならず、
也應糠覈怪君肥。也應に糠覈君が肥えたるを怪むべし。

【字解】【一】沈長官。沈立のこ
とならん。沈立、字は立之、歷陽の
人。進士を以て、右諫議大夫に累官
し、都水監に列たり。三朝に歷事し
白首一節、後、宣州に知たり。【二】
飯山嘲我瘦。李太白の詩に、飯顆
山嘲我瘦。

山前逢杜甫、頭戴笠子日卓午、借問因何太瘦生、總爲從前作詩苦。【三】糠覈。麥糠中の破れないもの。史記、陳丞相世家に、
爲人長大美色、或謂平貧、何食而肥、其嫂疾其不事家產。曰、亦食糠覈耳。晉書に、王戎之子萬、少而大肥、戎令食糠而肥
愈甚。

【題義】此詩も、熙寧八年五月の作であらう。沈長官の詩に次韻し、歸臥の志を寫したのである。

【詩意】家山は何に在る。君も我も共に歸ることを忘れて、ここに杯酒の間に相逢うて談笑して居る。
慎んで平生の歡に違うてはならない。昔、李太白が飯顆山の前に逢うたとき、何んでそんな
に瘦せたのである。總てこれまで苦吟した爲であらうと言つたさうである。今、獨り我が瘦せたるを
嘲けるばかりでなく、また、君が糠覈を食うても、愈肥えたるを怪しむのである。

男婚已畢女將歸。

男の婚は已に畢り女將に歸がんとす、

【字解】【一】男婚已畢云云。前

累盡身輕志莫違。

累盡き身輕く志違ふなし。

聞道山中食無肉。

聞道らく山中食に肉なしと、

玉池清水自生肥。

玉池清水自から肥を生ず。

漢の向長字は子平、朝歌の人。建武
中、男女皆、嫁娶既に畢る。遂に同
好禽慶と俱に五嶽名山に遊ぶ。東漢
逸民傳に見ゆ。【三】累盡云云。謝

靈運の辨宗論に、累盡則無、誠如符契。【二】玉池清水。黃庭内景經に、丹田之中精氣微、玉池清水上生肥。九星上經に、青青之月
與日同昇、合兩成一、出彼玉池、入乎金屋、大如彈、黃如橋、中有佳味、甜如蜜子、能得之、慎勿失。

【詩意】東漢の向子平は、其の子女の嫁娶も畢つたので、家の累がなくなり、其の身も輕くなつた。
そこで平生の山に隠れる志に違はなく、遂に意を肆にして五嶽名山に遊んだ。聞けば山の中には
肉がないと、肉食を得なければ、臍より一寸下の丹田のところ、精氣微、玉池清水自から肥を生ずる。
(道家は口を以て玉池となす。黃庭經に、玉池清水灌靈根と見えて居る。此の句はこれに據つたの
である。)

造物知吾久念歸。

造物吾が久しく歸ることを念ふを知り、

似憐衰病不相違。

衰病を憐むに似て相違はず。

風來震澤帆初飽。

風は震澤に來つて帆初めて飽き、

雨入松江水漸肥。

雨は松江に入つて水漸く肥ゆ。

【字解】【一】造物。莊子、大宗
師に、偉哉夫造物者。【二】震澤。
書、禹貢の注に、震澤、吳南太湖名と
見ゆ。越絶書に、太湖周三萬六千頃。
【三】松江。吳郡志に、松江在郡南
四十五里、南與太湖一接、吳江縣在

江濱、垂虹跨其上。

【詩意】造物者も吾が宦遊することが久しくて、故山に歸りたいと念ふ情の切であることを御存じと見える。又、此の身の衰病をも憐まれたらしく、我が願ひを叶へて、行途を妨げない。風は震澤湖上に吹き來つて帆も十分に孕まれ、船の走ることが速い。雨は松江に入つて水漸く肥え、萬頃の茫然たるを凌ぐ。(帆船といひ、水肥といふ、皆、方言である。)

戲書吳江三賢畫像三首

戲に吳江三賢の畫像に書す 三首

誰將射御教吳兒。誰か射御を將て吳兒に教ふる、

長笑申公爲夏姬。長笑す申公の夏姬の爲にするを。

却遣姑蘇有麋鹿。却つて姑蘇をして麋鹿あらしめ、

更憐夫子得西施。更に憐む夫子の西施を得るを。

【字解】一 吳江、太平寰宇記

に、吳江、本名松江、又名笠澤、其江

出太湖二源、一江東五十里、入小

湖、一江東二百六十里、入大海。五

代史職方考に、吳江縣、梁、開平三年、

錢鏐(吳越王第一世、杭州臨安の人)

置。【二】三賢畫像 式古堂畫考に、三賢像、李伯時所畫。【三】將射御教吳兒 左傳、成公七年に、楚殺巫臣之族、巫臣乃通吳於晉、教之射御戰陣、吳始伐楚、於是乎、一歲七奔命。【四】申公爲夏姬 左傳、成公二年に、楚之討陳夏氏、莊公欲納夏姬、申公巫臣曰、不可。及共王即位、使屈巫聘於齊、巫臣盡室以行、及鄭使介反幣、而以夏姬二行、遂奔晉。【五】姑蘇有麋鹿 史記、淮南王列傳に、王召伍被、與謀曰、將軍上、被悵然曰、臣聞、子胥諫吳王、吳王不用、乃曰、臣今見三麋鹿遊姑蘇之臺也、

今臣亦見宮中生荆棘、露沾衣也。【六】得西施 寰宇記に、越州寧山下有三石跡水、是西施浣紗之所、有三西施家、東施家、則西施者、姓施而在西也。

【題義】此詩も熙寧七年五月の作である。吳江を過ぎて、戲に三賢の畫像に題したのである。紀昀

いふ、詠古絶句之正格と。中吳紀聞に、越上將軍范蠡、江東步兵張翰、贈右補闕陸龜蒙、各其の像を吳江、鱸鄉亭の傍に畫く。東坡の詩があつて後は、其の名を易へて三高といひ、且つ更めて塑像を爲る。今は長橋に在り、北、垂虹亭と相望んで居る。東坡の自注に據るに、三首の第一は范蠡、第二は張翰、第三は陸龜蒙である。三賢は世に並ばないが、吳江の邑人は歲時に之を祭つて四方に誇つて居る。

【詩意】誰か射御戰陣の法を吳兒に教へて楚を伐たしめたか。楚が陳の夏氏を討つたとき、楚の莊王は、夏姬を納れて妾となさうとした。申公巫臣は、其は宜しからぬことと諫めた。楚の共王が位に即くに及び、巫臣を齊へ聘せしめたが、巫臣は家族を引き纏めて出立した。鄭に至つたとき、副使のものに齊への幣物を持たせて、かへし遣り、己は夏姬を伴れて出で去り、遂に晉に奔つたのである。そこで楚は巫臣の族を殺した。巫臣は吳を晉に通するやうに斡旋し、吳に射御の術や、陣立ての法などを教へ、吳は始めて楚を伐つたのである。又、漢の淮南王は、領地を削られた後、謀反の心を抱いた。王は伍被を召し、與に謀つて曰く、將軍上れと、伍被は悵然としていふやう、臣聞く、子胥は吳王を諫めたが、吳王が用ひなかつたから、臣今見麋鹿遊姑蘇之臺と言つたさうだが、今、臣も亦、宮中に荆棘を生じ、露の衣を濡すを見んことが悲しいと。又、越王は范蠡の計を用ひて、西施を吳王に獻じ、

其の後、吳を滅した。范蠡は復、西施を取つて、扁舟に乗り、五湖に遊んで返らなかつた。此詩は此等の故事に據つて作つたものである。即ち巫臣を以て范蠡に比し、夏姬を以て西施に比したのである。そして、巫臣は、夏姬の故を以て楚の奔命を致す、これ長笑さるべき所以である。范蠡は、越を佐け、吳を滅した後、自ら西施を得、これ憐むべき所以である。杜牧之の詩に、夏姬滅三兩國、逃作巫臣姫、西子下姑蘇、一舸逐鷓夷と。故に東坡は此詩に西施の事を用ひたのである。

浮世功勞食與眠。浮世の功勞は食と眠と、

季鷹眞得水中仙。季鷹は眞に水中の仙を得たり。

不須更說知幾早。須ゐず更に幾を知ること早しと説くこと

直爲鱸魚也自賢。直に鱸魚の爲にするも也自から賢なり。

曹掾、同時執權、翰因秋風起、乃思吳中菰菜、專美、鱸魚、翰曰、人生貴得適志、何能羈三官數千里、以要三命、遂命駕而歸、俄而問敗、人謂之見機。

【詩意】 飢ゑ來つて飯を喫し、困し來つて眠る、人間浮世の功勞は、ただ食と眠とである。首、張季鷹は、我をして身後の名あらしむるは、即時一杯の酒に如かずといった。齊王問に仕へて、東曹掾と爲り、司馬氏の骨肉相殘するを見て、亂の將に作らうとするを知つたから、同郡の顧榮に語るに去意

を以てし、吾はもと山林間の人、明を以て前を防ぎ、智を以て後を慮るといふと、榮は愴然として曰く、吾、當に子と南山の蕨を採り、三江の水を飲むべきのみと。翰は遂に秋風の起るに因つて、吳中の菰菜の美、鱸魚の鱠を思ひ、嘆じていふ、人生は適意を貴ぶのみ、何ぞ能く羈官數千里にして、以て名爵を要めようぞと、遂に駕を命じて歸つた。俄にして問が敗る。人は季鷹を機を知るものと謂つた。季鷹は眞に水中の仙を得たもの、機を知ること早しなど言ふは無用である。併し秋風の起るに因つて、去意を鱸魚の爲に行ふは、自ら賢い所である。(宋の王贊が吳江を過ぐる詩に、因想季鷹當日事、歸來未必爲菰鱸とある。謂ふに季鷹は時事の爲すあるべからざるを度つたから、飄然として遠く去つたのである。東坡は其の意に即いて、之を反したから、更に高きこと一格である。)

千首文章二頃田。千首の文章二頃の田、

囊中未有一錢看。囊中未だ一錢の看るあらず。

却因養得能言鴨。却つて能言の鴨を養ひ得るに因つて、

驚破王孫金彈丸。驚破す王孫の金彈丸。

囊空恐三差溢、留得一錢看。【三】能言鴨 陸龜蒙傳に、有鬪鴨一棚、頗極馴養、一日驛使過、挾彈斃其尤者、龜蒙曰、此鴨善三人言、

見欲附蘇州、上進使者奈何斃之、使人懼、盡與囊中金、以塞其口、徐使問善言狀、龜蒙曰、能自呼名耳。【四】金彈丸 西京雜記に、尊嬌好彈、以金爲丸、所失者、日常十百、長安爲之語曰、苦饑寒、逐金丸。京師兒童每聞嬌出、輒隨之、望彈之所落而拾焉。

【字解】 【一】 二頃田 百畝を一頃といふ。史記に、蘇秦曰、使我有二頃田、豈能佩六國相印乎。新

唐書、陸龜蒙傳に、有三田數百畝、苦三雨潦則與江通、故常苦饑也。【二】囊中未有一錢看 杜子美の詩に、

【詩意】東坡の自注に據ると、此詩は唐の陸龜蒙を言つたのである。陸龜蒙、字は魯望、長沙の人、松江、甫里に寓居し、自ら江湖散人、天隨子、甫里先生と號した。高士を以て召されたが至らなかつた。顔堯、皮日休、羅隱、吳融と益友である。陸龜蒙には、千首の文章もあり、二百畝の田地もある。併し囊中未だ一錢の見るべきものがない。却つて善く人言をなす鴨を養ひ得たが爲に、王孫の金彈丸に驚くやうな事になつた。高士を以て聞えたから、高士を以て召されるやうになつた。(紀昀いふ、惜其未能逃名也、用本事一點綴有致と。)

劉孝叔會虎邱時王規父齋素祈雨不至二首

劉孝叔虎邱に會す、時に王規父齋素雨を祈りて至らず 二首

白簡威猶凜、青山興已濃。白簡威猶は凜、青山興已に濃かなり。

鶴閒雲作擎、駝臥草埋峰。鶴は閒に雲擎を作し、駝は臥して草峰を埋む。

跪屨若可教、卜隣應見容。跪屨若し教ふべくんば、隣を卜す應に容さるべし。

因公問回老、何處定相逢。公に因つて回老に問ふ、何の處にか定めて相逢はん。

【字解】【一】劉孝叔 宋史に、劉述、字孝叔、湖州人、神宗朝、爲御史、上疏劾王安石、出知江州、踰年提舉崇禧觀、故有白簡青山之句。又、宋史に據るに、劉述の江州に貶せられたのは熙寧二年に在るから、東坡の此詩を作つた時は、已に提舉であつた譯である。

ある。【二】王規父 名は誨、熙寧六年に蘇州の守となる。【三】白簡 文選に、任昉奏彈曹景宗、曰、謹奉白簡以聞。注にいふ簡、略狀也。晉書に、傅玄、天性峻急不能有所容、每有奏劾、或值日暮、捧白簡、整簪帶、坐而待旦、於是貴游儼服、臺閣生風。【四】興已濃 紀昀いふ、此穰字、不可作濃淡之濃。王文誥いふ、當日用原韻一例甚寬、此首作濃、下首作穰、無不可者。【五】駝臥云云 曲名に駝峰留あり、此句は、兼れて駝橋を指すに似たり。蓋し孝叔は湖州の人、故に下に、圯上の事を用ふ。【六】跪屨 前漢の張良、嘗て下邳の圯上に遊ぶ。一老父あり、褐を衣、履を圯下に墮す。顧みて良に謂つて曰く、孺子下りて履を取れと。良、愕然之を毆たんとす。其老いたるを啓み、遂に履を取り、跪いて進む。【七】卜隣 杜子美の詩に李邕求識面、王翰願卜隣。白樂天が與三元積卜隣詩に、明月許同三逕夜、綠楊宜作兩家春。【八】問回老 後に回先生の詩がある。或はいふ、呂洞賓、姓を易へて回處士となす。回の字は乃ち呂のみと。

【題義】此詩は、熙寧七年五月の作である。王規父が開いた虎邱の會に、劉孝叔は來つたが、規父は齋素して雨を祈つた時であるから、家客をして代らしめ、自分は至らなかつた。規父、詞を乞はしめ、たから、此詩が出来たのである。

【詩意】彈劾の章奏を白簡といふ。白簡を捧げて以て聞す、威風凜凜たるを覺える。神宗の朝、劉孝叔が御史となり、上疏して王安石を劾し、爲に貶せられて江州に知となつた。青山は咲ふ如くで、興已に濃かである。閑雲野鶴、鶴は閒にして、雲は擎の色なして居る。(擎は羽毛、世説に、王恭著三鶴擎と見えて居る。)駝駝は臥して、春の峰は草に埋もれて居る。山中には神仙の樂ありて、興が盡きないのである。張良は下邳の土橋の上に遊び、一老父の墮した履を取り、跪いて進めた時、老父は足を以て之を受け、笑つて良に謂つて曰く、孺子教ふべしと。跪屨若し教ふべくんば、隣を卜する、宜しく

兩家の春を作すべきであらう。(古諺にいふ、非宅是下、維隣是トと。)住居を選択するに、先づ近隣の善悪を卜すべきである。既に隣を卜して、居を定む、應に容されよう。貴下の紹介に因つて回先生を訪問したいものである。(王文誥いふ、全作皆因孝叔領祠而發、結二句、皆指湖州也と。)

太常齋未解、不肯對纖穠。

太常齋未だ解けず、肯て纖穠に對せず。

只遣三千履、來遊十二峰。

只三千の履をして、來つて十二峰に遊ばしむ。

林空答清唱、潭淨寫衰容。

林空しくして清唱に答へ、潭淨くして衰容を寫す。

歸去瑤臺路、還應月下逢。

歸り去る瑤臺の路、還應に月下に逢ふべし。

【字解】(一)太常 官名、宗廟禮儀を掌る。後漢書に、周澤、字稚都、爲太常、臥病齋宮、其妻哀澤老病、闕問所苦、澤大怒、以三妻子犯齋禁、遂收送詔獄、當世疑其詭激、時人爲之語曰、生世不諧、作太常妻、一歲三百六十日、三百五十九日齋。注にいふ、一日不齋、醉如泥と。晉書に、劉毅散齋而疾、妻省之、毅便奏加妻罪、而請解齋。(二)對纖穠 宋玉、神女の賦に、穠不短纖不長。太けれども、丈短からず、細けれども、丈長からず。(三)三千履 史記春申君傳に、春申君客三千人、其上客、皆躡珠履。(四)清唱 陸機の詩に、名謳激清唱。(五)月下逢 李太白の詩に、若非羣玉山頭見、會向瑤臺月下逢。

【詩意】昔、周澤は太常となつて、一年三百六十日、三百五十九日は齋をして居る。そして一日齋をしなければ酔うて泥の如くであつたといふことである。太常が齋を解かない中は、肯て纖穠の婦女子に對しない。嘗て太常が齋宮で病に臥したとき、其の妻が之を見舞ふと、太常は大に怒つて直に詔獄に送つたといふことである。さて王規父は盛宴を虎邱に開いたが、生憎王規父自身は齋素して雨を祈つて居たので、其の會に出ることが出来なかつた。それで、幕僚をして代つて主人とならしめたのである。三千の上客は、皆、珠履を躡んで、立派である。殊に此日は蘇州の名歌妓が畢く集つたから、此の四句がある。十二峰は、但、取つて纖穠と相映せしめて、虎邱に比したまでである。宴後、當日の虎邱を寫すと、林は空しくして清唱に答へ、潭は淨くあつて衰へた容貌を寫して居る。歸路は、更に瑤臺月下に向つて逢ふことであらうと、李太白の詩を引いて結んだのである。

【字解】(一)三過門 傳燈錄に、佛欲求出家、即於四門遊觀、見三老病死、終可厭離、於是淨居白三太子言、出家時至、可去矣、太子即踰城而去。三過門の字面は、孟子、滕文公篇に、禹八年於外、三過其門而不入。(二)一彈指 云 翻譯名義に、時之極少爲三刹那、壯士一彈指六十五刹那。又いふ、二

過永樂文長老已卒

永樂に過る、文長老已に卒す

初驚鶴瘦不可識。初めて驚く鶴瘦せて識るべからざるを、

旋覺雲歸無處尋。旋いで覺ゆ雲歸りて尋ぬるに處なきを、

三過門間老病死。三たび門を過ぐる間に老病死、

一彈指頃去來今。一たび指を彈く頃に去來今、

存亡慣見渾無淚。存亡は見るに慣れて渾て涙なく、

鄉井難忘尙有心。郷井忘じ難く尙ほ心あり。

欲向錢塘訪圓澤。錢塘向つて圓澤を訪はんと欲す、
葛洪川畔待秋深。葛洪川畔秋の深きに待つ。

十念爲一瞬、二十瞬名三彈指。
【三】 去來今 維摩經に、天女曰、皆以三世俗文字數、故說有三世、非

謂善提有去來今。【四】 鄉井 家鄉をいふ。東坡の詩に、一夢分明墜鄉井。宋史に、與其離鄉井、投邊塞、曷若與諸君一驅逐兜黨。【五】 錢塘 浙江通志に、宋以前之錢塘故城有四、一在靈隱山麓、一在錢塘門外、皆漢魏時治也、一在錢塘門內、唐縣治也、一在紀家橋華嚴寺故址、宋縣治也。【六】 圓澤 李源洛陽惠林寺に居り、僧圓澤と遊ぶ。【七】 葛洪川畔云云 李源は圓澤を葛洪川畔に訪ふ、牧童あり、牛角を扣いて歌ふ。即ち圓澤である。

【題義】 此詩も熙寧七年五月の作。永樂に過ぎり、報本禪院に至れば、文長老は已に卒んで居つたので、詩を爲つて之を悼んだのである。此詩の中に、三過門間老病死、一彈指頃去來今とあるは、初めて文長老を見た時は老、再び來れば病、今は則ち外界の人となつた。三過の事、此の如くで、其の三過の日を計れば、則ち一彈指の間のみ。紀昀いふ、查謂三四巧對、然作對太巧、是一病、特此尙未太礙格、後半曲折頓挫と。王文誥いふ、查註引宋僧居簡三過堂記、謂公所作三詩、首尾相距十七八年、不應槩入三倅杭卷一者誤甚と。

【詩意】 初めて文長老に會つた時は衰老の狀が鶴の瘦せたやうであつた。二度目の時は、病に臥され、三度目の時は、雲歸つて尋ぬるに處なく、幽明界を異にしたのである。(王文誥いふ、正言其速、不可下以三十七八年、首尾論上也と。)三たび其の門を過ぎる間に、人間の老と病と死との厭離すべきを見た。そして一たび指を弾く極少の時間に、去と來と今との三世を過した。萬有の存すると亡するを一視し、見るに慣れて渾て涙がない。されど家郷忘じ難くて、尙ほ心に關する。錢塘に向つて、故人圓澤を訪ねようとして、葛洪川畔、秋の深きに待つも、俗縁が未だ盡きないので、相近いて見ることが出来なかつた。

【餘錄】 唐小説に、李源居洛陽惠林寺、與僧圓澤遊、甚密、一日相約遊青城峨眉、舟次三南浦、見婦人錦襜而汲者、澤泣謂源曰、婦人孕三歲矣、吾當爲之子、無可逃者、後十二年、中秋、天竺寺外、當與公相見、至暮澤亡而婦乳、源後自洛適吳、聞葛洪川畔牧童扣角而歌、曰三生石上舊精魂、賞月吟風不要論、慙愧情人遠相訪、此身雖異性長存、源問澤公健否、答曰、李公眞信士、然俗縁未盡、慎勿相近、遂去不復見とある。

贈張刁二老

張刁二老に贈る

兩邦山水未淒涼。兩邦の山水未だ淒涼ならず、
二老風流總健強。二老の風流總て健強。
共成一百七十歲。共に一百七十歳を成し、
各飲三萬六千觴。各飲む三萬六千觴。
藏春塢裏鶯花鬧。藏春塢裏鶯花鬧しく、

【字解】 一 張刁二老 張子野は湖州、烏程の人。刁景純は潤州、丹陽の人。二 淒涼 寂寥といふに同じ。杜子美の詩に、山陰一茅宇、江海日淒涼。三 共成 二百七十歳。白樂天の九老詩に、七人五百八十四、拖紫紵朱白鬢。四 三萬六千觴 李太白の詩に、百年三萬

仁壽橋邊日月長。仁壽橋邊日月長し。

惟有詩人被磨折。惟詩人の磨折せらるるあつて、

金釵零落不成行。金釵零落して行をなさず。

六千日、一日須傾三百杯。【五】藏
春塢 萬松岡に在り、刁景純の居る
所。前に出づ。【六】仁壽橋 張子
野の居る所、湖州府志に、仁壽坊在

府治東。【七】詩人被磨折 詩人は子野を指していふ。子野に寵姫多し、以て之を戲る。或はいふ、詩人は公自ら謂ふなりと。【八】

金釵 白樂天の詩に、鎮乳三千兩、金釵十二行。【九】零落 楚辭に惟草木之零落兮、草の枯れるを零といひ、木の枯れるを落といふ。

【題義】張刁の二老は、如何なる人かといふに、東都事略の梅堯臣の傳に、同時有張先子野・刁約

景純、皆有文名而逸其事一と見えて居る。紀昀は此詩を、疵累太重、三四乃香山野調と評した。

【詩意】湖州と潤州、兩邦の山水は、未だ淒涼ではない。張子野も、刁景純も、皆、強健で、風流日

を消して居る。二老の年齢を數へると、是年、子野は八十六歳、景純は八十一歳、之を合はせると、

實に一百六十七歳である。各、三萬六千觴を飲む。刁景純の歳春塢には鶯が啼き花が笑つて、賑か

あり、張子野の仁壽橋邊も、長閑で、日月が長い。ただ詩人子野は頻りに磨折されて、金釵も零落し

て行をなさない。(子野に寵姫が多かつたから、東坡が之に戲れたのである。)

纔出杭州。詩便深警。非胸中清思。半耗於簿書。半耗於遊宴耶。信乎詩
非靜力不工。雖東坡天才。亦不能於膠膠擾擾時。揮洒自如也。

纔に杭州を出づれば、詩便に深警なり。胸中の清思、半は簿書に耗し、半は遊宴に耗するにあ
らずや。信なるかな、詩は靜にあらざれば力工ならず。東坡天才と雖も、亦膠膠擾擾の時に
於ては、揮洒自如たること能はざるなり。

蘇東坡詩集 卷十二

古今體詩 四十八首

去年秋。偶遊寶山上方。入一小院。闐然無人。有一僧。隱几低頭讀書。與之語。漠然不甚對。問其隣之僧。曰。此雲閣黎也。不出十五年矣。今年六月。自常潤還。復至其室。則死葬數月矣。作詩題其壁。

去年の秋、偶寶山上方に遊び、一小院に入る、闐然として人無し、一僧あり、几に隠り、頭を低れ、書を讀む、之と語るに漠然として甚しくは對はず、其の隣の僧に問ふ、曰く、此れ雲閣黎なり、出でざること十五年、今年六月、常・潤より還りて、復其の室に至れば則ち死葬數月、詩を作り、其の壁に題す

古今體詩 去年秋偶遊寶山上方入一小院作詩題其壁

雲師來寶山。一住十五秋。

雲師寶山に來り、一住十五秋。

讀書嘗閉戶。客至不舉頭。

書を讀んで嘗に戸を閉ぢ、客至るも頭を擧げず。

去年造其室。清坐忘百憂。

去年其の室に造る、清坐百憂を忘る。

我初無言說。師亦無對酬。

我初め言說なく、師も亦對酬なし。

今來復扣門。空房但颺颺。

今來つて復門を扣く、空房但颺颺。

云已滅無餘。薪盡火不留。

云ふ已に滅して餘なく、薪盡きて火留まらずと。

却疑此室中。常有斯人不。

却つて疑ふ此の室中、常に斯の人ありや不やを。

所遇孰非夢。事過吾何求。

遇ふ所孰か夢にあらざらん、事過ぐれば吾何をか求めん。

【字解】

【一】寶山上方 寶山は御厨警門内第一巷に在ること、前に出づ。上方は地勢最高の處の意で、山寺をいふ。杜子美の詩に上方重閣晚、百里見纖毫。【二】闌然 宋の范成大(字は正能、石湖と號す)の詩に、窮巷開門本闌然。【三】隱几 隱は凭なり、几に凭りもたれる、莊子、齊物論に、南郭子綦隱几而坐云云。【四】漠然 淮南子に、聖人内修其本、而不外飾其末、漠然無爲而無不爲也。【五】雲閣黎 院中に寓し、戸を閉づる十五年、人事を謝絶し、日に觀音經を理む。閣黎は阿闍梨の略、僧侶の師範職。【六】常潤 常州、潤州をいふ。常州は、清の時代には江蘇に屬す、今の武進縣は、其の舊治である。潤州は、今の江蘇、丹徒縣。【七】清坐 韓退之の鄭君墓誌に、客至、清坐相看、或竟日。【八】百憂 歐陽修の賦に、百憂感其心、萬事勞其形。【九】對酬 五代陳陶の詩に、含珠相對酬。【一〇】空房 空室といふに同じ。杜子美の詩に、古寺僧牢落、空房各寓居。【一一】颺颺 張正元が南風之黨賦に、颺颺淒淒。【一二】滅無餘 金剛經に、我皆令入無餘涅槃、而滅度之。【一三】薪盡火不留 莊子、養生主に、指窮

於爲薪、火傳也、不知其盡也。【一四】何求 杜子美の詩に、多病所須惟藥物、微軀此外更何求。

【題義】

此詩は熙寧七年六月に、東坡が常州、潤州から還つて、寶山に過り、雲閣黎を弔つて院の壁に題したものである。西湖游覽志に據ると、七寶山は白馬廟巷の西に在り。舊寶嚴院ありて、錢氏建つ。雲閣黎は院中に寓し、戸を閉づること十五年、人事を謝絶して、日に觀音經を理む。忽ち一日偈を留めて逝く。偈にいふ、誦經一字禮一拜、頭白眼眇(目汁凝)坐塵界、天雞臨夢啼一聲、明月一輪觀自在と。

【詩意】

雲阿闍黎は寶山に來つて住居すること十五年であつた。(紀昀いふ、出手頗率と)平生、戸を閉ぢ、書を讀んで、手に卷を釋かない。故に客が來つても、頭を擧げない。去年、余は其の室に造つて、暫し清坐すれば、忽ち百憂を忘れる。此方からも初めより言說をしないし、先方の阿闍黎も、亦、對酬をしなかつた。今回、來つて復、寺門を扣いたが、阿闍黎は既に遷化して、空房にただ颺颺たる風の聲を聞くのみである。云ふ、已に滅して何物も餘らない。薪が盡きて火を留めないやうなものであると。併し、薪を以て火を燃やす場合に、其の薪よりいふと、薪は盡きる時あつても、而も世間の火は、古より今に及び、嘗て絶えたことがない。形は以て薪に喩ふべく、火は以て神に喩ふべきである。形は滅するも、神は未だ嘗て滅しない。是に於てか余は却つてここに一の疑を生ずる。それは、此の室中、常に斯の人がありや否やを。觀じ來れば、すべては大自然の作用で、遇ふ所、孰れか夢にあらざらん。人間の萬事は之くとして夢にあらざるはなしである。故に事が過ぎれば跡は茫然で、吾また何をか求めようぞ。

聽僧昭素琴

僧昭素の琴を聽く

至和無攫醜。至平無按抑。
 不知微妙聲。究竟從何出。
 散我不平氣。洗我不和心。
 此心知有在。尙復此微吟。

至和は攫醜なく、至平は按抑なし。
 知らず微妙の聲、究竟何より出づる。
 我が不平の氣を散じ、我が不和の心を洗ふ。
 此心在る有るを知る、尙ほ復此に微吟す。

【字解】【一】琴、琴操に、琴長三尺六寸六分、象三百六十六日、廣六寸、象三六行、前廣後狹、象三章卑也、上圓下方、法天地也、五絃象五行云云。六行は、孝・友・睦・信・恤、周禮に見ゆ。【二】至和、文選、嘯賦に、總三八音之至和、故極樂而無荒。【三】攫醜、史記、田完世家に、騶忌子以鼓琴見威王曰、夫大絃濁、以春溫者、君也、小絃廉折、以清者、相也、攫之深、醜之愉者、政令也、攫は爪を以て持するなり。醜は古の釋の字。愉は讀んで舒と爲す。【四】按抑、抑按といふに同じ。蔡邕の琴賦に、抑按藏摧、稽康の琴賦にも、或徘徊顧慕、擁鬱抑按。【五】微妙、魏、文帝の詩に、哀絃微妙。【六】究竟、後漢書、馬融傳に、流覽徧照、彈變極態、上下究竟。【七】微吟、魏文帝の燕歌行に、短歌微吟不能長。

【題義】琴操に、伏羲作琴、以修身理性、反其真也とある。至人は託玩して、徳を導き、情を宣べる。唐宋詩醇の評に、是真識琴中意者、朱絃疏越、可以釋躁平矜とある。朱絃は朱色の絲を練つて絃としたもの、絲は練らないときは、聲が清めども、練るときは、聲が濁る。疏越の疏は、通である。越は瑟の底の孔である。孔があつて、氣を通じ、音をして遲緩ならしめる。朱絃疏越、其の聲は濁つて遅きも、其の音の質素なる、之を味ふときは、餘音嫋嫋である。紀昀は此詩を評して絶似香山と言つて居る。

【詩意】八音の調和を得たものは、自然の響であつて、爪にて之を攫することもなく、之を釋つて舒べる工夫も要しない。又、此上もなく平といふ聲音は、抑へることも、按ずることもないのである。微妙の聲は、畢竟、何處に起つて、何れの方から來るのか。何れにしても、我が不平の氣を散じたり、我が不和の心を洗つたりするは、至和・至平の妙音の力である。そもそも音樂の起るは、人の心の動くに由る。心が外に感觸して聲となる。聲に清濁・緩急・高下・強弱がある。既に聲音の由つて出る所を推して此心あるといふことを知つたので、尙ほ復、ここに微吟するのである。

【餘錄】風俗通に、琴曲曰操、操者、言窮阨、猶不_レ失其操也とある、琴操は琴うたである。韓退之は、蔡邕の琴操に效つて琴操十首を作つた。唐子西いふ、琴操非_二古詩_一、非_二騷詞_一、惟_二退之爲_レ得體云云と。王文誥は、東坡の此詩を評して、此亦反韓之作、然孔子所_レ不放者、正此等耳と言つて居る。

僧惠勤初罷僧職

僧惠勤初めて僧職を罷む

軒軒青田鶴。鬱鬱在樊籠。
 既爲物所縻。遂與吾輩同。
 今來始謝去。萬事一笑空。

軒軒たる青田の鶴、鬱鬱として樊籠に在り。
 既に物に縻がれ、遂に吾が輩と同じ。
 今來始めて謝し去り、萬事一笑空し。

新詩如洗出。不受外垢蒙。新詩は洗ひ出すが如く、外垢の蒙るを受けず。

清風入齒牙。出語如風松。清風齒牙に入り、語を出すこと風松の如し。

霜髭茁病骨。飢坐聽午鐘。霜髭は茁として病骨、飢坐午鐘を聴く。

非詩能窮人。窮者詩乃工。詩の能く人を窮するにあらず、窮するもの詩乃ち工なり。

此語信不妄。吾聞諸醉翁。此語信に妄ならず、吾諸を醉翁に聞く。

【字解】 一 軒軒 高く擧がる貌。世説、容止篇に、諸公每朝、朝堂猶暗、惟會稽王來、軒軒如三朝霞舉。 二 青田鶴 永嘉郡記に、沐溪去青田九里、中有三雙白鶴、年年生子、長大便去、惟存三雙鶴、精白可愛、多云、神仙所養。杜子美の詩に、薛公十一鶴、盡寫青田真。太平寰宇記に、處州青田縣、因青田爲名。相鶴經云、青田之鶴、即此邑之地。 三 鬱鬱 氣のふさがる貌。漢書韓信傳に、安能鬱鬱久居此乎。 四 樊籠 劉兼の詩に、臯禽爭肯戀樊籠。 五 今來 これからといふ意。西征賦に、古往今來、邈矣悠哉。曹植の詩に、始出嚴霜結、今來白露晞。 六 外垢蒙 吳越春秋に、伍胥蒙垢受恥。 七 霜髭茁 茁は草が初めて生ずる貌。詩、召南に、彼茁者葭。孟子、萬章の篇に、牛羊茁壯長而已矣。 八 非詩能窮人云云 歐陽修の梅聖俞詩序に、非詩能窮人、殆窮者而後工也。 九 醉翁 歐陽修は初、翰林に在り、醉翁と號し、晚に六一居士と號す。

【題義】 此詩は熙寧七年六月の作である。寶山に過り、僧惠勤が初めて僧職を罷めたと聞いて此詩を作つたのである。紀昀いふ、取喻精警、語亦高渾と。

【詩意】 軒軒として高く舞ひ遊ぶ青田の鶴も、鬱鬱として志を得ないで、樊籠の中に在る。物に縲がれて自由を失つて居る境遇は、全く吾輩と同じである。今より一擧して天風を逐はば、白雲飛ぶ處、羣雞を免れ、人間の萬事は一笑に付して空しくなるであらう。新しい詩は、洗ひたてのやうに清くて、少しも外の垢を受けて居ない。清い風は齒牙に入り、言葉も風松の如くに出る。(玄裳綺衣の孤鶴が憂然として鳴く趣がある。)ただ今の我は、力困して聲微、翅を垂れて苔を啄むに似て居る。白い髭は茁として生長し、病骨は一際目立つ。かくて、午鐘を聞くと、食を得ないで、飢ゑて坐するのみ。歐陽修は其の友梅聖俞の詩集に序して非詩能窮人、殆窮者而後工也と言つたが、まことに其の通りであると思ふ。

【餘錄】 相鶴經に、鶴者陽鳥也、而遊於陰、七年小變、十六年大變、百六十年變止、千六百年形定、體尚潔、故其色白、鳴則聞于天、飛則一舉千里、鶴一百六十年、雄雌相視而孕、一千六百年、飲而不食云云と見ゆ。陳獻章の詩に、

今朝放汝出樊籠。脫洒飄然便不同。清徹一聲鳴海月。高搏萬里逐天風。緜山華表無時到。弱水蓬萊有路通。幾度夜深松館下。歸來尤記主人翁。

遊靈隱高峰塔

靈隱高峰塔に遊ぶ

言遊高峰塔。蓐食治野裝。言高峰の塔に遊び、蓐食して野裝を治む。

火雲秋未衰。及此初旦涼。火雲秋未だ衰へず、此の初旦の涼しきに及ぶ。

霧霏巖谷暗。日出草木香。霧霏巖谷暗く、日出草木香し。
 嘉我同來人。久便雲水鄉。嘉す我が同じく來る人、久しく雲水の郷を便とす。
 相勸小舉足。前路高且長。相勸めて小しく足を舉げ、前路高く且つ長し。
 古松攀龍蛇。怪石坐牛羊。古松龍蛇を攀ち、怪石牛羊に坐す。
 漸聞鐘磬音。飛鳥皆下翔。漸く鐘磬の音を聞き、飛鳥は皆下に翔る。
 入門空有無。雲海浩茫茫。門に入れば空しく有無、雲海浩として茫茫。
 惟見聾道人。老病時絕糧。惟見る聾道人、老病時に糧を絶つ。
 問年笑不答。但指穴藜牀。年を問へば笑つて答へず、但指す穴藜牀。
 心知不復來。欲歸更徬徨。心に知る復來らざるを、歸らんと欲し更に徬徨。
 贈別留匹布。今歲天早霜。別に贈りて匹布を留む、今歲は天早く霜ふる。

【字解】 【一】 靈隱高峰塔 武林山記に、北高峰在靈隱寺後山、山有塔、記云、唐天寶中、邑人建、高七級（七層と同じ）。臨安志に、宋の楊蟠（字は公濟）有北高峰塔詩。 【二】 言、ワレと訓す。爾雅、釋詁に、言我也と見ゆ。 【三】 尊食 早朝、寢床の上で食事する。左傳、文公七年に、秣馬尊食、潛軍夜起。史記、淮陰侯列傳に、韓信嘗從南昌亭長、寄食數月、亭長妻患之、迺晨炊尊食。後漢廉范（字は叔度）傳の注にいふ、尊食、蚤起、食於寢房中一也。 【四】 野裝 陸游の詩に、絕裝桐帽野人裝、又上三湘隄一步。 【五】 火雲 岑參の詩に、五月山雨熱、三峯火雲蒸。 【六】 雲水鄉 溫庭筠の詩に、飄然隨釣艇、雲水是天涯。 【七】 鐘磬

史記、平原君傳に、民困兵盡、或刻木爲矛矢、而君器物鐘磬自若。磬は玉又は石で造れる樂器。ここは僧寺で用ひる磬をいふ。即ち銅を以て鉢孟の形に造り、擊ちて聲を發せしむるもの。 【一】 雲海 雲に覆はれた山の頂上ばかりが島のやうに見える。宋之問の詩に、登高望不極、雲海四茫茫。沈佺期の詩に、何堪萬里外、雲海已冥茫。 【九】 穴藜牀 三國志の注に、高士傳を引いて曰く、管寧自越海、及歸常坐三木榻、積五十年、未嘗箕股、其榻上當膝處、皆穿。穴藜牀は、其の意を用ゐるに似たり。 【一〇】 心知 前漢の趙廣漢傳に、霍光死、廣漢心知微指。白樂天、長恨歌に、詞中有誓兩心知。 【二】 徬徨 徬徨といふに同じ。さまよふをいふ。史記、刺客傳に、彷徨不能去。

【題義】 此詩は熙寧七年七月、靈隱寺に宿し、曉に起き、北高峰塔に登つたことを寫したものである。紀昀いふ、直起直收不著一語、而義蘊甚深と。又いふ、寫出大善知識境界一と。西湖遊覽志に、高峰在南北諸山之界、羊腸屈曲、松篁蔥蒨、塔居峰頂、東瞰平蕪、盡湖山之景、南頰大江、西接巖竇、怪石翔舞、洞穴邃密とある。

【詩意】 熙寧七年の七月、我は靈隱寺に宿り、翌朝、早く起きて高峰の塔に遊んだ。當日は寢床の中で食事をすまし、野人の装をなして出發した。火雲は秋になつても、衰へないが、朝早く、山路に登るのであるから、涼氣を覺えた。山の霧が霏霏として巖谷は暗かつたが、日が出て、草も木も香しい。よいことには我と同じく來つた人は、雲水是れ天涯といふ氣分の惠勤や昭素たちで、久しく雲水の郷を便としたのである。（王文誥いふ、詳玩此句、其同來人、即惠勤、昭素之流也。）相勸めて少しく足を舉げたが、前路は高く且つ長い。龍や蛇の形をした古い松樹に攀ち上つたり、牛や羊のやうな怪石の上に坐つたりした。だんだんと鐘の聲や磬の音が聞えるので、山寺に近くなつたことが知れる。

山寺は高い處にあるので、飛ぶ鳥は皆、下に翔けて居る。山門に入ると、寂然として何物も心に留まらぬ。ただ雲の海になつて見渡す限り茫茫として居る。(紀昀いふ、寫出大善知識境界と。)惟、見るのは、聾道人である。道人は老い衰へて病み疲れ、折折其日の食物に乏しいこともある。年齢は幾つと問うても、笑つて答へない。ただ穴のあいた蓆を指すのみであつた。心中に、復た来られないことを知つて居るから、既に歸らうと欲しても、更にさまようて、早速に去ることが出来ない。別に臨んで贈物として一匹の布を留める。今歳は、天早く霜を降らせる、幸に自愛せられよ。

八月十七日天竺山送桂花分贈元素

八月十七日、天竺山の桂花を送り、分つて元素に贈る

月缺霜濃細藥乾。月缺け霜濃かにして細藥乾く、
 此花元屬玉堂仙。此の花は元玉堂の仙に屬す。
 驚峰子落驚前夜。驚峰子落ちて前夜に驚き、
 蟾窟枝空記昔年。蟾窟枝空しくして昔年を記す。
 破滅山僧憐耿介。破滅の山僧は耿介を憐み、

【字解】(一)桂花 張子韶の横浦集に、憶天竺月桂詩、湖上北山天竺寺、滿山桂子月中秋、黃英六出非三凡種、肯許天香過別州。自注にいふ、天竺桂花六出、他州所無。
 (二)元素 楊繪字は元素、皇祐五年に及第。宋史に、楊繪、蘇州人、神宗

練裙溪女鬪清妍。練裙の溪女は清妍を鬪はす。
 願公採擷紉幽佩。願くは公採擷して幽佩を紉し、
 莫遣孤芳老澗邊。孤芳をして澗邊に老いしむること莫れ。

朝、爲御史中丞、免役法行、繪陳十害、罷爲侍讀學士、出知亳州、歷應天、杭州。(三)玉堂 美しい殿堂。揚雄の解嘲に、歷金門、上玉堂。(四)驚峰 (一)は月の世界をいふ。

靈鷲山の略、中印度の摩揭陀國王舎城の東北にある。釋尊が大無量壽經・法華經等を説かれた舊址。
 【五】子落 宋之問の詩に、桂子月中落。月窟、蟾宮などいふに同じ、文選、揚子雲が長楊賦に、西歷月窟、東震日域。唐、張説の詩に、月窟窮天遠、河源入塞清。袁郊の月詩に、嫦娥竊藥出人間、藏在蟾宮不肯還。
 【七】耿介 耿は堅く志を守る、介は心專一にして俗に合はぬ。馮衍の顯志賦に、獨耿介而慕古令。
 【八】採擷 衣の衽をかかけ折りて帯に插み、物を其の中に貯へる。謝朓の詩に、遇君時採擷、玉座奉金卮。

【題義】熙寧七年八月十七日、天竺山から桂花を送り來る。分けて楊繪・元素に贈り、此詩を作つたのである。天竺山に就いての傳説をいふと、昔、天竺山に梵僧があつていふ、此山は天竺の鷲山より飛び來る。嘗て八月十五夜、月の世界から桂子の落ちたるありと。

【詩意】月の世界の桂樹のことをいふと、萬古の秋香は、宇宙に懸つて居り、一株の清影は山河を照らして居る。相傳ふ、月桂の高さは百丈、下に一人あつて常に之を斫る。樹は創けども随つて合する。其の人といふのは、姓は吳、名は剛、西河の人、仙を學んで過があつたから、謫して樹を伐らしむと。古詩に欲知仙艷無窮處、不隔人間朔望開と。八月十五夜は月が圓であるが、十七日になると、月が缺け、(釋名に月闕也、滿則缺也と見ゆ。)霜濃かにして桂の樹の細藥も乾く、此の桂花は、も

と、月の世界の仙花である。月の世界から桂花の實が靈鷲山に落ちたが、此の天竺山は、其の靈鷲山から飛び來つた。(臨安志に據ると、靈隱山に月桂峰がある。相傳ふ、月中の桂子が嘗て此峰に墮ちて大樹を生成した。其の花は白く、其の實は赤いといふことである。一説には、天聖中に、天が靈實を此山に降し、狀は珠璣の如くである。識者いふ、此れ月中の桂子であると。) 月宮の桂花、空しく昔年を記するといふは、楊元素が試験に及第して甲科に中つた時を指したのであらう。進士の試験に及第するを折桂といふ。破械(械は衣裾)の高僧は、志の堅い所がよく、白い練衣の裳裾の溪女は清妍を競つて居る。どうか君よ、(楊元素を指す)衣を折りかかげ、幽佩を綴りて之に貯へ、孤芳をして空しく澗邊に老いしめないやうに。幽溪の美花の採擷されないのは、異才の山林に老いると同じである。

捕蝗至浮雲嶺山行疲茶有懷子由弟二首

蝗を捕へて浮雲嶺に至る、山行疲茶し、子由弟を憶ふあり 二首

西來烟障塞空虛。西來の烟障空虛に塞がる。
灑徧秋田雨不如。灑いで秋田に徧く雨も如かず。
新法清平那有此。新法清平那ぞ此あらん、

【字解】 一 捕蝗 蝗は稻を食ふ害虫、東坡の上三韓丞相一書に、賦近在錢塘、見飛蝗、自西北來、聲風浙江之濤云云。 二 浮雲嶺

老身窮苦自招渠。老身窮苦自ら渠を招く。

無人可訴烏銜肉。人の烏の肉を銜むを訴ふべきなく、

憶弟難憑犬附書。弟を憶うて憑り難く犬に書を附す。

自笑迂疎皆此類。自ら笑ふ迂疎皆此の類なるも、

區區猶欲理蝗餘。區區猶ほ蝗餘を理めんと欲す。

區區猶ほ蝗餘を理めんと欲す。

【六】 清平 班固の兩都の賦序に、海内清平。 【七】 烏銜肉 漢書に、黃霸爲潁川太守、嘗欲有所何察、擇廉吏一遣行、屬令周密、吏出不敢舍郵亭、食於道傍、烏攫其肉、民有欲詣府口言事者、適見之、霸與語、道此、後日吏還、謂霸、霸見迎、勞之曰、甚苦、食道傍、乃爲烏所盜肉、吏大驚、以霸具知其起居、所問盡釐不致有隱。 【八】 犬附書 晉書に、陸機有駿犬、名黃耳、甚愛之、既而驛寓京師、久無家問、笑語犬曰、我家絕無書信、汝能齎書取消息否、犬搖尾作聲、乃爲書以竹筒盛之、繫其頸上、犬尋舊路南走、遂至其家、得報還洛、因以爲常。 【九】 區區 己の心を謙していふ。李陵が蘇武に答へし書に、區區竊慕之耳。

【題義】

此詩は熙寧七年八月、東坡が杭州の任に到り、飛蝗を捕へて、浮雲嶺に至つたが、山路を歩

きまはつて、疲れきつた。そこで懷を弟の子由に寄せたのである。浮雲嶺は於潛縣の南二十五里にある。於潛縣は明・清の時は、浙江杭州府に屬し、今は浙江錢塘道に屬して居る。東坡は、飛蝗の狀を述べて、上翳日月、下掩草木、遇其所落、彌望蕭然、此京東之餘波及淮浙者耳と言つて居る。 【詩意】 飛蝗が西から無數に襲ひ來つて、大空に漲り、まるで黃霧のやうである。飛蝗の秋の田に一

面に灑ぐ状は、雨も及ばない。一體、蝗の生ずるは、何に由るか、朝廷の新法は、清平であるから、此を致す譯がない。老いたる此の身が窮困の餘、自らこの飛蝗を招いたのである。昔、漢の黃霸が潁川の太守であつたとき、廉吏を擇んで、地方を伺察させた。吏は出でて郵亭に舍らないで、道の傍で食事をしたが、鳥が其肉を攫んだ。府に詣りて事を言はうとする民が、たまたま之を見て、黃霸に語つた。後日、吏が還つて、霸に謁したとき、霸は、道の傍で食事し、鳥に肉を盜まれ、嘸、困つたことであらうと言つたので、吏は大に驚いて、少しも隠すことをしなかつたといふ話がある。さて、我には斯様に鳥が肉を銜むことを訴へてくれるものもないから、少しも遠地の消息が解らない。併し、弟を憶うても憑り難い。陸機の愛した黃耳のやうな犬でもあれば、手紙を齎らして弟の許に遣りたものである。自分でも、何事につけても迂闊なことを笑つて居る。それでも心の中では、役目もあるので、蝗害の後始末を片付けようとして居る。

霜風漸欲作重陽。

霜風漸く重陽と作らんと欲す、

熠熠溪邊野菊黃。

熠熠たる溪邊野菊黃なり。

久廢山行疲鞞确。

久しく廢す山行鞞确に疲るるを、

尙能村醉舞淋浪。

尙ほ能く村醉淋浪に舞ふ。

【字解】

〔一〕霜風 宋、周邦彦の詩に、執手霜風吹鬢。〔三〕重陽 重九ともいふ。陰曆九月九日の節句、宋、潘大臨の詩に、滿城風雨近重陽。〔四〕熠熠 鮮明の貌。阮籍の清思賦に、色熠熠以流耀兮、陸游

獨眠林下夢魂好。

獨り林下に眠りて夢魂好し、

回首人間憂患長。

首を回せば人間憂患長し。

殺馬毀車從此逝。

馬を殺し車を毀ちて此より逝かん、

子來何處問行藏。

子來るも何の處に行藏を問はん。

馮良年三十、爲尉從佐、奉檄迎督郵、卽路、慨然恥在厮役、因壞車殺馬毀裂衣冠、至犍爲、從杜撫學、妻子求索蹤迹斷絕、後乃見草中有敗車死馬衣裳腐朽、謂爲虎狼盜賊所害、發喪制服、十許年、乃還鄉里。〔七〕行藏 出處進退の意、論語、述而篇に、用之則行、舍之則藏。

【詩意】

霜風が起つて、漸く九月九日の節句に近づいたので、谷間の野菊も、あざやかに黄ばんだ。我は久しく山登りもしないから、大石の鞞确たるに疲れるやうなこともない。併し、なほ能く村酒に酔うて、千鳥足に舞ひ、獨り、林下に眠つて夢心地も好いのである。首を回せば、人間の憂患は、何時までも絶えない。昔、後漢の馮良は、慨然として人に役せられるを恥ぢ、車を壞ち、馬を殺し、衣冠を毀裂し、杜撫に従つて學んだ。妻子が求索しても、蹤迹を絶つて知れないやうにしたといふ話がある。我もこれより馬を殺し、車を毀つて何處へか逝かうと思ふ。故に子が來た所で、何れの處に、其の出處進退のことを問はうぞ。新法の青苗や助役などのことは、まことに煩雜であつて、辨ずるところが出来ない。亦、己が才力の任に勝へる所ではないから、旁、我は藏れるのである。

青牛嶺高絕處有小寺人迹罕到

青牛嶺高絶の處に小寺あり、人迹到ること罕なり

暮歸走馬沙河塘。暮に歸り馬を走らす沙河の塘。

爐烟裊裊十里香。爐烟裊裊十里香し。

朝行曳杖青牛嶺。朝に行いて杖を曳く青牛の嶺。

寒泉咽咽千山靜。寒泉咽咽千山靜かなり。

君勿笑老僧耳聾。君笑ふこと勿れ老僧耳聾して喚べども

喚不聞。聞かざるを、

百年俱是可憐人。百年俱に是れ憐むべき人。

明朝且復城中去。明朝且つ復城中に去らば、

白雲卻在題詩處。白雲は卻つて詩を題する處に在らむ。

【字解】一 青牛嶺 臨安志に、

青牛嶺在新城縣西七十里、南新郷、

舊名寶福山、方丈有三東坡題詩於壁、

末云、熙寧七年八月二十五日。名勝

志に、漁洲山在新城縣西六十里、又

五里爲寶福山、山有青牛嶺、及多

福寺、白雲常覆其頂。二 沙河

直隸、沙河縣の沙河、古の渭水。

三 爐烟 唐、沈佺期(字は雲卿)

の詩に、行隨香輦登仙路、坐近爐烟

講法筵。四 裊裊 しまやかに繞

る貌。徐伯陽の詩に、圓籠裊裊掛青

絲。謝靈運の詩に、白楊信裊裊。

五 咽咽 詩、魯頌の鼓咽咽は鼓

節をいふ。こゝは、泉の水のむせぶ聲。

皮日休の詩に、壑泉教咽咽。また、漢、隴頭歌に、隴頭流水、鳴聲幽咽。白樂天の琵琶行に、幽

咽泉流水下灘。六 老僧耳聾云云 韋蟾の詩に、師言三耳重、知三師意、人是人非不欲聞。七 百年俱是云云 盧全詩に、有錢

無錢俱可憐、百年驟過如三流川。八 白雲卻在云云 王維が山中の詩に、城郭遙相望、惟應見白雲。

【題義】此の詩は熙寧七年八月二十五日、青牛嶺の多福寺に登つて、其の寺壁に題したのである。紀昀いふ、語語脫洒、咫尺而有萬里之勢。又いふ、結得縹緲、然中有寓託、不同泛作、杳杳冥冥語と。

【詩意】夕暮に歸つて、馬を沙河の塘に走らしたが、見渡せば香爐の烟は、しまやかに立ち上つて遠くまでも香しい。山寺の法筵の烟であらう。朝に行いて、杖を青牛の嶺に曳いた。登りて高きを極めた處に小さな寺がある。あたりには寒泉の咽ぶ聲が聞えるばかりで、訪ひ來る人もなく、千山至つて靜かである。君よ、笑ふことなかれ、老僧の耳が遠くて、いくら喚んでも聞えないことを。老僧は人の是、人の非を聞くことを欲しないからであらう。また、考へると、百年も眞に流川の如くで、聾する人も、聾しない人も俱に是れ憐れむべき人となつてしまふではないか。さて、明朝且つまた城中に向つて去らば、白雲は却つて詩を題した所にあるであらう。首を回せば、神馳に堪へないのである。

新城陳氏園次晁補之韻

新城陳氏の園、晁補之の韻に次す

荒涼廢圃秋寂歷幽花晚。荒涼廢圃の秋、寂歷幽花の晚。

山城已窮僻。況與城相遠。山城已に窮僻、況んや城と相遠きをや。

我來亦何事。徒倚望雲巘。我の來る亦何事、徒倚雲巘を望む。

不見^(元)苦吟人。清樽爲誰滿。苦吟の人を見ず、清樽誰が爲に滿つる。

【字解】【一】新城陳氏園。臨安志に、新城縣七賢鄉有陳氏園。【二】晁補之。宋史に、晁補之、字无咎、鉅野人、父端友工於詩、補之十七隨父官杭州、樂錢塘山川風物之麗、著三七述以謂通判蘇軾、由是知名。また、臨安志に、晁端友、熙寧中爲新城令、其子補之、隨侍官所、東坡行縣、以文來謁、遂知之。【三】荒涼。あれ果ててさびしい。孔德璋の北山移文に、石徑荒涼徒延佇。注にいふ、荒涼、蕪穢也。【四】寂歷。寂寞といふに同じ。唐、張翥の詩に、空山寂歷道心生。【五】幽花。杜子美の詩に、幽花散滿樹、小水細通池。【六】窮僻。漢書、蕭何の傳に、何買田宅、必居窮僻處。師古の注に、辟讀曰僻と見ゆ。【七】徙倚。低徊といふに同じ。楚辭、哀時命に、獨徙倚而彷徨。【八】雪嶺。雲を帯びた高い峰。東坡の詩に、海門浸坤軸、湖尾抱雪嶺。嶺は山峯をいふ。【九】苦吟。苦んで詩を作る。五代、徐夔(字は昭夢)の詩に、絡緯牀頭和苦吟。【一〇】清樽。賈賓王の詩に、還愁三徑晚、獨對一清樽。

【題義】此詩は熙寧七年八月二十六日の作である。青牛嶺は、新城縣を距る七十里、東坡の詩(前の詩)に、明朝且復城中去、白雲卻在題詩處とあるを見ても、二十六日に新城に到つたことがわかる。新城陳氏園に至ると、晁補之(字は無咎)が來り謁したので、東坡は其の和南新道中詩に次韻したのである。(王文誥いふ、南新道中原作、本集不載、此乃答无咎之和也と。)

【詩意】陳氏の園は、あれ果てて、坐に廢圃(圃は蔬菜を種うる處)の秋を思はしめ、花も寂しさうに、しづかに、夕暮を眺めて居る。山城は既に窮僻である上に、園は又、城と相遠い。一體、我の來つたのは、亦、何事であつたか。行きつもとどりつして、雲のかかつて居る峰を望む。また苦吟する人も居ないので、清樽は誰が爲に滿つるのか。(王文誥いふ、时无咎年甚少、此詩就无咎口吻爲之、有循循善誘之意、故其不矜才、不使氣如此、可想見陳氏園中無限悅樂之狀と。)

【餘録】晁无咎が雞肋集に、蘇公和南新道中作詩に次韻していふ、山園芙蓉開、寂寞歲云晚、公不無與同、念我百里遠、寒飈吟空林、白日下重巘、興盡還獨歸、挑燈古囊滿。また、讀公棲鴉詩、歲月傷晚晚、公何不念世、蠟屐行遊遠、羈鳥翔別林、歸雲抱孤巘、我才不及古、歎息襟淚滿。

梅聖俞詩中有毛長官者。今於潛令國華也。聖俞歿十五年而君猶爲令。捕蝗至其邑作詩戲之

梅聖俞の詩中に、毛長官といふものあり、今於潛の令國華なり。聖俞歿して十五年にして、君猶ほ令たり、蝗を捕へて其の邑に至り、詩を作つて之に戲る

詩翁憔悴老一官。詩翁憔悴して一官に老ゆ、
厭見苜蓿堆青盤。厭ひ見る苜蓿の青盤に堆きを。
歸來羞澀對妻子。歸り來つて羞澀妻子に對す、
自比鮎魚緣竹竿。自ら比す鮎魚の竹竿に緣るに。

古今體詩 梅聖俞詩中有毛長官者作詩戲之

【字解】【一】梅聖俞。東都事略に、梅堯臣、字聖俞、宣城人、世以詩名、堯臣遂以詩聞天下、嘉祐元年、趙槩等、薦於朝、得國子監直講、有文集四十卷。【二】毛長官。於潛縣令毛國華、字は君寶、衢州毛尙

今君滯留生二毛。今君滯留二毛を生じ、

飽聽衙鼓眠黃紬。飽くまで衙鼓を聴いて黄紬に眠る。

更將嘲笑調朋友。更に嘲笑を將て朋友を調る、

人道獼猴騎土牛。人は道ふ獼猴土牛に騎ると。

願君恰似高常侍。願ふ君の恰も高常侍に似たるを、

暫爲小邑仍刺史。暫く小邑を爲めて刺史に仍る。

不願君爲孟浩然。願はず君の孟浩然と爲るを、

却遭明主放還山。却つて明主に遭うて山に放還せらる。

宦遊逢此歲年惡。宦遊此の歲年の惡きに逢ひ、

飛蝗來時半天黑。飛蝗來る時半天黒し。

羨君封境稻如雲。羨む君が封境は稻雲の如きを、

蝗自識人人不識。蝗は自ら人を識るも人は識らず。

於黃紬被底放衙。放衙は、役所の退けどきをいふ。【九】將嘲笑調朋友。三國の周泰、新城の太守に擢でらる。司馬宣王、鍾繇をして之を調らしめて曰く、君釋褐登宰府、三十六日而擁麾蓋、守兵馬郡、乞兒乘小車、一何駛乎。泰曰く、君、明公之子、有文武采、守吏職、獼猴騎土牛、又何遲也。李太白の詩に、身騎土牛滯東魯。【一〇】似高常侍。唐書に、高適始爲封丘

尉、哥舒翰表掌書記、適有詩云、乍可狂歌草澤中、寧堪作吏風塵下、只言小邑無所爲、公門百事皆有期。杜子美贈詩云、脫身滯尉中、始與三推楚辭、後歷蜀彭二州刺史、西川節度使、終刑部侍郎、左散騎常侍。【二】爲孟浩然云云。唐書に、孟浩然遊京師、與王維善、維私邀入禁省、俄駕至、遽匿牀下、維以寔對、玄宗喜曰、朕聞其人久矣、何懼而匿、詔出再拜令自誦其詩、浩然念詩曰、不才明主棄、多病故人疏、上曰、朕未嘗棄人、自是卿不求進、命放歸南山。【三】宦遊。仕宦して他郷に在る、史記、司馬相如傳に、長卿久宦遊。【四】歲年惡。越絕書に、陰陽錯謬、卽爲惡歲。【五】稻如雲。白樂天の詩に、但喜稼如雲。

【五】蝗自識。人云云。後漢書に、卓茂爲密縣令、天下大蝗、河南二十餘縣、皆被其災、獨不入密縣界。魯恭拜中牟令、郡國螟傷稼、犬牙綠界、不入中牟。又、宋均遷九江太守、會山陽楚沛多蝗、其飛至九江界者、輒東西散去。又、戴封遷西華令、汝穎有蝗、獨不入西華界、時督郵行縣、蝗忽大至、督郵其日即去、蝗亦頓除、一境奇之。

【題義】此詩は熙寧七年八月、東坡が新城から還つて、於潜に至つた時の作。梅堯臣（梅堯臣、字は聖俞）の詩中に、毛長官といふものあり。今、於潜縣の令毛國華である。聖俞が歿してから、十五年にもなつたが、君は猶ほ縣令となつて居る。東坡は蝗を捕へて、其の邑に至り、詩を作つて之に戯れたのである。紀昀いふ、晚唐五代之下調、東坡何以爲之と。

【詩意】詩翁梅聖俞は、詩を以て世に知られたが、仕宦すること三十年、一官に老いて、終に一の館職をも得なかつた。敕を受けて、書を修むるに及び、其の妻刁氏に語つて曰く、吾之修書、可謂獼猴入布袋矣と。妻、對へていふ、君之於仕宦、亦何異鮎魚緣竹竿乎と。聞くもの、以て名對となした。古詩に盤中何所有、首蓓長闌干とあるが、首蓓の青盤に堆くなつて居るもの、まことに見るに懶い。歸り來つて、妻子に對するも、羞かしくて、外から見ても活氣がない。實に鮎魚の竹竿に縁

書の孫。【三】詩翁憔悴。詩翁は、梅聖俞をいふ。憔悴は、やせ衰へる。屈原、漁父辭に、顔色憔悴、形容枯槁。【四】首蓓。うまごやし。史記、大宛傳に、馬嗜首蓓、漢使取其實一來。唐、薛令之の詩に、盤中何所有、首蓓長闌干。【五】差澀。杜子美の詩に、囊空恐澀澀、留得一錢看。【六】鮎魚緣竹竿。本草に、鮎魚、卽鱖魚之能上樹者、俗云鮎魚上竿、乃此也。異物志に、有魚之形、以足行如蝦。【七】二毛。斑白といふに同じ。左傳、僖公二十二年に、君子不重傷、不禽二毛。潘岳の秋興賦に、余春秋三十有二、始見二毛。【八】聽衙鼓眠黃紬。王注に、世傳、太祖戒敕縣令、勿

古今體詩 梅聖俞詩中有毛長官者作詩戲之

二五三

るに等しい身の上である。今、君も亦、滯留して一官に老い、頭髮も斑白となつた。相變らず、役所の退出時の太鼓を聴いて黄袖に眠つて居り、更に嘲笑して朋友を調つて居る。それで世間の人は、君のかかる仕途を評して、獼猴の土牛に騎るやうで、昇進が遅いなど言つて居る。どうか、君は散騎常侍高適の如くあつて欲しい。高適は暫く小邑を爲めて、すべては刺史に仍つたのである。又、君の詩人孟浩然のやうであることを願はない。孟浩然是、玄宗皇帝のやうな明主に遭ひながら、之に仕へることをしないので、山に放還されたのである。(所謂戲なるもの此の四句に在る。)仕宦して他郷に住し、剩へ陰陽の錯謬した此の惡處に逢つた。さて飛蝗の襲ひ來るときは、半天も眞黒である。然るに羨しいのは、君の封境の稻が實つて雲の如きことである。昔、後漢の卓茂が密の縣令であつた時、天下に大に蝗があつて、河南の二十餘縣が、皆、其の災を被つた時、獨り密縣の界だけには入らなかつたといふことである。此類は、往々ある。徳化の力、蝗は自ら人を識るも、人は之を識らないのである。

與毛令方尉遊西菩提寺二首

毛令方尉と西菩提寺に遊ぶ、二首

推擠不去已三年。

推擠すれども去らざる已に三年、

魚鳥依然笑我頑。

魚鳥依然として我が頑を笑ふ。

【字解】(一) 毛令方尉 毛國華、字は君實と、尉、方君武。於瀋縣圖

人未放歸江北路。

人未だ江北の路に放ち歸されず、

天教看盡浙西山。

天は浙西の山を看盡くさしむ。

尙書清節衣冠後。

尙書清節衣冠の後、

處士風流水石間。

處士風流水石の間。

一笑相逢那易得。

一笑相逢ふこと那ぞ得易からん、

數詩狂語不須刪。

數詩の狂語刪するを須めず。

經に、毛君實、同尉方君武與東坡、於熙寧七年八月二十七日、同遊西菩提寺。石刻存焉。【一】西菩提寺 縣を去る十五里。臨安志に、西菩提寺在瀋西十八里、波亭鄉云云。【二】推擠 同く東坡の詩に、潦水輕推擠などと用ひて居る。【三】江北路 國語に、吳王起師軍於江北路。

【五】看盡浙西山 元和郡縣志に、浙西觀察使管州六潤常蘇杭湖秀。【六】尙書清節云云 毛令方君武の後、三國志に、毛玠典選擧、以儉率人、魏太祖以素屏風素馮几賜玠曰、君有古人之風、故賜君以古人之服、玠居顯位、常有衣蔬食、後歷官爲尙書僕射。【七】處士風流水石間 方干は桐廬の人、幼より清才あり、徐凝に器とせらる。然れども姿態山野、終に登第せず。當時、方處士と號す。後、韋莊、奏して及第を賜ふ。唐書に、方干、字雄飛、新安人、咸通中、遷於會稽鑑湖之濱、漁釣爲樂、時號逸士、有詩十卷、序之者謂入錢起之室。唐末宰臣(張文蔚)奏、名儒不遇者、十有五人、請賜一官以慰泉下、干其一也。

【題義】此詩は熙寧七年八月の作。臨安志に據るに、熙寧七年八月、蘇文忠公同毛君實・方君武訪參寥辨才、遂宿西菩山、留題云云とある。今、題と詩とを考へるに、參寥のことに及んで居ない。當時

東坡は猶ほ未だ其人を知らなかつたであらう。三・四は香山得意の句。【詩意】推擠しても、留まつて去らない。依然として動かないことが已に三年である。魚や鳥までも、我が頑固であることを笑つて居る。如何に笑はれても、我は未だ江北の路に放ち歸されないのである。

天は浙西觀察使をして、潤・常・蘇・杭・湖・秀の六州を管せしめ、浙西の山山を看盡くさしめる。看盡くして、毛珩尚書の後である毛君寶を得、又、唐の處士方干にも比すべき方君武を得た。毛尚書は顯位に居ても、清節を守つて、常に布衣を著け、蔬食を喫したさうである。方干、字は雄飛は、會稽、鑑湖の濱に遯れて、水石の間に漁釣を樂みとして居た逸士ださうである。尚書と處士と、一笑して相逢ふことは、實に奇遇である。この數詩の狂語は、固より刪定を須る程のものではないが、敢て左右に寄するのである。

路轉山腰足未移。

路は山腰に轉じて足未だ移らず、

水清石瘦便能奇。

水清く石瘦せて便ち能く奇なり。

白雲自占東西嶺。

白雲自ら占む東西の嶺、

明月誰分上下池。

明月誰か分たん上下の池。

黑黍黃梁初熟候。

黒黍や黄梁の初めて熟するの候、

朱柑綠橘半甜時。

朱柑綠橘半は甜き時。

人生此樂須天賦。

人生の此の樂みは須らく天賦なるべし、

莫遣兒郎取次知。

兒郎をして取次に知らしむること莫れ。

【字解】(一) 山腰 孟浩然の詩に、山腰度石關。元稹の詩に、水面波疑穀、山腰虹似巾。(二) 白雲自占東西嶺 於潛圖經に、寺前有東西兩山、或有雲晦遙望如嶺焉。臨安志に、明智寺有二雙峰堂。西菩寺記に、兩峰屹然如立三長人、泉湧西巖之趾、盛夏常寒。(三) 明月誰分上下池 臨安志に、明智寺中、有清涼池、明月池。(四) 黒黍黄梁 黒い黍は、爾雅に、秬、黒黍とある。黄梁は、お

はあは、隋書、禮儀志に、黄梁以簋、白梁以簋。簋は神に供へる黍稷をもる器。

【五】取次 次第の義。白樂天の詩に、醉把三花枝取次吟。

【詩意】路は山腰の處で轉じたが、足が未だ移らない。暫し佇んで眺めると、水は清く、石は瘦せて、まことに奇勝である。西菩山の前には、東西の兩山があつて、白雲が繚繞して居り、遙に之を望むと、嶺のやうである。明月は上の池にも下の池にも映つて居る。臨安志に據ると、西菩山の明智寺に、清涼池・明月池があるから、言つたのである。黒黍や黄梁の初めて熟する季節、酒を醸すことも出来る。朱い柑子や緑の橘、半ば甜くなつた時分、人生自然の嘉樂是に過ぐるものはなからう。ただ小兒輩をして次第に知らしめては、遊惰に流れるから宜しくない。(この結は、王羲之が但恐兒輩覺の語意を用ひて居る。)

聽賢師琴

賢師の琴を聽く

大絃春溫和且平。

大絃は春溫和にして且つ平に、

小絃廉折亮以清。

小絃は廉折亮にして以て清し。

平生未識宮與角。

平生未だ識らず宮と角とを、

但聞牛鳴盎中雉。

但聞く牛の盎中に鳴き雉の木に登るを。

【字解】(一) 賢師 杭州の僧、惟賢をいふ。(二) 大絃春溫云云 史記、田完世家に、騶忌子以鼓琴見威王曰、夫大絃濁以春溫者君也、小絃廉折以清者、相也云云。(三)

登木。

門前剝啄誰叩門。

門前剝啄誰叩門。

山僧未閑君勿嗔。

山僧未閑君勿嗔。

歸家且覓千斛水。

家に歸りて且つ千斛の水を覓め、

淨洗從前箏笛耳。

從前箏笛の耳を淨洗せん。

至門。輟耕錄に、無剝啄、松影參差。【五】箏笛耳。白樂天の廢琴詩に、何物使之然、羌笛與秦箏。

牛鳴、蝨中云云。管子、地員篇に、凡聽微、如負猪豕、覺而駭、凡聽羽、如鳴馬在野、凡聽宮如牛鳴、凡聽商、如離羣羊、凡聽角、如雉登木以鳴、音疾以清。【四】剝啄。訪問客の戸を叩く音。韓退之の剝啄行に、剝啄啄、有客

【題義】此詩は熙寧五年八月の作である。施注其他は、東坡が杭の倅を罷めた後の作として居る。杭僧惟賢の琴を聴き、歐陽修が琴詩を論ずる旨を用ひて、此詩を作つたのである。眞蹟は明の汪珂玉の撰んだ珊瑚網(書名)に載つて居る。詩後の一行に、聽賢師定慧琴の六字がある。紀昀いふ、意境甚闊、不知其爲四韻詩と。

【詩意】琴の第一絃を宮となし、第三絃を商となす。次を角となし、次を徵となし、次を羽となす。大絃は春の温かなるが如く、和にして且つ平かである。小絃は廉折の所があつて、亮かな清い音を發する。我は元來、音を解しないので、宮の何たり、角の何たるかを知らない。但、牛が蝨の中に鳴き、(鳴)窠中の意、窠は窠、あなぐら)雉が木に登りて鳴くやうに聞える。前者は所謂宮の音で、後者は所謂角の音である。惟賢師が琴を彈じて居るとき、門前、戸をほとほと叩いて、訪づれる客があ

つた。師は山に住しても、未だ閑なることを得ない。山僧未閑と言つても、君よ嗔つてはならない。それは、さて置き、家に歸つて、まあ千斛の水を覓めて、これまで聞き慣れた箏や笛の耳を洗ひ淨めたいものである。

【餘録】東坡の詩話に、昵昵兒女語、恩怨相爾汝、劃然變軒昂、勇士赴敵場、此退之聽穎師琴一詩也、歐陽公嘗問僕、琴詩何者最佳、余以此答之、公言、此詩固奇麗、然自是聽琵琶詩、非琴詩、余退而作杭僧惟賢詩云云、詩成欲寄公、而公薨、至今以爲恨とある。王文誥いふ、尙書、搏拊琴瑟、韓非子、師涓撫琴、搏拊同義、是韓非本尙書也、樂記、清廟之瑟、朱絃而疏越、注、疏而通之、使其聲遲緩、詩、鼓瑟鼓琴、鼓亦撫也、撫與琴同、此琴瑟竝用撫琴之證、史記、舜彈五絃之琴、彈屬右手、一字一聲、而撫屬左手、義又爲按、右聲易盡、則左按而琴之、故其聲疏通而遲緩、是搏拊已有吟猱、但古時簡易耳云云。又いふ、古樂雖亡、而器猶古制、琴面圓而順下、徽(琴節)不隆起者、爲撫琴過指之地、如左按右按、一字一聲、徽必隆起云云、孔子取韶樂、放鄭聲、古樂既有鄭聲、鄭聲同此琴瑟簫管、故孔子惡其亂雅、以韶鄭同器、不能不放、是凡器、皆有鄭聲、又、不獨琴也、昌黎、恩怨爾汝、軒昂敵場、所聞殆此類、而永叔詆爲琵琶、公此詩、因永叔而發、而昌黎詩、由是傳爲口舌、至今屈抑莫申、無有敢正之者、特詳論之云云と。

贈寫真何充秀才

寫真何充秀才に贈る

君不見潞州別駕 君見すや潞州の別駕

眼如電

左手挂弓橫撚箭 左手に弓を掛けて横に箭を撚るを。

又不見雪中騎驢 又見すや雪中驢に騎る孟浩然、

孟浩然

皺眉吟詩肩聳山 眉を皺め詩を吟じて肩山を聳かすを。

飢寒富貴兩安在 飢寒富貴兩ながら安くに在る、

空有遺像留人間 空しく遺像の人間に留まるあり。

此身常擬同外物 此身常に擬す外物に同じからんことを、

浮雲變化無蹤跡 浮雲變化蹤跡なし。

問君何苦寫我真 君に問ふ何ぞ苦に我が真を寫せる、

君言好之聊自適 君は言ふ之を好んで聊か自適すと。

黃冠野服山家容 黃冠野服山家の容、

【字解】 寫真 人の容貌を

畫に寫す。圖繪寶鑑の宋部に、何充、

姑蘇人、能寫貌擅藝、東南無出其

其右也。【三】何充 字は浩然、宋

の郭若虛の圖畫見聞志に、宋自健

隆一以至熙寧、工傳寫者七人、何充

與焉。本集の與三王定國一尺牘にいふ、

蘇州何充畫真雖不全似、而筆墨之

精已可奇也。充の蘇州の人である

ことを知る。【三】潞州別駕 唐、地

理志に、潞州屬河東道。別駕は通典

に、從三刺史行部、別乘一乘傳車、

故謂之別駕。唐書に、明皇英武善射、

初封臨淄王、爲潞州別駕。【四】

眼如電 晉書に、王戎視日不眩、

裴楷見而目之曰、戎眼爛爛如巖下

電。【五】橫撚箭 尙書譚錄に、潞

州啓聖宮有明皇敍枕斜書壁處、腰

鼓馬槽並在、明皇有一目微斜、故作

橫撚箭之狀。世に明皇の獵圖を畫

く、馬上に臂弓撚箭の象を作る。

【六】孟浩然 餘錄に詳なり。五言

の詩に工で、嘗て京師諸名士の間に

遊び、祕省聯句を集む。【七】常擬

自分の心になふ。莊子、大宗師篇に、

擬は字彙に、揣摩而待也。用例は、擬

擬三可汗先開幕。雁度寒江擬雪天。

【八】自適 自適 自適 自適

是適三人之適、而不自適其適者也。漢書の高鳳傳に、潛心篤行、屢辟不應、以漁釣自適。

【九】黃冠野服 禮記、郊特牲篇に、

野夫黃冠、黃冠、艸服也。野服は、又之を便服といふ。【一〇】置我山巖中 晉書に、顧愷之(字は長康)爲謝鯤(字は幼輿)象、在石

岩裏、云、此子宜置丘壑中。又、明帝在東宮、見琨問曰、論者以君方庚亮、自謂何如、答曰、端委廟堂、使百僚準則、臣不如

亮、一邱一壑、自謂過之。一邱一壑は、山に棲み、谷に釣りして、世外に超然たる義。【一一】褒公與鄂公 杜子美が丹青の引に、

凌烟功臣少顏色、將軍下筆開生面、良相頭上進賢冠、猛將腰間大羽箭、褒公鄂公毛髮動、英姿颯爽來酣戰。

【題義】 何充秀才は、影像に巧みであるから、徒らに東坡の像を畫かうよりは、往いて今の世の褒公や

鄂公に比すべき人を寫されよといふのが此詩の趣旨である。褒公は段志玄、鄂公は尉遲敬德、二人とも、唐の太宗が凌烟閣上に畫いた功臣二十四人中の人人である。紀昀は此詩を評して意境甚淺と言

つた。

【詩意】 君見すや、唐の明皇(玄宗)の眼中には、光芒があつて、きらきらと耀いて居ることを。玄宗

は生れ付が英武であつて、騎射を善くし、始め楚王に封せられ、後、臨淄郡王となり、累に衛尉少卿

潞州の別駕に遷つた。玄宗の獵の圖を見るに、左手の臂に弓を掛け、斜に視て箭を撚るの状を作して

居る。又、見すや雪中驢馬に騎る孟浩然を。眉を皺め、肩を聳かして詩を吟じて居る。(孟浩然が赴

古今體詩 贈寫真何充秀才

京途中遇雪詩に、迢遞秦京道、蒼茫歲暮天、窮陰連晦朔、積雪滿山川、落雁迷沙渚、飢鳥噪野田、客愁空佇立、不見有人烟とある。さて孟浩然が飢寒も、玄宗皇帝が富貴も、兩者、今皆、安くに在る、共に盡くるに歸して、只、一時の狀を寫せる遺像のみが、世上に存し留るのみである。(飢寒は浩然をいひ、富貴は玄宗をいふ。二人は皆、滅没に歸す)かくの如く富貴も、貧賤も、智・愚・賢・不肖皆、亡滅するのであるから、此身は少しも愛惜すべきものでない。外物と同じやうにと擬しても、浮雲の空に満ちて、暫しの間に變化し、消散して、遂に跡方もないやうなものである。要するに滅息するのが、萬有の實相だと思ふ。君に問ふ、何が故に心を盡くして苦に我が眞像を寫せる。君は言ふ、眞を寫すことを好んで、之を自ら意に適へりとして居ると。何充が東坡の像を畫くに、黃冠を冠らしめ、野服を着けて、山家隱逸の人の容としたのは、東坡を山岩の中に住むべき人だと思つてのことであらう。謝鯤嘗ていふ、一邱一壑と、山に棲み、谷に釣りする意である。東坡も此種の世外に超然たる人として影像したのであらう。併し、唐の故事に従つて凌烟閣上に人物を畫くとすれば、勳名の功臣は、今の世にも猶ほ澤山あつて、數限りがない。何充は徒らに東坡の像を畫かうよりは、往いて今の世の褒公(段志玄)や鄂公(尉遲敬德)ともいふべき人達を寫された方が餘程よいではないかと結んだのである。

【餘錄】或人、鄭紫に問ふ。(紫字は蘊武、進士及第、廬州の刺史に補せられ、後、宰相となる。疾を以て骸を乞ひ、太子少保に拜せらる。)詩思は何れの時か最も好きと、鄭紫答へていふ、詩興の面白き

は、雪の中に、灞橋の上を驢馬に騎つて行くに如くはないと。(これは本傳には載せないが、劉肅が大唐新語に詳かなりといふことである。)宋の孫光憲が北夢瑣言に、唐、鄭紫有詩名、或曰、相國近有新詩否、對曰、詩思在灞橋風雪中、驢子上此處、何以得之。陸深が玉堂漫筆に、世傳七賢過關圖、是開元雪後、張說・張九齡・李白・李華・王維・鄭虔・孟浩然出藍田關、遊龍門寺、鄭虔圖之とある。宋の唐彥謙(字は茂業、鹿門先生と號す)が憶孟浩然詩に、郊外凌兢西復東、雪晴驢背興無窮、句搜明月梨花内、趣入春風柳絮中といふがある。襄陽驢背尋詩事は、名高い話である。又、孟浩然のことは、新唐書、列傳に、孟浩然、襄州襄陽人、少好節義、喜振人患難、隱鹿門山、年四十乃游京師、嘗於大學賦詩、一座嗟伏、無敢抗、張九齡・王維、雅稱道之、維私邀入内署、俄而玄宗至、浩然匿牀下、維以實對、帝喜曰、朕聞其人而未見也、何懼而匿、詔浩然出、帝問其詩、浩然再拜自誦所爲、至不才明主棄之句、帝曰、卿不求仕、而朕未嘗棄卿、奈何誣我、因放還、開元末、病疽背卒と見えて居る。

回先生過湖州東林沈氏飲醉以石榴皮書其
家東老菴之壁云西隣已富憂不足東老雖貧
樂有餘白酒釀來因好客黃金散盡爲收書西

蜀和仲聞而次其韻三首。東老沈氏之老自謂也。湖人因以名之。其子偕作詩。有可觀者。

回先生湖州に過る。東林の沈氏飲ましむ。酔うて石榴の皮を以て其の家の東老菴の壁に書いていふ、西隣已に富めるも足らざるを憂ふ。東老貧しと雖も樂み餘あり。白酒釀し來つて因つて客を好み、黄金散じ盡くして爲に書を受む。西蜀の和仲聞いて其の韻に次す三首、東老是沈氏の老自ら謂ふなり。湖人因つて以て之に名く。其の子偕、詩を作る、觀るべきものあり。

世俗何知貧是病。

世俗何ぞ知らん貧は是れ病なるを、

神仙可學道之餘。

神仙學ぶべきは道の餘。

但知白酒留佳客。

但知る白酒佳客を留むるを、

不問黃公覓素書。

黃公を問はず素書を覓む。

【字解】(一)回先生 王會、回

仙碑に、熙寧元年八月十九日、湖州歸

安縣之東林、有隱君子、沈思宇持正、

隱於東林、因以東老一名焉、能釀三十

八仙白酒、二日有客、自稱回道人、

長揖東老曰、知君白酒新熟、願求

一醉否、公命之坐、徐觀其目、碧色粲然、光彩射人、與之語、知非塵埃中人、也、因出與飲、自三日至暮、已飲數斗、殊無酒色、回曰、久不遊浙中、今爲子有陰德、留詩贈子、乃擊席上榴皮、畫字題於菴壁。【二】東林 吳興備志に、歸安縣有東林山、一名、貝錦峰、上有回仙觀、沈東老捨宅。侯鯖錄に、熙寧中、有道士、過沈東老、飲酒、用石榴皮寫詩於壁上、自稱回山人、東老送出門、至石橋上云云。【三】沈氏 吳興備志に、沈偕號太清子、登進士第、歷左宣德郎、終知池州建德縣。【四】貧是病 史記原憲傳に、子貢過原憲、憲攝敝衣冠、見子貢曰、夫子豈病乎、憲曰、貧也、非病也。【五】神仙可學云云 唐天師、神仙可學論一卷

を著す。【六】黃公 漢、張良傳に、取履、跪進、老父、老夫出一編書、曰、讀是則爲王者師、後十年興、十三年、孺子見我濟北穀城山下、黃石、即我也、其書、乃太公兵法。【七】素書 黃石公に素書三卷あり。

【題義】熙寧七年十月、東坡が常州に至つた時、沈偕に遇ひ、回先生の事を聞いたから、此詩を作つたのである。本集中、和回先生詩の跋に、僕過晉陽、見東老之子偕、道其事、爲和此詩、後十六年、復與偕相遇於錢塘、と見えて居る。

【詩意】昔、原憲は隠れて草澤の中に居る。子貢は衛の相となり、駟を結び、騎を連れ、藜藿を排いて、憲が窮廬に過つた。原憲は敝れたる衣冠を著けて、子貢を見ると、子貢曰く、夫子、豈、病むかと、憲は吾、之を聞く、財の無きもの、之を貧といひ、道を學んで行ふ能はざるもの、之を病といふと、憲が如きは貧なり、病にあらずと言つたさうである。世俗の人は、どうして、貧は是れ病なるを知らうぞ。唐天師は神仙學すべきの論を著したが、神仙學すべきは道の餘である。但、白酒を釀して、佳客を留めることを知る。そして黃石公を問はないで、其の素書を覓めるのである。

符離道士晨興際、符離道士晨興の際、

華岳先生尸解餘、華岳先生尸解の餘、

忽見黃庭丹篆句、忽ち見る黃庭丹篆の句を、

猶傳青紙小朱書、猶ほ傳ふ青紙小朱の書を。

【字解】(一)符離道士 王注に、

宿州、符離縣、天慶觀、寧道士者、

少年談老莊、極可采、寧云、道中

實菜人、儀狀雄偉、常此遊息、一日

於三屏上、題二絕句而去、書爲大

篆、體法極異、或曰、此洞賓先生所

古今體詩 回先生過湖州西蜀和仲聞而次其韻三首

書也、郡人争列之、以治疾、字字剥痕深寸餘、墨迹不滅。【三】華岳先生、神仙傳に、陳搏、字圖南、居華山雲臺觀、豫知死日、端拱（宋太宗の年號）二年七月二十九日、卒於蓮花峰下、張超谷室中、死七日有五色雲、蔽塞洞口、經月不散。【三】尸解、修仙者の化去をいふ。集仙錄に、形如生人者、尸解也、足不青、皮不皺者尸解也、目光不落、無異生人者尸解也、有三死而更生者、有未斂而失尸者、有髮脫而形飛者、皆尸解也、白日解者爲上、夜半解者爲下、即ち身體のみを残して、魂魄の抜け去るをいふ。白日去るを上解といひ、夜半去るを下解といふ。【四】黃庭丹篆句、呂洞賓の詩に、肘傳丹篆千年術、口誦黃庭兩卷經、鶴觀天壇槐影裏、惜無三人迹、尸長局。【五】青紙小朱書、神仙傳に、華陽處士李奇自言、開元中郎官、嘗至陳搏齋中、以下朱書青紙、詩吟小童齋似搏、搏與唱和交友焉。

【詩意】人が死んでも、形は生ける如く、ただ魂だけが抜け去るのを、道家では、名けて尸解といつて居る。符離縣の天慶觀に、寧道士といふものがあつた。常に道觀に遊息する人があつたが、一日晨興の際、觀の扉上に、大篆文字で二絶句を題して去つた。此人は呂洞賓だらうといふことである。又、華山の雲臺觀の陳搏は、豫め死日を知つて尸解し去つたと傳へて居る。前者の呂洞賓の詩に、肘傳丹篆千年術、口誦黃庭兩卷經の句がある。後者の陳搏は、嘗て仙術を修めて齋中に在つた時、一官が齋中に至つて、青紙に朱書した詩を、小童に齋せて陳搏に似した所、搏は共に唱和したといふことである。（此詩は此故事に據つて忽見黃庭丹篆句といひ、猶傳青紙小朱書といつたのである。）

淒涼雨露三年後、淒涼雨露三年の後の、

髣髴塵埃數字餘、髣髴塵埃數字の餘、

至用榴皮緣底事、榴皮を用ゐるに至るは底事に緣る、

【字解】【一】淒涼、寂しくて愴む意。李太白の詩に、覽古情淒涼。杜子美の詩に、山陰一茅宇、江海日淒涼。【二】雨露、禮、祭儀に、雨

中書君豈不中書、中書君豈書するに中らざるか。

り。後漢書、馮衍傳に、以至人之髣髴。楚辭に、時髣髴以遙見兮。【四】底事、何事といふに同じ。十年成底事など、唐人の詩に多く用ふ。【五】中書君、筆をいふ。韓愈の毛穎傳に、穎拜中書令、上嘗呼爲中書君、後因進見、上見其髮秃、又所模畫、不能稱上意、上嘻笑曰、中書君老而秃、不任吾用、吾嘗謂君中書君、君今不中書耶。

【詩意】熙寧七年に、東坡は晉陽に過つて、東老の子偕に遇つた。時に東老は已に没して三年も経つたから、淒涼雨露三年後と言ひ起したのである。（吳興備志に、東老遇回仙、後四年、中秋化去云云とある。）東林の隱君子沈氏が酔うて、石榴の皮で書いたといふ東老菴の壁書も、今は塵埃に覆はれ、髣髴として數字の迹を見るのみである。一體字を書くに、中書君（筆）を用ひないで、榴皮を用ひるのは、何事に緣るのであらうか、中書君といふは、名のみであつて、其の實は書するに中らざるのでもあらうかと。

李行中醉眠亭三首、李行中醉眠亭 三首

已向閒中作地仙、已向閒中向つて地仙となり、
更於酒裏得天全、更に酒裏に於て天全を得。
從教世路風波惡、從教世路風波惡きも、

【字解】【一】李行中、李無悔、字は行中は、雪川の人。徙りて潞江に居る。志を高尙にして任へず。【二】醉眠亭、吳郡志に、醉眠亭在潞江、

賀監偏工水底眠。賀監は偏工にして水底に眠る。

李無悔所居。【三】地仙。唐、孫思邈の千金要方に、以三虫水蛭爲

藥、以害物命、不獲三上昇、爲地仙。【四】得三全。莊子に、醉者墜車、雖疾不死、骨節與人同、而犯害與人異、其神全也。【五】風波惡。李太白の橫江詞に、橫江欲渡風波惡。【六】賀監偏工水底眠。唐の賀知章字は季真、祕書監たり。杜子美の飲中八仙歌に、知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠。

【題義】此詩は熙寧七年九月、湖州に於て、李行中の爲に作つたものである。當時李公擇・張子野・陳令舉等にも、皆醉眠亭の詩がある。

【詩意】閑地を乞うて自ら養はんと欲し、已に閑中に向つて地仙となる。地仙と言つたのは、上昇することを得ないで、人間に住して俗を離れたのである。唐の賀知章は、天寶の初、田里に歸つて、道士とならんことを乞うた。詔して鏡湖剡川一曲を賜ひ、東門に供張し、百僚も祖餞(送別する)をした。其時の御製の詩に、遺榮朝入道、辭老早抽簪、豈不惜賢德、其如高尚心とある。知章は更に醉郷に遊び、酒裏に天真を全うした。もと、南方の水國なる吳の生れであるから、船にはかり乗つて、乘馬には慣れない。まして爛醉の餘、醉眼がちらついて、昏花を生じ、路傍の井戸に陥ちても氣が附かないで水の底に眠つた。して見ると、たとひ、世路は崎嶇として行き難く、江湖を渡らんとして風波の悪しきに遇つても、知章は平氣で、馬に騎ること船に乗るに似、眼花井に落ちて水底に眠つて居るではないか。

【餘錄】李公擇が醉眠亭の詩に、陶公醉眠野中石、君醉輒眠舍後亭、人知醉眠盡以酒、不知身醉心長

醒、衆人清晨未嘗飲、已若醉夢、心冥冥、淫名嗜利到窮老。有耳亦不聞雷霆、醉石雖頑慰山側、昔昏蘇劍誰與局、牧童樵叟亦能指、卒以陶令垂千齡、危檐弱棟倚荒渚、海霧江雨穿疏櫺、勿謂幽亭易推折、勉事偉節同明星と。張子野が醉眠亭の詩に、醉翁家有醉眠亭、爲愛江隄亂草青、不聽耳邊啼鳥喚、任教風外雜花零、飲酣何必過比舍、樂甚應宜造大庭、五柳北牕知此趣、三閭南楚漫孤醒。

君且歸休我欲眠。君且歸り休め我眠らんと欲す、

人言此語出天然。人は言ふ此語天然に出づと。

醉中對客眠何害。醉中客に對し眠る何ぞ害せん、

須信陶潛未若賢。須らく信ずべし陶潛は未だ賢に若かざ

【字解】君且歸休 晉、陶

潛、酒あれば、輒ち設け、賓主を問はず。醉へば則ち客に語つて曰く、我

醉欲眠、君且去、明朝有意抱琴來。

【詩意】陶淵明は、貴い人でも、賤い人でも、訪はれると、皆、爲に酒を設ける。淵明先づ酔ふと、

客に語つて曰く、我酔うて眠らんと欲す、卿去るべしと。李太白も、山中で幽人と對酌し、我酔うて眠らんと欲す、君且つ去れと言つた。陶然として酔ひ、しきりに眠を催すから、客を謝するのである。

我眠る、君歸れといふは、氣兼ね何もない自然の語と、人は言つて居る。併し、酔中、客に對して眠ることは、別に差支がないではないか。必ずしも客をして去らしめるにも及ぶまい。して見ると、陶

淵明は此點から言つて、未だ賢ではない。

孝先風味也堪憐。孝先の風味は也憐むに堪へたり、肯爲周公晝日眠。肯て周公と爲つて晝日に眠る。枕麴先生猶笑汝。麴を枕にして先生猶ほ汝を笑ひ、枉將空腹貯遺編。枉げて空腹を將て遺編を貯ふ。

【字解】(一) 孝先 後漢書に、邊韶、字孝先、曾晝日假臥、弟子私嘲之曰、邊孝先、腹便便、懶讀書、但欲眠。韶潛聞、應時對曰、邊爲姓、孝先字、腹便便、五經笥、但欲眠、思經事、寐與周公通夢、靜與孔子同意、師而可嘲、出何典記、嘲者大慙。(二) 風味 人品のおだやかなるをいふ。韓退之の答李使君書に、慕仰風味、未嘗敢忘。(三) 爲周公云云 論語、述而篇に、吾不復夢見周公。(四) 枕麴先生 劉伶の酒德頌に、先生於是方捧罍、承槽、銜杯、漱醪、奮髯、箕踞枕麴藉糟。白樂天の詩に、居士忘筌兀兀坐、先生枕麴昏昏睡。(五) 空腹 世説に、王導嘗枕周顛膝而指其腹曰、卿此中何所有也、答曰、此中空洞無物、足容三升粟數百人、導亦不以爲忤。

【詩意】後漢の邊孝先の穩かな人品は、また、憐むべきである。而も才思が敏絶で、口に應じて章を成す。嘗て晝日、假寐をした。弟子どもが之を嘲けつて、邊孝先、腹便便、書を讀むに懶く、但、眠らんと欲すと。孝先は之を聞き、聲に應じ對て曰く、邊を姓となし孝先は字、腹便便は五經の笥、但、眠らんと欲す、經事を思ふ、寐ねて周公と夢を同うし、靜にして孔子と意を同うす。師にして嘲るべきは、何の典記に出づると。劉伶の如き酒仙は麴を枕にして、終日昏昏として睡り、猶ほ汝の周公を夢みつつ、其の空な腹に遺編を貯へるのを笑つて居る。

潤州甘露寺彈箏

潤州甘露寺に箏を彈す

多景樓上彈神曲。多景樓上神曲を彈す、

欲斷哀絃再三促。哀絃を斷たんと欲して再三促す。

江妃出聽霧雨愁。江妃出で聽いて霧雨愁へ、

白浪翻空動浮玉。白浪空に翻りて浮玉を動かす。

喚取吾家雙鳳槽。吾が家の雙鳳槽を喚取して、

遣作三峽孤猿號。三峽孤猿の號ぶを作さしむ。

與君合奏芳春調。君の與に芳春調を合奏すれば、

啄木飛來霜樹杪。啄木飛び來る霜樹の杪。

【字解】(一) 甘露寺 京口志に、甘露寺、有二多景樓、中刻東坡熙寧甲寅(七年)與孫巨源輩會此、賦采桑子詞碑石今尙存。(二) 彈神曲 今の箏中に神曲あり。(三) 江妃出聽 郭璞の江賦に、馮夷倚浪以傲睨、江妃含嘖而詠眇。(四) 動浮玉 東坡の自注に、浮玉、金山の名。(五) 喚取吾家雙鳳槽 雙鳳槽は樂器。潘岳の笙賦に、光妓儼其階列、雙鳳嘈以和鳴。東坡の家に、胡琴婢あり、能く漉索、涼州、冰

車、鐵馬の聲をなす。是時、方に家累と同行す、故にいふ、喚取吾家雙鳳槽と。(六) 三峽孤猿號 梁簡文、巴東三峽歌に、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳。(七) 啄木飛來云云 歐陽公の楊直講女奴彈琵琶詩に、大絃聲遲小絃促、十歲嬌兒彈啄木、啄木不啄新生枝、惟啄牙樁枯樹腹、啄木飛從三何處來、花間葉底時丁丁、林空山靜聲愈響、行人舉頭飛鳥驚。

【題義】此詩は熙寧七年十月の作。東坡は京口に過り、胡宗愈(字は完夫、常州の人)・王存(字は正仲、京口の人)・孫洙(字は巨源、揚州の人)と相會して、劇飲笑樂を作した。又、多景樓に遊んで採桑子詞を作り、再び甘露寺聽彈箏の詩を作つたのである。

【詩意】東坡は巨源・正仲と同じく多景樓に遊んだ。座に京師の官妓が、皆侍つて居たが、其の中で胡琴を弾くもの、姿も伎も尤も妙であつた。三公は、皆一時の英彦である。そして其の境の勝である上に、其の客の秀、其の伎の妙、真に希遇であつた。酒が闌なる時分、巨源は東坡に請うて曰く、殘霞晚照非奇詞と、遂に採桑子詞を作つた。詞にいふ、多情多感仍多病、多景樓中樽酒相逢、樂事回頭一笑空、停杯且聽琵琶語。細燃輕籠醉臉春融、斜照江天一抹紅と。さて、樓上で神曲を弾じたが、其の哀絃を斷たうとして、再三絃を促したのである。妙なる音に江妃（水神）も出でて聴き、霧雨までも愁へ、白浪は空に翻つて浮玉山をも動かすがやうであつた。東坡の家に以前より胡琴を善くする婢があつて、是時にも同行したから、喚取吾家雙鳳槽と言つたのである。胡琴を弾じて、三峽の孤猿が號びを聞かしてはならない。猿が鳴いて三聲、涙は裳を沾すのである。君が爲に芳春調を合奏すると、啄木も聲を尋ねて、何處よりか飛んで來り、霜樹の杪に上るのである。林空しく山は靜に、聲がいよいよ響く。行人は頭を擧げ、飛鳥も驚いて居る。

單同年求德興俞氏聚遠樓詩三首

單同年、德興俞氏が聚遠樓の詩を求む 三首

雲山烟水苦難親 雲山烟水苦難親

【字解】 單同年 單錫、字

野草幽花各自春。 野草幽花各自に春なり。
 頼有高樓能聚遠。 頼に高樓の能く遠きを聚むるあつて、
 一時收拾與閒人。 一時收拾して閒人に與ふ。

は君配、宜興の人。陰陽・圖緯・星曆の學に明かなり。東坡と同擧の進士。東坡、其の賢を愛し、女兒の子を以て之に妻はす。同年は、同じ年に進士の試験に及第したもの。東坡の

答蘇州水陸通長老書に、單君配、必常相見、路中屢有書云云。【三】 德興俞氏聚遠樓 郭功甫の青山集に、寄題德興俞氏聚遠亭詩がある。【四】 雲山 宋史、樂志に、雲山浩浩歸三何處、但聞空際絲鸞聲。【四】 烟水 煙波といふに同じ。孟浩然の詩に、蒼梧白雲遠、煙水洞庭深。【五】 幽花 杜子美の詩に、幽花欲滿樹、小水細通池。

【題義】東坡が常州・潤州より杭州に歸り、嘗て宜興に至つて、單錫を訪うた時の作である。紀昀いふ、此亦應酬詩、但題目不俗、故說來脫洒耳、實按之、則空空無味と。

【詩意】山に雲がかかり、水に烟が立つのは、遠くからは見えるけれども、近づけば雲もなく、烟もない。山の雲、水の烟は、掬せんとしても、掬することが出来なく、まことに、親しみ難いものである。併し野の草や谷間の花は、何れも春風に吹かれて居る。陽春我を召くに煙景を以てし、大塊我に假すに文章を以てする。幸に高い樓閣があるので、之に登ると、能く遠きを聚めて、一眸に入れることが出来る。そして一時に收拾して閒人に與へる。（收拾とは散つたものを一處にあつめる意である。）

【餘錄】 査注に、茗溪漁隱云、作語不可太熟、亦須令生、東坡作聚遠樓詩、本合用青山綠水、對野草開花、以此太熟、故易以雪山烟水、此深知詩病者、然後知寧拙母巧、寧樸母華、寧粗母弱、寧僻母俗之語爲可信と見ゆ。王文誥いふ、山之有雲、水之有烟、遠則見之、近無有也、

故下云、苦難親也、此七字、已將下作聚遠之意、拘到筆下、若別本作雪山、并失烟字之意、青山綠水更屬夢囈、且何以便見華巧、而雪山烟水即是拙樸耶、查注亦詩家何至欄入此等謬說、今以干涉詩中字、故存而論之云云と。

無限青山散不收。 限なきの青山散じて收まらず、
雲奔浪卷入簾鉤。 雲奔り浪卷いて簾鉤に入る。
直將眼力爲疆界。 直に眼力を將て疆界を爲す、
何啻人間萬戶侯。 何ぞ啻に人間萬戶侯のみならん。

【字解】 【一】簾鉤 すだれかけ。 杜子美の詩に、落日在簾鉤、溪邊春事幽。 【二】眼力 劉禹錫の詩に、減書存眼力、省事養神王。 【三】萬戶侯 史記、李廣傳に、如今子當高帝時、萬戶侯豈足道哉。

【詩意】 高樓は遠きを聚めるも、限なきの青山は、散じて收まらない。(王文誥いふ、青山如此用、便與青山綠水不同。) 雲は奔り、浪も卷いて樓の簾鉤に入る。(さて、前の詩も後の詩も、明點を作して、樓の字を用ひて居るが、此の詩は、暗點を作して、簾鉤の二字を用ひて居る。) 直に眼力の及ぶ所を以て境界としよう。 さすれば、其の廣大なことは、何ぞ啻に人間萬戶侯の封地ばかりではなからうと思ふ。

聞説樓居似地仙。 聞説らく樓居地仙に似たり、
不知門外有塵寰。 知らず門外塵寰あるを。
幽人隱几寂無語。 幽人几に隱り寂として語なく、
心在飛鴻滅沒間。 心は飛鴻滅沒の間に在り。

【字解】 【一】樓居 前漢の郊祀志に、公孫卿言、仙人多好樓居、於是漢武帝命、長安則作飛廉、桂館、甘泉則作益壽、延壽館、使卿持節設具而候、神人乃作通天臺、置祠其下、將招來神仙之屬。 【二】地仙 仙の人世に居るもの。 天隱子に、在天曰天仙、在地曰地仙。 楞嚴經に、彼諸衆生、堅固服餌、而不休息、食道圓成、名地行仙。

【二】塵寰 塵世といふに同じ。 東坡の詩に、仲氏新得道、一漚目塵寰。 【四】幽人隱几 幽人は世を避けてかくれ居る人。 易、履の卦に、履道坦坦、幽人貞吉。 隱几は、几によりもたれる、隱は凭なり。 莊子、齊物論に、南郭子隱几而坐。 【五】飛鴻滅沒間 劉禹錫の賦に、送飛鴻之滅沒。 滅沒は消え失せる意。 東坡の潮州韓文公廟碑に、滅沒倒景不可望。

【詩意】 聞く所によれば、樓居を好める徳興俞氏は、地上の仙人に似て居る。 前漢の公孫卿は、仙人は多く樓居を好むと言つたので、武帝は多くの高い館を作つたり、又通天臺をも設けたりして、神仙の屬を招来しようとした。 神仙の人世に在るもの、樓居を欲するは、昔も今も變らない。 今、この聚遠樓に居ると、門外に塵の世があることをも知らない。 世を避けて居る主人は、平生几に凭りて、何事も語らない。 其の心は常に飛鴻の高く雲の中に消え失せる邊に在る。(王文誥いふ、二句收到聚遠と。)

平山堂次王居卿祠部韻 平山堂王居卿祠部が韻に次す

高會日陪山簡醉 高會日に山簡の醉に陪し、

狂言屢發次公醒 狂言屢次公の醒むるに發す。

酒如人面天然白 酒は人面の如く天然に白く、

山向吾曹分外青 山は吾が曹に向つて分外に青し。

江上飛雲來北固 江上の飛雲北固より來り、

檻前修竹憶南屏 檻前の修竹南屏を憶ふ。

六朝興廢餘邱壠 六朝の興廢邱壠を餘し、

空使奸雄笑寧馨 空しく奸雄をして寧馨を笑はしむ。

【字解】 一 平山堂 宋、仁宗

の慶曆八年（皇紀一七〇八年、西曆

一〇四八年）二月、歐陽修、揚州に守

たり。是堂を蜀岡の大明寺に作る。

江南の諸山、簷下に拱列す、故に平

山堂といふ。沈括、前記を爲り、洪

邁、後記を爲る。二 王居卿 宋

史に、王居卿、字壽朋、登州人、第

進士、歷天章閣待制、居卿俗史、特

以言利、至從官。宋史又いふ、

出知揚州と、即ち東坡の相會して

詩を賦した時である。三 祠部

官名、魏の尙書に祠部ありて、禮制を掌る。歷代、之に因る。北周始めて改めて禮部となす。四 高會 盛會といふに同じ。戰國策

に、高會相與飲。史記、高祖紀に、置酒高會。五 山簡醉 晉書に、山簡鎮襄陽、於時四方寇亂、簡優游卒歲、惟酒是耽、習氏有

佳園池、簡每出遊、多之池上、置酒輒醉、名之曰高陽池。六 狂言 杜牧之の詩に、忽發狂言驚滿坐。宋の阮閱の詩話總

龜に、王居卿在揚州、孫巨源、蘇子瞻適相會、居卿置酒、舉林和靖疎影橫斜二句、以爲詠杏與桃李皆可、東坡曰、可則可、但恐杏桃

李花不致承當、一座一笑、詩中所云狂言、當指此事。七 次公醒 漢の蓋寬饒、字は次公、漢書、蓋寬饒の傳に、無多酌我、我迺

酒狂。八 天然白 傳燈錄に、丹霞見石頭和尚、云、我子天然。九 北固 太平寰宇記に、北固山、在丹徒縣北一里。南史、

梁、蕭正義爲南徐州刺史、武帝幸朱方、今之江蘇丹徒縣、正義修解字、以待與駕、初、京城之西、有別嶺、入江高數十丈、三面臨水、

號曰北固、蔡謨起樓其上、頂有小亭、上幸、登望久之、敕曰、此嶺不足固守、然京口實乃壯觀、改曰北顧。【一〇】 檻前修竹 云云 查注に、石林避暑錄を引き、平山堂左右、老木參天、後有修竹數千竿、大如椽、不見日色。王文誥いふ、此言杭州湖上、查注誤。【一一】 六朝 三國の吳、東晉、宋、齊、梁、陳をいふ。唐、羅鄴の詩に、六朝空認舊江山。【一二】 邱壠 冢をいふ。禮、月令に、塋丘壘之大小高卑。【一三】 奸雄 桓溫をいふ。孔子家語に、言少正卯、曰此乃人之奸雄。晉書、桓溫傳に、溫過淮泗、踐北境、與僚屬登平乘樓、眺矚平原、慨然曰、遂使神州陸沈、百年丘墟、王夷甫諸人、不得任其責。【一四】 寧馨 晉書、王衍傳に、衍、字夷甫、總角嘗造山濤、濤嗟歎良久、既去、目而送之曰、何物老嫗生此寧馨兒、然誤天下蒼生者、未必非此人一也。宋書に、廢帝子業、少稟凶毒、太后疾篤、呼帝、帝曰、病人聞多鬼、那可往、太后怒、語侍者、將刀來破我腹、那得生如此寧馨兒。

【題義】 熙寧七年十月、東坡は孫洙と同じく揚州に至り、又、王居卿と平山堂に燕集した。此詩は、此時の作である。紀昀いふ、狂語却蘊藉と。蘊藉とは、やさしく穩かなるをいふ。此詩の趣は、昔も今も同じである。【詩意】 日に盛宴を開いて山簡（字は季倫）の醉樂に侍つて居る。醉中の趣は、昔も今も同じである。（山簡は晉の人濤の子で、仕へて征南將軍となり、襄陽を鎮したが、毎に習家の池上に遊び、酒を置き、すぐに酔うて歸つたといふことである。平山堂にも、酒中の樂みがある。嘗て王居卿が揚州に居つた時分、孫巨源や蘇東坡がたまたま相會した。居卿は酒を置き、林和靖が疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏の二句を擧げて、これならば、杏を詠じて、桃李でも可であると言つたとき、東坡は可は則ち可なるも、但、杏・桃・李花が敢て當らないことを恐れると對へたので、一座が大に笑つたといふ話がある。）かく狂言を屢次公の醒むる時に發した。（酔うた時は酒狂をなすからである。）酒の色は人の面のやうに天然に白く、山の光は吾等に對して分外に青い。江上の飛雲は、北固山の方から來り、欄干の前

の長い竹に南屏を憶ふ。(杭州の湖上をいふ。)六朝の興廢も茫茫として、ただ邱壘を餘すのみである。
 (金陵六朝の記に、吳孫四主、五十六年、東晉、司馬氏十一主、一百四年、宋、劉氏八主、六十年、齊、蕭氏七主、二十四年、梁、蕭氏四主、五十六年、陳、陳氏五主、三十四年とある。)首を回せば、空しく、奸雄桓温をして寧馨兒王夷甫を笑はしめる。(桓温嘗て高樓に登り、平原を望み、慨然として曰く、遂に神州をして陸沈し、百年丘墟とならしむ。王夷甫諸人、其責に任せざるを得ずと、王夷甫は、まだ總角の時分、嘗て山濤に造る、濤、嗟歎すること良久し、既に去る、目して之を送つて曰く、何物の老嫗ぞ、此の寧馨兒を生める。然れども天下の蒼生を誤るものは、未だ必ずしも此人にあらざるあらずと。此故事を以てかく結んだのである。

【餘録】 査注に、吳曾漫録を引いて、張謂詩、家無三阿堵物、門有三寧馨兒、以三寧字爲三去聲、劉夢得詩、爲問中朝學道者、幾人雄猛得三寧馨、以三寧字爲三平聲。按晉・宋間、以三寧馨兒爲不佳也、雖三寧字、平去二聲、皆可三通用、然張・劉二詩之義、則乖矣、東坡亦作三仄聲とある。紀昀いふ、寧馨、猶言如是、非不佳之謂、唐人五律往往三平落脚、不得援爲三仄聲之據、劉中山詩、却是平聲的據と。唐の劉禹錫、字は夢得は中山の人。

次韻陳海州書懷

陳海州の書懷に次韻す

鬱鬱蒼梧海上山。

鬱鬱たる蒼梧海上の山、

蓬萊方丈有無間。

蓬萊方丈有無の間、

舊聞草木皆仙藥。

舊聞く草木皆仙藥、

欲棄妻孥守市闔。

妻孥を棄てて市闔を守らんと欲す。

雅志未成空自嘆。

雅志未だ成らず空しく自ら嘆す、

故人相對若爲顔。

故人相對す若爲の顔。

酒醒却憶兒童事。

酒醒むれば却つて憶ふ兒童の事、

長恨雙鳧去莫攀。

長へに恨む雙鳧の去つて攀ぶることなし。

【字解】 (一) 陳海州 東坡の自注に、陳曾令三鄉邑。東坡また、浣溪沙詞、贈三陳海州あり、亦云、陳嘗爲三眉令三有聲。元和郡縣志に、海州、春秋、魯之東鄙、秦分三薛郡爲三郟郡、漢改三郟爲三東海郡、武德四年、改三海州。九域志に、淮南東路、海州治三陶山縣、北至三密州四百五十里。

(二) 鬱鬱蒼梧 東坡の自注に、東海鬱州山、云自蒼梧浮來とある。山海經に、都州在三海中、曰都州、郁音鬱。注にいふ、在三胸縣東北海中、昔有二道者十人、遊於蒼梧鬱洲之上、皆得道、其山自蒼梧徙至三東海之上、今猶有三南方草木生焉、故崔琰述征賦曰、郁州者、故蒼梧山也。

【三】蓬萊方丈 東海上の三神山は、蓬萊・方丈・瀛洲。列仙傳に、蓬萊隔三弱水三千里、非三飛仙三不可到。【四】草木皆仙藥 東方朔の十洲記に、東海祖洲上有三不死之草。又、瀛洲在三東海之東、上有三神芝靈草。【五】棄妻孥守市闔 妻孥は妻子に同じ。市闔は市の門。漢書に梅福、字子真、九江壽春人、少學三長安、補三南昌尉、後去官歸、至三元始中、王莽顯政、福一朝棄三妻子、去三九江、至今傳以爲三仙、其後、人有見三福於會稽三者、姓三、爲三吳門卒云。【六】雅志未成 雅志は平生のかんがへ。晉書、謝安傳に、雅志未成、遂遇三疾篤。【七】雙鳧 後漢書に、王喬爲三葉令、有三神術、朔望朝、帝怪三其來數而不見三車騎、密令三太史伺三望之、言其臨三至、輒有三雙鳧、自南來、於是候三鳧至、舉三羅張三之、但得一雙鳧云云。

【題義】 此詩は熙寧七年十月の作である。陳海州の志を言うた詩に次韻したのである。

【詩意】鬱鬱として遙に東海のあなたに見える鬱州山は、傳へいふ、蒼梧から浮いて来たものである。其の昔、十人の道者が、此山に遊び、皆、仙人の道を得たといふことである。又聞く、東海上に、三神山がある、一に蓬萊山、二に方丈、三に瀛洲と。烟は深し三神山、虚無縹渺の間に在る。(三神山には神芝・靈草が生じて居り、不老不死の仙薬がある。漢の世、梅福は少うして長安に學び、南昌尉に補せられたが、後、官を去つて歸つた。王莽が政を顛らにするやうになつて、福は一朝、妻子を棄てて、九江を去つた。仙人となつたといふことである。其の後、この梅福を會稽に見たといふ人があるが、福は姓名を變へて吳門の卒となつて居たといふことである。)妻孥を棄てて市闔を守らんと欲すとは、此の故事に據つたのであらう。さて我は平生の志が未だ成らないから、空しく自ら嘆じて居る。舊知の人と相對しても、如何なる顔色をすることぞ。酒が醒めると、却つて兒童の時の事を憶ひ出して、長へに雙鳧の去つて攀づることなきを恨んで居る。(舊を憶ふも及び難きをいふ。昔、漢の王喬は、明帝の時、尙書郎となり、出でて葉の令となる。漢の法に、畿内の長史は、節朔に朝に還ることになつて居る。喬は毎月の朔旦に、縣から來朝する。帝は其の來ることが屢であつて、いつも車騎を見ないことを怪しみ、太史をして伺はしめた。將に至らうとする時に、雙鳧が南より來る。是に於て鳧の至るを候ひ、羅を擧げて之を張り、二鳥を得た。それは賜はつた所の尙書の履であつたといふ。此の故事に據つて長へに恨む雙鳧の去つて攀づることなきをと言つたのである。)

次韻陳海州乘槎亭

陳海州が乘槎亭に次韻す

人事無涯生有涯。人事涯りなく生涯りあり、
逝將歸釣漢江槎。逝いて將に歸り釣らんとす漢江の槎。
乘桴我欲從安石。桴に乗りて我は安石に從はんと欲す、
遁世誰能識子嗟。世を遁れて誰か能く子嗟を識らん。
日上紅波浮翠巘。日上つて紅波翠巘に浮び、
潮來白浪卷青沙。潮來つて白浪青沙を卷く。
清談美景雙奇絕。清談美景雙ながら奇絶、
不覺歸鞍帶月華。覺えず歸鞍月華を帶ぶるを。

【字解】(一) 乘槎 宋、周密の癸

辛雜識に、乘槎事、博物志、未嘗指爲張騫。梁、宗懷の荆楚歲時記には、武帝使張騫尋河源、乘槎、見所謂織女牽牛者、不知何所據、考今本荆楚歲時記、又缺此條也。(二) 生有涯 莊子、養生主篇に、吾生也有涯、而知也無涯。杜子美の詩に、世路雖多梗、吾生亦有涯。(三) 乘桴我欲從安石 晉、謝安傳に、謝安(字は安石)與孫綽等汎海、風起浪湧、安吟嘯自若、舟人猶去

不止、風轉急、安徐曰、如此將何歸邪、舟人承言即回、裝成服、其雅量。【四】識子嗟 詩、王風に、丘中有麻、彼留子嗟、彼留子嗟、將其來施施。小序にいふ、思賢也、莊王不明、賢人放逐、國人思之而作是詩也。毛傳にいふ、留、大夫氏、子嗟、字也。【五】翠巘 翠色の險しい山。杜子美の詩に、名園當翠巘。宋、邵博の聞見後錄に、層峯翠巘、畢效奇於前。【六】清談 俗を脱した談話、後漢書、鄭太(字は公業)傳に、清談高談、嘘枯吹生。【七】月華 月光に同じ。梁元帝の詩に、共向江頭眺月華。【題義】此詩も、前詩と同じく、熙寧七年十月の作。陳海州が乘槎亭の詩に次韻したのである。乘槎亭は海州に在る。

【詩意】人事は際限なく、人生は盡きる期がある。盡きる身を以て際限のない人事を追ふのは、危くもあり、又、畏るべきでもある。逝いて世を遁れ、將に歸り釣すべきであらうと思ふ。晋の謝安は、孫綽等と海に泛んだとき、風が起り、浪が湧いた。謝安は吟嘯自若であつた。舟人は猶ほ去つて止まな。風がよいよ急に吹いて來たので、安は徐に如此將何歸邪と言つたさうである。我も塵の世を外に、桴にでも乗つて謝安石に従はうかと思ふ。併し、世を遁れて、誰か能く留子嗟を識らうぞ。(留子嗟は、もと留といふ地の奉行を勤めた人である。當時の人がいふのに、あの賢人が田舎に引込んで居るのは惜しい。あの人の政治をなした時は、誠に宜しかつたと。賢人は國を去つても、國人は之を思つて已まないものである。)日は上つて紅い波が青い山に浮んだやうに見える。潮が來つて、白い浪が青い沙を卷いて居る。清談も美景も、兩ながら奇絶で、心も空になつてしまひ、歸鞍の月光を帯びるやうになつたのも覺えなかつた。

【餘錄】唐、趙璘の因話録に、漢書載三張騫窮河源、言其奉使之遠、實無天河之說、惟張華(晋の張華、字は茂先)博物志云、近世有人居海上、每年八月、見乘槎來、不違時、齋一年糧、乘之到天河、見婦人織、丈夫飲牛、遣問嚴君平、云、某年月日客星犯斗牛、即此人也、後世相傳云、得織女支機石、以問君平、都是虛無之說、今成都嚴真觀有二石、呼爲支機石、云、當時君平留之、寶曆唐、敬宗の年號)中予下第還家、於京洛途中、逢官差遞夫昇張騫槎、先在東都禁中、今准詔索有司取進、不知是何物也、前輩詩、往往有張騫槎者、相襲訛謬矣、縱出雜書、亦不足據也とある。

次韻孫職方蒼梧山

孫職方が蒼梧山に次韻す

蒼梧奇事豈虛傳。蒼梧の奇事は豈虚傳ならんや、
 荒怪還須問子年。荒怪還須らく子年に問ふべし。
 遠託鼇頭轉滄海。遠く鼇頭に託して滄海に轉じ、
 來依鵬背負青天。來つて鵬背に依つて青天を負ふ。
 或云靈境歸賢者。或はいふ靈境賢者に歸すと、
 又恐神功亦偶然。又恐る神功も亦偶然と。
 聞道新春恣遊覽。聞道らく新春遊覽を恣にす、
 羨君平地作飛仙。羨む君が平地に飛仙と作るを。

【字解】(一)孫職方。孫奕、字は景山、閩縣の人。呂誨叔薦めて臺となし、監察御史に遷る。新法を論じて、鄧綰に劾せられ、出でて陳州の酒税を監す。陳襄、杭州に知たる時、辟して僉判とす。後、襄、經筵に在り、之を薦む。元祐の初、福建轉運使に除せらる。職方は官職の名、周禮に、職方氏掌天下之圖、以掌天下之地。(二)須問子年。晋書に、王嘉、字子年、著拾遺記、事多詭怪。

山、根無所連著、帝遣巨鼇十五、舉首戴之、山始時而不動。【四】依鵬背云云。莊子、逍遙遊に、鵬之背、負青天而莫之夭闕者、云云。天は短折、闕は止塞、障礙をいふ。【五】靈境。靈地に同じ。梁、簡文帝、神山寺碑に、獨有鷲岳靈境、淨土不燒。【六】神功。莊子に、神人無功。任昉の賤に、神功無紀。【七】飛仙。鹿野の賦に、體若飛仙。楞嚴經十仙中に、飛行仙あり。隋書、赤土國傳に、其王居曾祇城、有門三重、每門圖畫飛仙菩薩之像。

【題義】此詩は孫奕字は景山が蒼梧山の詩に次韻したものである。職方は其の官銜 熙寧四年七月、侍御史知雜事鄧綰言ふ、權御史臺推直官屯田員外郎孫奕、呂公著（字は晦叔）所舉、意趣乖異、乞別選推直言云云と。後、職方を以て外に出づ、故に孫職方といふのである。

【詩意】東海の鬱州山は、蒼梧より浮び來つたといふ奇事も、強ち虛傳ではなからう。荒唐の談、奇怪の説は、宜しく子年に問ふべきである。（王文誥いふ、謂孫吉甫有詩也）と。海中に五山あつて、其の根が連著して居ない。天帝が巨鼈十五をして首を擧げて之を戴かしたので、山が始めて、峙つて動かなかつたと傳へて居る。又、北溟の鯤といふ魚は、化して鵬といふ鳥となる。鵬の背、其の幾千里なるかを知らない。颶風を搏つて上ること九萬里、背に青天を負うて之を障礙するものがないといふことである。（此の聯は鬱州山浮來の事をいふ。）或はいふ、靈地は賢者に歸したと。又、恐る神妙にして測られない功も、亦、偶然であると。聞く所に據れば新春、遊覽を恣にされると。君が平地に飛行仙となつて居られるのが羨しくてならない。

【餘錄】王文誥いふ、此聯（鼈頭、鵬背の聯を指す）道鬱州山浮來事、但前半坐實、蒼梧究竟荒誕、故第三聯、特意折鬆、而本家筆獨快、又將孫吉甫就便了當也、讀此詩、必當照此看法、乃查初白（查慎行、字は悔餘、初白と號す）揚之則云、從來無此流麗、紀曉嵐（紀昀字は曉嵐、一字春帆、晩に石雲と號す）訶之則云、却是滑調、初白偶然喜之、不可爲訓。兩家持論、皆非真知此詩者也。

次韻孫巨源寄漣水李盛一著作并以見寄五絕

孫巨源が漣水の李盛一著作に寄せ、并せて以て寄せらるる五絶に次韻す

南嶽諸劉豈易逢。

南嶽の諸劉豈逢ひ易からんや、

相望無復馬牛風。

相望んで復馬牛の風するなし。

山公雖見無多子。

山公見ゆと雖も多子なし、

社燕何由戀塞鴻。

社燕何に由つて塞鴻を戀はん。

【字解】漣水。元和郡縣志に、宋置東海郡、襄贛縣屬焉、隋廢郡、屬海州、改漣水、因界有漣水故名、淮安府志に、鹽城縣、宋時、立漣水軍於此、水有東漣、中漣、西漣。

【二】盛著作。盛僑は嘉興の人、胡瑗に師事し、官は國子司業に至る。著作は、著作郎、朝廷の著作を掌る官。續通鑑長編に、元豐二年十二月、知考城縣盛僑、割銅二十斤、以收受蘇軾讖諷朝政文字也云云。

【三】南嶽諸劉。諸劉の字を借り用ひて、劉貢父、劉莘老を指し言ふ。後漢書に、王昌、一名郎、邯鄲人、詐稱成帝子子輿、百姓多信之、自立爲天子、分遣將帥、徇天下幽、冀、移檄州郡曰、南嶽諸劉爲朕先驅。【四】馬牛風。書經、費誓に、馬牛其風、臣妾遁逃、勿敢越逐。左傳、僖公四年に、君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也。陸游の詩に、醉自醉倒愁自愁、愁與酒如風馬牛。【五】山公。晉の山濤、字は巨源、東坡は借りて以て孫巨源を指す。【六】無多子。多いことはない、子は助字。傳燈錄に、臨濟曰、元來黃髮佛法無多子。【七】社燕云云。東坡、嘗て詩ありいふ、有如社燕與秋鴻、相逢未穩還相送。燕は春の社日に來りて、秋の社日に去る。

【題義】此詩は熙寧七年十月の作である。孫洙（字は巨源）が漣水の李盛の二著作に贈り、并せて東坡にも寄せられた詩に次韻したのである。東坡の自注に、巨源、近離東海郡、有景疏樓とある。王文誥いふ、施注謂、後登此樓、懷巨源、作永遇樂詞、誤甚、公重過海州、在元豐八年、時巨源已

故、與詞句不_レ合也。

【詩意】東坡の自注に、昔與巨源・劉貢父・劉莘老、相遇於廣陵、自爾契闊、惟、巨源、近者、復相見於京口とある。南嶽の諸劉とは、嘗て廣陵の地で相會うたが、其の後は、面晤の機會も、容易には得られない。ただ相望んで居るのみで、復、馬牛の風することもない。(相會するなきをいふ。風するは、放する、さかりのつく意で、牝牡が相誘ふことをいふ。) 近頃、復、京口で面會した。燕は春の社日に來りて、秋の社日に去る。雁は秋分に寒地より來つて、春分になると歸る。社燕と塞鴻と相逢ふことが未だ穩かでないのに、また相送る。社燕は何に由つて邊塞の雁を慕はうぞ。(本集に、廣陵會三同舍詩あり、即ち二劉と孫とである。)

高才晚歲終難進。

高才晚歲終に進み難く、

勇退當年正急流。

勇退當年正に急流。

不獨二疏爲可慕。

獨り二疏慕ふべきと爲すのみならず、

他時當有景孫樓。

他時當に景孫樓あるべし。

【字解】 高才 後漢書、賈逵傳に、諸生高才者二十人。 勇退 宋の戴復古(字は式之)の詩に日暮倒行非吾事、急流勇退有何難。 急流 宋史に、陳搏謂錢惟演有仙骨、麻衣道者曰、此人、

但能於急流中二勇退耳、惟演果早年恬退。【四】二疏 漢書に、疏廣爲太子太傅、兄子受爲少傅、廣謂受曰、吾聞、知足不辱、知止不殆、功遂身退、天之道也、即日父子移病、上疏乞骸骨、上皆許之、公卿大夫、故人邑子、設祖道供帳東都門外、送者、車數百兩、辭決而去、道路觀者、皆曰、賢哉二大夫、或歎息爲之下泣。【五】景孫樓 東坡自注に、巨源近離東海郡、有二景疏樓とある。名勝志に、景疏樓在海州治東北、石刻云、宋、葉祖洽墓二疏之賢而建、疏廣疏受、皆、東海人也。

【詩意】 高才の人も、晩年には終に進み難いものであるから、たとひ、時に好官を得て居ても、能く急流中に於て勇退すべきである。勇退とは思ひきつて官途を退くことである。昔、漢の疏廣は、仕へて太子太傅に至り、兄の子受は太子少傅に至つた。位に在ること五年、廣は受に謂つて曰く、足るを

知れば辱められず、止るを知られば殆からず、功成り、身退くは、天の道なり。去らざれば、後悔あらんと。上疏して骸骨を乞うた。歸るの日、金を散じて故舊に與へ、父老を招いて歡飲した。或人が子孫の計を爲さんことを勸めると、廣は賢にして財多ければ、其智を損す。愚にして財多ければ、其の過を益すと言つたさうである。孫巨源には、近く東海郡を離れることであらうが、東海郡は疏廣・疏受の郷里で、景疏樓がある。他日また孫巨源君を慕うて景孫樓といふものが出来ることと信ずる。【餘録】 宋の錢易(字は希白)の洞微志に、錢太傅若水云、其初往華陰、謁陳先生、臨出、執手約、後十日、却相訪、至期徑往、迎入山齋地爐中、已先有二僧、擁衲對坐、某揖之、寒暄之禮、亦甚簡傲、僧熟視某而謂陳曰、無此骨法、二公皆、微笑、次日、獨往見陳、陳曰、此即白閣道者也、欲勸留學道、中心不決、遂請道者質疑、他云、見足下非神仙骨法、學道亦不能成、但却得好官、能於急流中二勇退耳と。

漱石先生難可意。漱石先生意ふべきこと難し、

齧齧校尉久無朋。齧齧校尉久しく朋なし。

應知客路愁無奈。應に知るべし客路愁 奈ともするなきを、

故遣吟詩調李陵。故に吟詩を遣はして李陵を調せしむ。

【字解】 漱石先生 東坡の自注にいふ、謂三巨源一と、晉書に、孫楚謂三王濟曰、當欲枕石漱流、誤云、漱石枕流、濟曰、流非可枕、石非可漱、楚曰、所以枕流、欲洗其耳、所以漱石、欲礪其齒。【二】齧齧校尉 東坡の自注にいふ、自謂と。漢書に、蘇武留匈奴、單于欲降之、乃幽武置大窖中、絕不與飲食、武臥齧雪與旃毛、并咽之、數日不死、匈奴以為神。又、蘇武以中郎將使匈奴、還爲典屬國、搜粟都尉。【三】調李陵 東坡の自注にいふ、謂三李君一也。漢書に、蘇武與李陵俱爲侍中、武使匈奴、明年陵降、久之、武歸漢、陵置酒起舞、歌曰、徑萬里兮度沙幕云云、陵泣數行下 因與武訣。武、亦、詩あり云ふ、黃鶴一遠別、千里顧徘徊、胡馬失其羣、思心常依依。又いふ、征夫懷遠路、游子戀故鄉、寒冬十二月、晨起踐凝霜一と。蘇武の李陵に別るる詩四首あり。陵も亦、三首を作る。故に後世、五言は蘇李に首ると稱す。

【詩意】 流に枕する所以は、其の耳を洗はんと欲するのである。石に漱ぐ所以は、其の齒を礪かんと欲するのであると言つた孫楚先生其人を、意ふべきことが難かしい。又、匈奴に使して、留められ、大窖中に幽せられた蘇武は、雪と旃毛とを齧んで、命を繋ぎ、單于に降らなかつた。蘇武には久しく朋友もなかつたのである。應に知るべし、旅路の愁は、之を奈何ともするなきことを。それで故に遣る瀨ない思を吟詩に託して、李陵に弄れたのである。(紀昀いふ、切、姓可厭、此格最俗、況齧齧尤不切情事一と。)

雲雨休排神女車。雲雨排するを休めよ神女の車。

忠州老病畏人誇。忠州老病人の誇るを畏る。

詩豪正值安仁在。詩豪正に値ふ安仁の在るに、

空看河陽滿縣花。空しく看る河陽滿縣の花。

【字解】 雲雨休排 雲雨排するを休めよ神女の車。白居易赴忠州、道過巫山、題詩於廟云、爲報巫山神女道、速排雲雨待清時。【三】忠州 今の忠縣、四川東川道に屬す。唐詩紀事に、白居易於元和十三年、自江州司馬一移刺忠州。【四】詩豪 唐書、劉禹錫の傳に、字、夢得、白居易推爲三詩豪、夢得、嘗、元微之、韋楚老と白傳の第に在つて、各金陵懷古の詩を賦す。劉先づ成る。白、之を覽て曰く、四人、驪龍を探り、子先づ珠を獲たり。其餘の鱗爪は何ぞ用ひんやと言つたさうである。【五】安仁 晉、潘岳、字は安仁、河陽の令となり、桃李の花を種ふ、縣に滿つ、人、號して河陽一縣花といふ。東坡の自注にいふ、盛爲三邑宰一。

【詩意】 妾は巫山の陽、高丘の岨に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となる、朝朝暮暮陽臺の下と言つた神女よ、車を走らして、雲や雨を起すことを休めよ、我は雲雨を排して晴時を待たうとする。か言つた白樂天は、江州の司馬から、移つて忠州に刺史となつたが、老病の餘、人の誇るを畏れて、劉夢得を推して詩豪となした。嘗て樂天の第で、劉夢得は、元微之・韋楚老・白樂天等と詩を賦したが、夢得のが先づ出來上つた。樂天は之を覽て、四人で、驪龍(黒き龍)の領下を探り、子が先づ其の珠を獲た。餘す所の鱗や爪は、何ぞ用ひんやと言つた。詩豪は、正に晉の潘岳(字は安仁)にも比すべき盛僑著作郎の在るに値つた。安仁は河陽の令となつたとき、花を種ゑて縣に滿ちたから、此故事を借りて、盛僑著作郎が邑宰となつて居られ、空しく看る河陽滿縣の花と言つたのである。

膠西未到吾能說。膠西未到到らざるも吾能く説く、
 桑柘禾麻不見春。桑柘禾麻春を見ず。
 不羨京城騎馬客。羨ます京城馬に騎る客、
 羨他淮月弄舟人。羨む他の淮月舟を弄する人。

【字解】
 韓退之の詩に、潮陽未到吾能説。膠西は今の山東、膠縣高密等の地。元和郡縣志に、秦屬琅邪郡、漢文帝分齊立膠西國、都高密。隋、開皇五年、改密州。桑柘、やまぐ

は、禮記、月令に、季夏之月、命野虞、毋伐桑柘。

【詩意】太平寰宇記に、膠山、一名五弩山、膠水之所出也とある。また膠西の地を踏まないが、吾は能く之を説くのである。烟霞はたなびいたが、山桑も麻も稻も、まだ春風を知らない。我は京城の馬に騎る客を羨しくは思はない。却つて彼の月夜秦淮に舟を弄ぶ人が羨しいのである。漢代の金吾（行幸の時に、先導して非常を警める官）千騎來る。翡翠の酒、鸚鵡の杯、たとひ豪遊を極めても、一時の富貴は浮雲の如く、何の益する所を見ない。眼を轉ずれば烟は籠むる漁舟、月は映る淮水、樂地は此中にあるであらう。

王莽

王莽

漢家殊未識經綸。漢家殊に未だ經綸を識らず、
 入手功名事事新。手に入る功名事事新なり。

【字解】
 王莽、漢書、王莽傳に、宗室廣饒侯劉京上言、齊郡臨淄縣昌興亭長夢曰、吾天公使也、天

百尺穿成連夜井。百尺穿ち成す連夜の井、
 千金購得解飛人。千金購ひ得たり解く飛ぶ人。

公使、我告亭長、攝皇帝當爲眞、即不信我、此亭中當有新井、亭長晨起、視亭中、誠有新井、入地且

百尺、【三】經綸、天下を治め營む、周易、屯卦に、君子以經綸。【三】解飛人、解はよくと訓す。不信人間長解華、何曾送君解依依、解放、胡鷹、逐塞鳥、能騎三代馬、獵秋田、等、用例が多い。漢書、王莽傳に、莽博募有奇技術、可三以攻匈奴一者、或言、能飛一日千里、莽輒試之、取大鳥翮、爲三兩翼、頭與身皆著毛、通引環紐、飛數百步墮、莽知不可用、苟欲獲其名、皆拜爲三理事、賜以三車馬、待後。

【題義】此詩は熙寧七年十月の作、王安石が呂惠卿に排せられ、曾布も亦逐はれたので、爲に王莽及び董卓を詠じたのである。初、呂惠卿は安石に知られ、驟に執政の地位に至つたが、遂に安石に叛き、苟くも以て安石を陥るべきもの、爲さざるはない。此二詩は惠卿を正す意を寓して居る。

【詩意】漢の朝廷は、未だ天下を治める術を識らないのであらう。（經綸とは、天下を治めることを絲を理めるに比した言葉である。）なせといふに手始にする功名は、事事新である。（邵長蘅いふ、譏安石之變法と。）臨淄縣の昌興亭長の夢に、天公が亭長に告げていふ、攝皇帝は當に眞皇帝となるべし。論より證據、此の亭中に新井が出来た筈であると。亭長は早く起きて亭中を視た所、深さ百尺もあらうと思はれる新井があつた。（此句は王安石の水利を求めのを刺つたと言はれて居る。）又、王莽は博く奇技術あつて、以て匈奴を攻むべきものを募つた所、能く一日に千里を飛ぶものを得た。莽は早速試みたが、大鳥翮を取つて兩翼となし、飛ぶこと數百歩にして墮ちた。（此句は王安石の邊隙を開いたことを刺つたのである。）

【餘錄】紀昀は此の王莽・董卓の二詩を評して、雖有寓意、詩殊不佳、以東坡之故而曲爲之說、宋人多有以此習氣一と言つて居る。

董卓

董卓

公業平時勸用儒

公業平時は儒を用ゐるを勸む、

諸公何事起相圖

諸公何事ぞ相圖を起す。

只言天下無健者

只言ふ天下健かなるものなしと、

豈信車中有布乎

豈車中に布あるを信せんや。

【字解】

董卓 隴西臨洮の人。少うして、健俠を以て名を知らる。靈帝崩じ、大將軍何進等、宦官を誅せんと欲し、袁紹等と畫策して四方の猛將を召し、太后を脅きんとす。卓未だ至らずして何進敗る。卓、遠

く火の起るを見、急に進み、宮に入つて廢立を行ひ、兵を放つて洛陽を劫掠せしむ。袁紹等、兵を起して卓を討す。卓、宮廟を燒き、都を長安に遷す。司徒王允、呂布と謀り、卓を誅せんとす。卓入朝す、王允等勇士を伏せて之を刺す。卓、呂布を呼ぶ、布、矛を持して之を斬る。卓、塙を鄆に築き、三十年の儲を爲す。自らいふ、事成らば天下に據らん、成らざれば此を守りて以て老いんと。【三】公業 後漢書、董卓傳に、鄭泰字公業、與三周毘、伍瓊、共說卓、以三韓馥、劉岱、孔伋諸人爲三牧守、及三義兵起、卓大怒曰、卓初入朝、二子勸用善士、故相從、而諸官舉兵相圖、此二君實卓、卓何相負、遂斬三毘、瓊、而泰以三詭辭獲免。【三】無健者 一同、袁紹傳に、卓議廢立、紹勃然曰、天下健者、何必董公。【四】車中有布 董卓傳に、王允與呂布、謀誅卓、有入書三呂字於布上、荷而行於市、歌曰、布乎、有告卓者、卓不悟。

【詩意】

董卓は周毘・伍瓊・鄭泰(字は公業)・何顥等を信任し、其の言によつて、韓馥・劉岱・孔伋を刺

史となし、張蒼を太守となした。然るに韓馥等は袁紹の徒と、各義兵を興し、伍瓊・周毘は、陰に内主をなしたので、董卓は大に怒つて、卓、初入朝したとき、二子は善士を用ひるを勸めたから、其の言に相從つたのである。而るに諸君は官に到つて兵を擧げ、此の卓を相圖るとは何事ぞ。此れ二君が卓を賣つたもので、卓は何ぞ相負かうぞと、遂に伍瓊と周毘とを斬つた。鄭公業も伍瓊・何顥等と共に卓に説き、袁紹を以て渤海の太守となしたが、義兵の起るに及び、公業は巧に詭辭を以て對へたので、免れることが出来たのである。此の史實を詩にしたのである。曰く董卓は怒つていふ、鄭公業は平生、善士を用ひることを勸めたはよいが、其の勸めた善士たちが、何事ぞ敢て陰謀を企てるとは。初董卓が廢立を議したとき、袁紹は勃然として曰く、天下健者、何必董公と。健者は何ぞ必ずしも董公のみならんと言つたが、董卓は只言ふ、天下無健者」と。王允が呂布と謀つて董卓を誅しようとしたとき、人あり呂の字を布の上に書き、之を荷うて賣り行き、歌うて曰く布乎と。竊に呂布の陰謀を告げたが、卓は之を悟らなかつた。卓が入朝すると、王允等は勇士を北掖門に伏せて之を刺す。卓は車より墮ちて、呂布を呼ぶと、布はいふ、詔があつて賊臣を討すと、聲に應じ矛を持ちて卓を斬つた。呂布は膂力人に過ぎ、卓も之を信愛して居つた。但し嘗て少しく卓の意を失つたとき、卓は手戟を以て布に擲ち、布は避けて終に免れることが出来たこともある。何れにしても董卓は、信愛して居る人の手に斃れたから、豈車中に布あるを信せんやと言つたのである。

【餘錄】

宋の周必大の二老堂詩話に、陸務觀云、東坡作王莽詩、譏介甫云、入手功名事事新。又詠

董卓云、豈信車中有布乎、蓋譏介甫爭市易事、自相叛也。車中有布、借呂布以指惠卿姓、曾布名、其親切如此と見ゆ。

虎兒

虎兒

舊聞老蚌生明珠。

舊聞く老蚌明珠を生ずと、

未省老兔生於菟。

未だ老兔の於菟を生ずるを省せず。

老兔自謂月中物。

老兔自ら謂ふ月中の物と、

不騎快馬騎蟾蜍。

快馬に騎らず蟾蜍に騎る。

蟾蜍爬沙不肯行。

蟾蜍は爬沙して肯て行かず、

坐令青衫垂白鬚。

坐に青衫をして白鬚を垂れしむ。

於菟駿猛不類渠。

於菟は駿猛渠に類せず、

指揮黃熊駕黑羆。

黃熊を指揮して黑羆を駕す。

丹砂紫麝不用塗。

丹砂紫麝塗るを用ひず、

眼光百步走妖狐。

眼光百歩妖狐を走らす。

【字解】【一】虎兒 子由の幼子、

遠の小字、本集の將至、筠寄三猶子一詩に、夜來夢見小於菟の句がある。自注にいふ、遠、小字虎兒と。

於菟、虎の異名、楚國の方言。【三】

老蚌生明珠 三國魏志、荀彧傳の注に、三輔決錄を引いて、韋康、字

元將、弟誕、字仲將、孔融與康父端書曰、前日元將來、淵才亮茂、雅度

宏毅、偉世之器也、昨日仲將又來、懿性貞實、文敏篤誠、保家之主也、

不意雙珠近出老蚌。【三】於菟 左傳、宣公四年に、楚人謂乳穀、

謂之虎於菟云云。於菟は虎の異名、楚國の方言。隋書にも、於菟神龜

妖狐莫誇智有餘。

妖狐誇ること莫れ智餘ありと、

不勞搖牙咀爾徒。

牙を搖かして爾が徒を咀むを勞せず。

嚴列三西北。【四】老兔自謂月中物

月中に兔と蟾蜍とある。蟾蜍はひきがへる。五經通義に、月中有三兔與二

蟾蜍何、月陰也、蟾蜍、陽也、而與菟並明、陰擊於陽也。【五】蟾蜍 蛙類の大なるもの。月中に蟾蜍が居るといふ古傳説より月の異名となる。淮南子、精神篇に、日中有三兔烏、而月中有三蟾蜍。王充論衡に、羿妻姮娥託身於月、是爲蟾蜍。春秋演孔圖に、蟾蜍、月精。【六】爬沙不肯行 韓退之が效三玉川子作詩に、爬沙脚手鈍、誰使女解綠青冥。爬沙は匍行する貌。【七】青衫 青い色の衣。白樂天の琵琶行に、就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。【八】指揮黃熊云云 春秋繁露に、拱揖指揮。列子黃帝篇に、黃帝與炎帝帥熊羆狼豹、獵虎爲三前驅。【九】丹砂紫麝 王注に、世之小兒、必塗丹砂紫麝、以辟不祥。【一〇】搖牙咀 爾徒云云 魏志の注に、吳質朝三京師、詔上將軍及特進以下、皆會質所、時、曹真肥、朱鑠瘦、質召優使說肥瘦、真畫拔刀瞋目言、俳敢輕脫、吾斬爾、遂罵坐、質按劍曰、曹子丹、汝非屠机上肉、吳質吞爾不搖喉、咀爾不搖牙、何敢恃勢驕耶。

【題義】此詩も熙寧七年十月の作。姮の爲に作つたのである。東坡の弟、子由が幼子、第三子、遠は熙寧七年、即ち甲寅に生れたから、因つて虎兒と名く。後に遜と改名した。欒城集に、題して和子瞻喜虎兒生といへるは、即ち此詩に和韻したのである。王文誥いふ、於菟之外、不使一虎事、以虎兒二字并作一故也、可謂奇矯と。

【詩意】後漢の韋康、字は元將、弟の誕、字は仲將、孔融は康の父に書を與へて、意はざりき雙珠、近く老蚌に出でんとは云つたさうである。老蚌の明珠を生じたことは聞いたが、老兔の於菟を生ずることを思はなかつた。楚國の方言に、乳のことを穀といひ、虎のことを於菟といふ。月の世界には、兔と蟾蜍と住んで居る。それで老兔は自らいふ、月中の物と、快馬にも騎らないで、蟾蜍に騎つて

居る。元來蟾蜍は匍行して疾く飛ぶことが出来ないのに、誰が之に教へて青空の上、月の世界に入らしめたか。坐に青い衣をして白い鬚を垂れしめる。之に反し、於菟は駿猛で、當り難い。黄熊を指揮して、黑狐をも駕御する。狐は虎の屬である。世間の小供たちは、不祥除けに丹砂や紫麝を塗るが、於菟さへ居れば、其の必要もない。又、於菟の眼光は、百歩を射て、妖狐を走らせる。妖狐よ、智慧が餘あるなどと誇つてはならない。於菟から見ると、汝等如きは、之を咀むに、牙を搖かすこともいらない。之を呑むも、喉を搖かさないでも可からう。

除夜病中贈段屯田

除夜病中贈段屯田に贈る

龍鍾三十九。勞生已強半。

龍鍾三十九、生を勞す已に強半。

歲暮日斜時。還爲昔人歎。

歲暮日斜なる時、還昔人の歎をなす。

今年一線在。那復堪把玩。

今年一線あり、那ぞ復把玩に堪へん。

欲起強持酒。故交雲雨散。

起つて強ひて酒を持せんと欲するも、故交は雲雨散す。

惟有病相尋。空齋爲老伴。

惟病の相尋ぐあり、空齋に老伴を爲す。

蕭條燈火冷。寒夜何時旦。

蕭條として燈火冷かなり、寒夜何れの時か旦なる。

倦僕觸屏風。飢鼯嗅空案。

倦僕屏風に觸れ、飢鼯空案を嗅ぐ。

數朝閉閣臥。霜髮秋蓬亂。

數朝閣を閉ちて臥し、霜髮秋蓬亂る。

傳聞使者來。策杖就梳盥。

使者の來るを傳聞し、杖を策いて梳盥に就く。

書來苦安慰。不怪造請緩。

書來つて苦だ安慰し、怪まず造請の緩なるを。

大夫忠烈後。高義金石貫。

大夫は忠烈の後、高義金石貫く。

要當擊權豪。未肯覷衰懦。

要は當に權豪を撃つべし、未だ肯て衰懦を覷はず。

此生何所似。暗盡灰中炭。

此の生は何の似たる所ぞ、暗盡灰中の炭。

歸田計已決。此邦聊假館。

歸田計已に決す、此邦聊か館を假らん。

三徑麤成資。一枝有餘暖。

三徑麤、資を成し、一枝餘暖あり。

願君更信宿。庶奉一笑粲。

願はくは君更に信宿せよ、庶はくは一笑粲を奉せん。

【字解】【一】段屯田 名は釋、字は釋之、時に提刑たり。周禮、冬官に、有屯部、今日屯田司。續通鑑長編に、熙寧四年二月、

詔權發三遺孽州路提點刑獄屯田員外郎段釋、從三京西路、釋以親老、辭夔州之命、故使代李周。【二】龍鍾 龍鍾二字の音を合せば、

癡となる。老いて疲れ病む貌。李華の臥病舟中贈別序に、潦倒龍鍾、百疾叢體。唐の蘇鶚の蘇氏演義に、龍鍾、不昌熾、不翹舉、

之貌と。【三】強半 過半といふに同じ、東坡の詩に、贏得兒童語音好、一年強半在城中。【四】昔人歎 東坡の自注に、樂天詩

云、行年三十九、歲暮日斜時。【五】一線在 杜子美の詩に、何人錯憶窮愁日、愁日愁隨一線長。歲時記に、宮中以細線量日

影、至日日影添一線。至日は冬至の日をいふ。【六】堪把玩 柳子厚、與李建書に、悠悠人世、越不過爲三十年客二耳、前

過三十七年、與瞬息無異、後所不得者、其不足把玩、亦已審矣。【七】故交雲雨散 劉禹錫の詩に、故人雲雨散。【八】爲老

伴一白樂天の詩に、病與樂天相伴住。【九】蕭條蕭索といふに同じ、もの寂しい。班固、西都賦に、原野蕭條。【一〇】何時且寧戚は牛角を叩いて歌つて曰く、長夜漫漫何時旦。【一一】觸屏風。漢書、陳萬年病、召其子咸、教戒於牀下、語至三夜半、咸睡頭觸屏風。【一二】秋蓬亂。詩の衛風に、首如飛蓬。【一三】就梳盥。髮をくしげづり、手を洗ふ。梳は櫛、齒の疏なるを梳といひ、密なるを篋といふ。盥は手を洗ふこと。【一四】安慰。古詩、焦仲卿妻の詩に、時時爲安慰、久久莫相忘。杜子美の寄沈東美詩に、未暇申安慰。【一五】造請。往候に同じ。漢書、張湯傳に、其造請諸公、不避寒暑。【一六】大夫忠烈後。舊唐書に、段秀實贈太尉、諡忠烈、朱泚盜據宮闕、召秀實議事、秀實戎服與泚並膝、語至僭位、秀實勃然而起、執源休腕、奮其象笏奮躍而前、唾泚面、大罵曰、狂賊吾恨不斫汝萬段、豈逐汝反耶、遂擊之、泚舉臂自捍、纒中其頸、血流匍匐而走。源休は朱泚に僭號を勸めて、宰相たり。【一七】高義金石貫。史記、信陵君傳に、以公子之高義、爲能急人之困。後漢書、王常傳に、帝指常曰、心如金石、眞忠臣也。【一八】戲衰懦。廣韻に、戲、伺視也。杜子美の詩に、夫何激衰懦。【一九】歸田。郷に歸つて、農を營む。沈炯の詩に、閉門窮養裏、靜掃吟歸田。【二〇】假館。孟子、告子篇に、交(曹交)得見於鄒君、可假館、願留而受業於門。曾惠洪が宿龍興寺詩に、我從山中來、携被夜假館。【二一】三徑。陶潛の傳に、聊欲三徑歌爲三徑之資、可乎。漢杜陵の蔣詡、元卿は、兗州の太守たり。王莽、攝に居り、病を以て官を免じて、郷里に居り、臥して戸を出でず。舍中竹下に、三徑を開く、惟、羊仲、求仲、之に従ふ。二仲は皆挫廉逃名之士。【二二】一枝。莊子、逍遙遊に、鷦鷯巢於深林、不過三枝。【二三】信宿。左傳、莊公二年に、凡師一宿爲舍、再宿爲信。【二四】笑榮。白齒を出して笑ふ。宋、孫覲の詩に、欣然一笑榮、破此百夢結。

【題義】唐宋詩醇に、此詩を評して、除夜無聊、病中落寞、因得段書(段屯田)の手紙、遂一氣寫出、讀三暗盡灰中炭五字、尤覺黯然神淒、といふ。紀昀いふ。語皆精鍊と、王文誥曰く、此詩有三龍鍾三十九、此邦聊假館句、故查註指以爲三密州度歲確證也、今考下論三盜賊一狀、有蝗旱相仍、盜賊漸熾、自秋至冬、麥不入土、明年春夏患甚於今等語、此十一月上三蝗莪一狀之證と。

【詩意】除夜となつて、萬感胸に迫る。疲れ病みて意氣も揚らない此身は、今正に三十又九、生命を勞すること、既に半を過ぎたのである。歳が暮れて、日も斜なる時、我も亦、白樂天の所謂行年三十九、歳暮日斜時の感がある。宮中では、細線を以て、日影を量り、冬至には、日の影が特に一線を添へるといふことである。除夜が明ければ明年となる。明けなければ、まだ今年で、日の影も一線ある譯だ。ただ一線の日影、瞬息と異らないから、また把玩するに堪へなからう。起つて無理に酒に親しまうとするも、舊知の友は、既に雲となり、雨となつて四散して居る。惟、病氣だけが、相尋いで、空齋に古い友達となつて離れない。白樂天の詩に、病與樂天相伴住といふ詩も、實にもと思ひ浮ばれる。さて四邊を見れば、物寂しくて、燈火も冷かである。寒い夜長の物思ひ、寢ても寐られない。何時、夜が明けるやら、さても長き夜の長長しいことである。倦み疲れて、下僕は皆睡つてしまひ、頭も屏風に觸れて居る。飢ゑた驢は、食を求めてか、しきりに空案を嗅いで居る。我は幾朝も閣を閉ちて臥したので、白い髪も、秋蓬の風に亂れて飛べるがやうである。此時、使者の來れることを傳へ聞いて、まことに嬉しく杖を策いて手を洗ひ髪を梳る。手紙が著いて、先づ一安心、別に伺候の怠りをも咎められなかつた。昔、段秀實の壯烈は、今尚ほ人をして凜然たらしめる。段釋之は其の子孫で、高義は金石を貫く。結局、朱泚のやうな權豪を撃つべきであらう。未だ少しも衰懦の點を視ない。顧みれば我が生涯は何に似たるぞ、灰中の炭とでも言はうか。我が郷里に歸つて農業を營む者は已に決したのである。此邦に暫く旅館を借りて滞在の所としよう。昔、蔣詡は病を以て官を免じ、郷里

に歸り、臥して戶外に出でない。舍中の竹下に三徑を開いて、羊仲・求仲と遊んだといふことであるが、我も、略資を成して、餘暖をなす一枝がある。どうか君、更に滞留されよ。面白く笑話を試みたいものである。

喬太博見和復次韻答之

喬太博和せられ、復次韻して之に答ふ

百年三萬日。老病常居半。百年三萬日。老病常に半に居る。
其間互憂樂。歌笑雜悲歎。其間互に憂樂、歌笑悲歎を雜ふ。
顛倒不自知。直爲神所玩。顛倒自ら知らず、直に神の玩ぶ所となる。
須臾便堪笑。萬事風雨散。須臾に便ち笑ふに堪へたり、萬事風雨散す。
自從識此理。久謝少年伴。此の理を識りしより、久しく謝す少年の伴。
逝將遊無何。豈暇讀城旦。逝いて將に無何に遊ばんとす、豈城旦を讀むに暇あらんや。
非才更多病。二事可并案。非才更に多病、二事并せ案すべし。
愧煩賢使者。弭節整紛亂。賢使者を煩はすを愧づ、節を弭めて紛亂を整ふ。
喬侯瑚璉質。清廟嘗薦盥。喬侯は瑚璉の質、清廟に嘗て薦盥す。

奮髯百吏走。坐變齊俗緩。髯を奮うて百吏走り、坐に變ず齊俗の緩。
未遭甘鷄退。竝進恥魚貫。未だ遭はず甘鷄の退くに、竝び進んで魚貫を恥づ。
每聞議論餘。凜凜激貪懦。議論の餘を聞く毎に、凜凜として貪懦を激す。
莫邪當自躍。豈復煩爐炭。莫邪は當に自ら躍るべし、豈復爐炭を煩はさんや。
便應朝秣越。未暮刷燕館。便ち應に朝に越に秣かふべく、未だ暮ざるに燕の館を刷ふ。
胡爲守故邱。眷戀桑榆暖。胡爲れぞ故邱を守る、眷戀す桑榆の暖かなるを。
爲君叩牛角。一詠南山粲。君が爲に牛角を叩いて、一たび詠す南山粲を。

【字解】一 喬太博。名は鉞、字は禹功。太博は其の官。宋史、職官分紀に、太常寺博士、國子監太學博士。劉貢父の彭城集に、

喬左藏自太常博士除知施州詩あり。【二】百年三萬日。李太白の詩に、百年三萬六千日。列子、楊朱篇に、楊朱曰、百年、壽之大齊、得百年者、千無一焉、設有二者、孩抱以達昏老、幾居其半矣、夜眠所弭、晝覺之所遺、又、幾居其半矣、疾痛哀苦亡失憂懼、又幾去其半矣。抱朴子の勤求篇に、百年之壽、三萬餘日耳、計定得三百年者、喜笑平和不過三五六十年六七千日耳。【三】顛倒。詩、齊風に、東方未明、顛倒衣裳。疏にいふ、以裳爲衣、令上者在下、是爲顛倒也。【四】須臾。中庸に、道也者、不可須臾離也。又、佛氏の説に、一日一夜有三十須臾。【五】將遊無何。莊子逍遙遊篇に、遊於無何有之鄉。【六】讀城旦。漢書に、竇太后好老子書、召問轅固、固曰、此家人言耳、太后怒曰、安得司空城旦書乎、乃使固入圜擊箠。【七】可并案。後漢書、孔融傳に、曹操討烏桓、融嘲之曰、大將軍遠征、蕭條海外、昔、肅慎氏不貢楛矢、丁零盜蘇武牛羊、可并案也。【八】弭節。枚乘の七發に、弭節乎江潭。節を弭むは、徐行する意、江潭は江畔。【九】整紛亂。魯仲連の傳に、解紛亂。【一〇】瑚璉。論語、公冶長に、子貢曰、何器也、曰、瑚璉也とある。皆、宗廟に黍稷を盛る器にして、飾るに玉を以てし、器

の尤も貴重のもの。【二】清廟 周の文王のたまや。詩、頌の小序に、清廟祀文王也、左傳、桓公二年に、清廟茅屋。【三】薦
 鹽 周易、觀卦に、觀、鹽而不薦、有孚顛若。鹽は手を洗ふこと、將に祭らんとして手を潔め、未だ酒食を薦めない際、神の格る
 ら見る。孚ありて顛若。顛若は嚴正の貌。【三】奮髯云云 漢書、朱博傳に、遷琅邪太守、齊部舒緩養名、博新視事、右曹掾
 史、皆移病臥、博奮髯抵几曰、觀齊兒、欲以此爲俗耶、皆斥罷、諸病吏、白巾走出府門、又勅、功曹官屬、多褻衣大詔、
 不中節度、自今掾史衣、皆令去地三寸、視事數年、大改其俗、如楚趙。【四】甘鷓退 左傳、昭公十六年に、六鷓退飛過
 宋都、風也。鷓は水鳥。退飛は、高く飛びし故に、迅き風にあひて退くをいふ。【五】魚貫 魚を串に貫きたる如く、引き連りて
 進む。易、剝の卦に、貫魚以宮人寵、無不利。注にいふ、竝衆而進、則恥如魚之貫一也。三國魏志に、鄧艾下蜀、自陰平道
 魚貫而進。【六】莫邪當自躍 莊子大宗師篇に、大冶鑄金、金踴躍曰、我必且爲莫邪、大冶必以爲不祥之金。【七】爐炭 史
 記、荊軻傳に、夫以鴻毛燎于爐炭之上、必無事矣。【八】秣越、刷燕館 李太白の天馬歌に、雞鳴刷燕哺秣越。【九】眷
 戀 曹子建、懷親賦に、情眷戀而顧懷。【一〇】桑榆 日の暮、後漢書、馮異傳に、失之東隅、收之桑榆。唐明皇の詩に、任逐桑榆
 暖。【一一】叩牛角 王注に、齊威欲于齊桓公、適齊飯牛、車下望見桓公、乃擊牛角而商歌、桓公聞之、命後車載之。齊威
 は衛の人。【一二】南山祭 三齊記に、齊威の歌を載せて曰く、南山祭白石爛、生不逢堯與舜禪、短布單衣裁至軒、從昏飯牛
 薄三夜半、長夜漫漫何時旦。祭一に研に作る。

【題義】 此詩は熙寧八年正月（東坡四十歳の時）の作である。喬敘が東坡の前詩、除夜病中贈三段屯
 田二詩に和せられたのを、復、次韻して答へたのである。紀昀いふ、諧語却奇確と。

【詩意】 百年は人壽の大限であつて、百年生きるものは、千人に一人もない位である。又、たとひあ
 つたとした所で、幼い時と、老い衰へた時とが、其の半に居り、身體が强健で、面白う可笑しう暮す
 時は極めて少い。夜、眠に費す時間、晝、茫然として居る時間、また其の半に居る。其餘の時間でも

疾痛・哀苦や、更に憂懼することなどが、幾んど其半に居る。かかる短い人生に在つて、互に憂樂し
 歌ひつ笑ひつ、悲歎を雜へて居る。人事は往往顛倒する、運命に玩ばれて、自ら氣付かないのであ
 る。須臾にして萬事は風雨の如く散じ、雲霧の如く消えて、跡、茫然たるは、まことに、笑ふに堪へ
 たりとも謂ふべきである。さて、我は此の人生觀をなしてから、久しく少年と交遊しなかつた。逝い
 て莊周が所謂無何有の郷・廣漠の野（皆、害なき地を指す）に遊ぼうとする。それで、寶太后の所謂司
 空城旦の書を讀む暇はない。城旦は刑徒で、毎旦に起き、行いて城を治める役に服するものをいふ。
 我は非才であり、又、多病である。非才・多病の二事は并せて案問（罪をしらべ問ふ）すべきである。
 賢使者に面倒をかけるが、節旄をここに弭めて、この紛亂を整へて戴きたい。喬太博は器に譬へてい
 ふと、宗廟の祭器であつて、廟堂の上に立つて天下の政を行ふに足る人材である。嘗て清淨の廟で
 神を祭るとき、神在すが如くにした。かくて手を洗ひ潔め、酒食を薦めて、精誠を盡くし、嚴肅を極
 めた。其の時は、髯を奮うて、緊張したので、百吏も命に走つた。坐に齊の緩なる風俗をも變じたの
 である。鷓といふ鳥は強いけれども、高く飛ぶと、迅風にあひて退くといふ。我はまた甘鷓の退くや
 うな風には遭はない。衆と並び進んで、魚の貫く如くであることを恥ぢる。議論の餘を聞く毎に、凜
 凜として勢がかりりしく、貪懦のものを激する。莫邪は古の名劍である。大冶工があつて、金を鑄
 ると、金は小踊りして喜び、我は必ず鏃鏑とならんと言つた話がある。また爐の炭を煩はさない。應
 に朝に越に秣ふべく、そしてまだ暮れないうちに、燕の館を刷はうとする。胡爲れぞ故邱を守らう。

桑榆の暖かなるを眷戀して已まない。寧戚に倣うて、君の爲に牛角を叩いて、一たび南山祭、白石爛の詩でも詠じて見たいものである。

【餘録】紀昀いふ、二句譬劍、又忽二句譬馬、而馬字不出明、又竟承莫邪說下、殊不了了、此爲韻所牽耳と。

二公再和亦再答之

二公再び和し、亦再び之に答ふ

寒雞知將晨。飢鶴知夜半。亦如老病客。遇節嘗感歎。

寒雞は將に晨ならんとするを知り、飢鶴夜の半なるを知る。亦老病の客の、節に遇うて嘗て感歎するが如し。

光陰等敲石。過眼不容玩。

光陰は石を敲くに等し、眼を過ぐれば玩ぶべからず。

親友如搏沙。放手還復散。

親友は沙を搏むが如し、手を放てば還復散す。

羈孤每自笑。寂寞誰肯伴。

羈孤毎に自ら笑ふ、寂寞誰か肯て伴はん。

元達號神君。高論森月旦。

元達は神君と號せられ、高論月旦に森たり。

紀明本賢將。汨沒事堆案。

紀明は本賢將、汨沒して堆案を事とす。

欣然肯相顧。夜閣燈火亂。

欣然として肯て相顧み、夜閣燈火亂る。

盤空愧不飽。酒薄僅堪盥。

盤空しく飽かざるを愧ぢ、酒薄く僅に盥するに堪へたり。

雍容許著帽。不怪安石緩。

雍容として帽を著ることを許し、安石の緩なることを

雖無窈窕人。清唱弄珠貫。

窈窕の人の、清唱珠貫を弄するなしと雖も、怪まず。

幸有縱橫舌。說劍起慵懦。

幸に縱橫の舌あつて、劍を説いて慵懦を起す。

二豪沈下位。暗火埋濕炭。

二豪は下位に沈み、暗火は濕炭に埋まる。

豈似草玄人。默默老儒館。

豈玄を草する人の、默默として儒館に老ゆるに似かんや。

行看富貴逼。炙手借餘暖。

行く富貴の逼るを看ば、手を炙つて餘暖を借れ。

應念苦思歸。登樓賦王粲。

應に念ふべし苦に歸るを思つて、樓に登つて王粲を賦す。

【字解】(一) 寒雞。宋、鮑照の詩に、感寒雞之早晨、憐雙雁之遠漠。(二) 飢鶴。東坡の梅花詩に、明日酒醒應滿地、空令飢鶴啄莓苔。(三) 知夜半。春秋繁露に、鶴知夜半。注にいふ、鶴、水鳥也、夜半水生、感其生氣則鳴と。(四) 羈孤。杜子美の詩に、骨肉滿眼身羈孤。(五) 寂寞。淮南子に、寂寞者、音之主也。(六) 元達。晉の循吏喬智明、字元達、晉書、良吏傳に、喬智明、爲隆慮、共二縣令、二縣愛之、號爲神君。隆慮縣は、今の河南林縣。(七) 森月旦。後漢の許劭傳に、劭、字子將、與從兄靖、俱有高名、好共覈論鄉黨人物、每月輒更其品題、故汝南俗有月旦評。(八) 紀明。東坡の自注に、段釋之、本將家。後漢書、段熲傳に、熲、字紀明、爲護羌校尉、大破西羌、先零、東羌、悉平、在邊十餘年、未嘗一日寤、與將士同苦、故皆樂爲死戰。初、熲與皇甫威明、張然明、並知名顯達、京師稱爲涼州三明星云。(九) 汨沒。沈みかゝれる貌。杜子美の詩に、聲名從此大、汨沒一朝伸。(一〇) 堆案。嵇康の書に、堆案滿几。(一一) 雍容。やはらぎたる姿。漢書、司馬相如傳に、從三車

騎、雍容嫺雅。【二】許著帽。晉書に、桓溫請謝安爲司馬、後詣安、值其理髮、安性遲緩、久而方罷、使取幘、溫見留之曰、令司馬著帽進、其見重如此。【三】窈窕。容儀のしとやかな貌。詩、周南に、窈窕淑女、君子好逑。【四】清唱。陸機の詩に、名謳激清唱、榜人縱棹歌。【五】弄珠貫。珠貫は聲音の美妙なる形容。禮、樂記に、曩曩乎、端如貫珠。【六】說劍。莊子に說劍篇あり。【七】老儒館。韓退之の詩に、館儒養經史。【八】富貴逼。隋書に、周武帝謂楊素曰、善自勉勿憂不富貴、素曰、臣恐富貴來逼人、臣無心圖富貴。【九】炙手可熱勢絕倫。唐史遺事に、安樂公主、玄宗之季妹、附會韋氏、灼人、人之爲に語りて曰く、卓李鄭薛、炙手可熱と。杜詩に、炙手可熱勢絕倫。唐史遺事に、安樂公主、玄宗之季妹、附會韋氏、炙手可熱、人咸畏之。【一〇】登樓賦。王粲。三國の王粲、西京の擾亂を以て、乃ち地を荊州に避けて、劉表に依り、因て江陵城樓に登り、歸るを懷うて登樓賦を作る。

【題義】此詩も前詩と同じく熙寧八年正月の作。段釋之と喬禹功との二公が再び除夜の詩に和韻したのを、東坡も亦、再び之に答へたのである。紀昀いふ、此首無和韻之跡、連作三比而頭緒秩然、非三前首夾雜之比と。

【詩意】寒雞は夜の明けんとするを知り、長鳴して曉を報ずる。又、飢鶴はよく夜半を知る。夜半に水が生じて、其の生氣に感ずれば則ち鳴く。これは恰も老病客が節に遇うて、感歎するやうなものである。白樂天の詩に、蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身とあるが、光陰の速かなるは、恰も石を敲くが如く、ちらりと眼を過ぎて、はや既に玩ぶことが出来ない。一體、親友は沙を搏むやうなもので、暫し相會ふも、手を放せば、また復、散じて、忽ち相別れる。我はひとり旅で、毎に自ら笑つて居り、寂寞として伴ふものもない。晉の喬元達は、隆慮・共二縣の令となる。二縣の人、之を

愛して神君と號した。其の高論は森として居るので、郷黨に於ける喬氏の人物評も高い。又、後漢の段紀明は、本、賢將であつたが、沈み隠れて、堆案事務の裡に没頭して居る。今の段釋之・喬禹功の二人も欣然として故人を忘れないで、肯て相顧み、夜間に會して、燈火も亂れて居る。ただ盤中の餐は空しうして、食物の十分でないことを愧ぢる。樽中の酒も薄くして、僅に盃(沃盥)するに堪へる。昔、桓溫は謝安を請うて司馬となした。安の人と爲りを重んじて、其の性の遲緩なるを怪まなかつた。又、其の帽を著けて進むことをも咎めなかつた。容儀のしとやかな美人が清らかに謳ふ其の聲音は耳にしないが、幸に縦横懸河の辯は、鋭く舌端を振ひ、盛に擊劍を説いて、慵慵を起たしめる。段釋之・喬禹功の二豪傑も、下位に沈淪し、暗い火の濕炭に埋もれて居るやうである。昔、揚雄(字は子雲)は嘗て以爲らく、經は易より大なるはなしと、故に大玄を作つた。二公は此の揚雄の默默として儒館に老ゆる態度には及ばない。又、周の武帝は揚素に、善く自ら勉めよ、富貴ならざるを憂ふる勿れといつたとき、素は富貴の來つて人に逼るを恐れる。富貴を圖るに心がないと對へたさうであるが、富貴の逼るを看ば、手を炙つて餘暖を借るべきである。そして苦に歸るを思ふとき、樓に登つて賦を作つてはどうであらう。昔、王粲は亂を避け、江陵城樓に登つて歸るを懷ひ、登樓賦を作つた。(此詩は此の故事に據つたのである。)

雪後書北臺壁二首

雪後北臺の壁に書す 二首

古今體詩 雪後書北臺壁二首

黃昏猶作雨纖纖。黃昏猶ほ雨の纖纖たるを作し、
 夜靜無風勢轉嚴。夜靜にして風なきも勢轉た嚴なり。
 但覺衾裯如潑水。但覺ゆ衾裯の水を潑するが如きを、
 不知庭院已堆鹽。庭院の已に鹽を堆するを知らず。
 五更曉色來書幌。五更の曉色書幌に來り、
 半夜寒聲落畫簷。半夜の寒聲畫簷に落つ。
 試掃北臺看馬耳。試みに北臺を掃うて馬耳を看れば、
 未隨埋沒沒有雙尖。未だ埋沒に隨はずして雙尖あり。

【字解】【一】黃昏 夕暮といふに同じ。淮南子、天文に、日至于虞淵、是日黃昏。【二】纖纖 細く尖りて銳き貌。古詩に、兩頭纖纖月初生。【三】衾裯 衾被・衾幘に同じ、大被と寢衣をいふ。杜子美の詩に、城中對米換衾裯。【四】潑 水 潑はそそぐ。畫斷に、以墨潑レ水。【五】庭院 庭は堂階の前、門内の地、院は周垣。【六】五更 五夜に同じ、今の午前四時。一夜を甲乙・丙・丁・戊に分ち、其の戊夜をいふ。漢官舊儀に、五夜者、甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜、衛士甲乙相傳盡五更。更とは、夜番の者が交代する義。【七】書幌 書帷に同じ。唐、段公路の北戸錄に、梁簡文帝徐摛書に、特設書幌、乍置筆牀。【八】北臺 超然臺をいふ。東坡の超然臺記にいふ、園之北、因城以爲臺者舊矣。又いふ、南望馬耳常山。【九】馬耳 馬耳山は臺と相對す。水經注に、馬耳山高百丈、上有石、竝舉望齊馬耳、故世取名焉。

【題義】此詩は熙寧七年十二月の作。東坡は十一月に、密州の任地に到り、蝗莪蠲稅の狀を上り、十二月には、盜賊の狀を上る。此詩は十二月上狀の後に、雪後、北臺の壁に書したものである。紀昀いふ、二詩徒以窄韻得名、寔非佳作。又いふ、作半夜、則不似雪、作半月、指晴後

之簷溜、又與末二句不貫。王文誥いふ、讀者往往不喜堆鹽一聯、紀曉嵐尤詆譏之、殊不知、四句必要三暗落雪字、非合前後聯觀之、不知其自戰之妙也。【詩意】日が既に暮れ、細雨又下る。夜に入つて、風は無いが、寒威はいよいよ嚴しい。夜著も寢巻も、水を沃いたやうである。(王文誥いふ、首句是雨、二三四句是雪、皆從不見不知中落想、我在臥中、惟覺嚴寒、猶未悟爲雪也云云。)臥中に在る我は、庭も籬も雪となり、鹽を堆くしたやうになつて居るのに氣が付かない。夜も漸く明け離れて、五更の曉色は、書帷に來る。(書窓が明るくなつた。)はて半夜、あの寒聲の書簷に落ちたのは、雪であつたか。(王文誥いふ、第三聯、亦疑而未定之詞と。又いふ、五更乃遲明之時、未應三邊曉而我方疑之、復因半夜寒聲、漸悟爲雪也。上に五更といひ、下に半夜といふのは、顛倒して居るといつて、半月と改めた人もあるが、月の字を闕入すると、全局が打ち散らされる。月には聲が無い上に、雨とも矛盾して居る。所謂寒聲は、雪が大きくて、聲ある意。そして其の根は、勢轉嚴の三字に在る。試みに超然臺を掃つて、馬耳山を看ると、瀾望白皚皚ではあるが、雙つの尖鋒が未だ埋沒されなで、馬の耳のやうに聳えて居るのを看る。

【餘錄】王阮亭の古夫子亭雜記に、宋、孫奕字季昭示兒編云、東坡雪夜詩、試掃北臺看馬耳、未隨埋沒、有雙尖、王注、次公曰、馬耳山名、殊不知王晉之與霍辨、雪夜對談曰、看北臺馬耳菜、何如、左右曰、有雙尖在、坡正用此事。王文誥いふ、句謂試掃北臺登望、則羣山爲雪所封、惟馬耳雙尖猶未沒也、如以菜論、是此菜種於臺之上矣、遠則漫無所別、何以獨見此菜雙尖乎、不

圖暗萬馬者、乃亦有此寒蟲聲、可笑可笑也。

城頭初日始翻鴉。

城頭の初日始めて鴉を翻し、

陌上晴泥已沒車。

陌上の晴泥已に車を沒す。

凍合玉樓寒起粟。

凍は玉樓に合し寒さは粟を起し、

光搖銀海眩生花。

光は銀海を搖かし眩して花を生ず。

遺蝗入地應千尺。

遺蝗地に入る應に千尺なるべし、

宿麥連雲有幾家。

宿麥雲に連りて幾家かある。

老病自嗟詩力退。

老病自ら嗟す詩力の退くを、

空吟冰柱憶劉叉。

空しく冰柱を吟じて劉叉を憶ふ。

宿麥といふ。麥が雪を得るときは、滋茂して稔歲を成すといふ。宋、羅願の爾雅翼に、麥比他穀、獨隔歲種、故號宿麥。【六】

吟冰柱、憶劉叉。唐書に、劉叉、韓門弟子作冰柱、雪車二詩、出盧仝孟郊之右、樊宗师、見爲獨拜。宋、葛立方の韻語陽秋に、劉叉が冰柱の詩を載す、詩にいふ、不爲三四時雨、徒爲道路成泥祖、不爲九江浪、徒能泪沒天之涯。

【詩意】城頭に朝日が昇つて、鳥が始めて翻へる時分、陌上(街路)は、夜來の雪の爲に晴泥が車輪を沒するばかりである。兩肩は寒氣の爲に身の毛を立たしめ、雪の光は目を搖かし目映く、ちらちら

らせしめる。(眼花は眩をいふ)蝗の子は、千尺も地下に深く入るべく、麥は青青として雲に連る程であり、そして其間に幾軒も農家がある。此の大雪を見ても、老病の此身は、詩力も退いて、空しく劉叉の冰柱を詠じた詩を吟じて、其の才を憶ひ、兼て又、自身の境遇を嗟くのみである。

【餘録】王安石嘗て東坡の凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花を誦し、蘇子瞻乃能使事至此と歎じた時、其の婿の蔡下は、此句は雪の狀を詠するに過ぎない。狀樓臺如玉樓、瀾漫萬象若銀海をいふのみと。安石晒つて曰く、此出道書也、蔡下曾不理會於玉樓、何以謂之凍合、而下三字云寒起粟、於銀海、何以謂之光搖、而下三字云眩生花乎と。起粟の字は、趙飛燕雖寒體無軫粟に據つたのであらう。宋の葉夢得の石林詩話に、詩禁體物語、此學者類能言之、歐公聚星堂詩、舉此令、坐客皆閣筆、但非能者耳、若能者、則出入縱橫、何可拘礙、鄭谷、亂飄僧舍茶煙濕、密灑歌樓酒力微、非不去體物語、而氣格如此之卑、蘇子瞻凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花、超然飛動、何害其言玉樓銀海とある。紀昀いふ、只是地如銀海、屋似玉樓耳、不必曲爲之說也と。又いふ、玉樓銀海之說、疑出詩話之附會、銀海爲目義尙可通、凍合兩肩、更成何語、且自宋迄今、亦無確指出何道書者、不如依文解之爲是と。蓋し僻解たるを免れない。要するに、玉樓爲肩、銀海爲目、必ず是の如き解をなして、詩意が通ずる。なほ、雪中過淮謁客詩に、萬頃穿銀海、仲殊雪中遊西湖詩に次韻していふ、玉樓已崢嶸と。此詩と一例には解すべからざるやうに思はれる。

謝人見和前篇二首

人の前篇に和せらるるを謝す 二首

已分酒杯欺淺懦

已に分とす酒杯の淺懦を欺くを、

敢將詩力鬪深嚴

敢て詩力を將て深嚴を鬪はす。

漁蓑句好應須畫

漁蓑句好く應に須らく畫くべく、

柳絮才高不道鹹

柳絮才高く鹹を道はず。

敗履尚存東郭足

敗履尚ほ存す東郭の足、

飛花又舞謫仙簷

飛花又舞ふ謫仙の簷。

書生事業眞堪笑

書生の事業眞に笑ふに堪へたり、

忍凍孤吟筆退尖

凍るを忍んで孤吟し筆尖を退く。

【字解】(一) 深嚴 韓退之の聯

句に、再入更深嚴。金史、玉庭筠傳

に、暮年詩律深嚴。七言長篇尤工

險韻。(二) 漁蓑句云云 鄭谷の雪

詩に、江上晚來堪畫處、漁人披得

一蓑歸。殿贊、善く小筆精微、摹し

て圖畫を爲る。故に谷は詩を以て之

を謝して曰く、愛余風雪句、幽絕寫

漁蓑一。陸龜蒙の詩に、輕舟過去

眞堪畫。(三) 柳絮才高云云 世

説に、謝安嘗内集、俄而雪驟下、安

欣然曰、白雪紛紛何所似、兄子朗曰、撒鹽空中、差可擬、兄女道韞曰、未若柳絮因風起、

以示顧愷之、愷之曰、卿此賦實超三元虛、(元虛は木華の字)但恨不道鹽耳。(五) 東郭足 史記、滑稽傳に、東郭先生久待詔公

車、貧困饑寒、衣弊履不完、行雪中、履有上無下、足盡踐地、道中人笑之、先生應之曰、誰能履行雪中、令三人視之、其上

履也、其下乃似三人足者乎。(六) 飛花又舞云云 李太白の詩に、飛花送酒舞前簷、太白、京師に至り、太子の賓客、賀知章に紫

極宮に遇ふ。知章一見し、嘆じて曰く、子は誠に謫仙人なりと。(七) 筆退尖 韓退之の詩に、鬼尖斜莫竝。蓋し苦寒なれば則ち

筆退尖す。

【題義】此詩も前詩と同時の作。人が前篇に和せられたのを謝したのである。王文誥いふ、二詩、語多託諷、與閒花亦偶裁同意、明係答安石者上云云と。查初白いふ、先生自和、已不能佳、後人乃好用此韻、作雪詩、何也と。

【詩意】我は既に酒杯の淺懦を欺くを分とし、酒の力は我が淺懦を侮りてだます(敢て詩の力で詩律の深嚴を鬪はす。かの鄭谷が雪の詩、漁蓑の句は、好く寫し得て、眞に畫圖に入る。東坡は嘗て此詩を評して村舎學中の語となしたが、實事であるから引用したのである。晉の謝安が嘗て、内集したとき、俄に雪が降つた。安は欣然として白雪紛紛何の似たる所ぞといふと、兄の子朗は鹽を空中に撒けば、やや擬すべしと言つた所、兄の女道韞は、未だ柳絮の風に因つて起るといふに若かずと言つたさうである。道韞は才が高くて、雪を形容するに鹹を言はなかつた。東郭先生は貧困にして、衣は弊れ履は完からず。雪中を行くに、上があつて下のない履を穿つたので、道中の人に笑はれた。飛花送酒舞前簷と言つた、李太白は眞に仙人である。書生の事業は眞に笑ふに堪へる。凍を忍んで獨りで詩を吟じ、筆の頭も坊主となつてしまつた。

九陌淒風戰齒牙

九陌淒風齒牙を戰はす、

銀杯逐馬帶隨車

銀杯馬を逐うて帶車に隨ふ。

【字解】(一) 九陌 都城の大道。

楊巨源の詩に、九陌華軒爭道路。

(二) 淒風 左傳、昭公四年に、春無淒

也知不作堅牢玉。也知堅牢の玉と作らずば、
 無奈能開頃刻花。奈ともするなし能く頃刻の花を開くを。
 得酒強歡愁底事。酒を得て強ひて歡ぶ底事を愁ふる、
 閉門高臥定誰家。門を閉ちて高く臥す定めて誰が家ぞ。
 臺前日暖君須愛。臺前日に暖かなり君須らく愛すべし、
 冰下寒魚漸可又。冰下の寒魚漸く又すべし。

風、秋無苦雨。【三】銀杯逐馬云
 云 韓退之の雪詩に、隨車翻縞帶、
 逐馬散銀杯。【四】不作堅牢玉
 云云 謝惠連の雪賦に、白玉雖白、
 空守貞兮、未若茲雪、因時興滅。
 白樂天の詩に、大都好物不堅牢、
 【五】頃刻花 暫くの間の花。東坡の
 詩に、天巧能開頃刻花。【六】強歡
 韓退之の詩に、胡爲浪自苦、得酒且

歡喜。【七】愁底事 杜牧之の詩に、與愁爭底事。底事は、何事といふに同じ。【八】閉門高臥 汝南先賢傳に、洛陽大雪積地
 丈餘、令自出案行、至袁安門、無行迹、謂安已死、令二人除雪入戶、見安僵臥、問何以不出、曰大雪人皆餓、不宜干人、令以
 爲賢、舉爲孝廉也。【九】漸可又 韓退之に、又魚の詩あり。潘岳の西征賦に、挺又來往。注にいふ、取魚又也と。

【詩意】漢の長安城中は、八街九陌あるとか、都城の大道が九條あるから、九陌といふ。九陌にも寒
 い風が凄まじく吹いて來るので、齒牙もがたがた戦いて居る。かくて雪は結んで氷となり、馬を逐う
 て、銀杯を散らすやうである。又、車に隨つて、縞帶を翻すやうにも見える。(紀昀いふ、去一縞字、
 便不是雪と。)白雪の性は消え、白玉の性は堅い。堅牢の玉とならなければ、開いた頃刻の花(雪をい
 ふ)をどうすることも出來ないことが解かる。昔、韓退之の姪孫(兄弟の孫)韓湘は自ら言ふ、能く
 頃刻の花を開くと、退之曰く、子、豈能く造化を奪はんやと。湘は乃ち土を聚め、盆を以て之を覆ふ。

俄にして盆を擧げると、碧牡丹二朶を開いた。葉に小字が書いてある、雲横秦嶺、家何在、雪擁藍關、
 馬不前的詩である。退之、後、潮州に謫せられ、藍關に至つて雪に遇つたので、乃ち悟つたといふこ
 とである。酒を得て、且つ歡喜すべく、何事を愁へるのであるか。門を閉ちて高臥するは、そも誰の
 家であるか。洛陽に大雪があつた時、縣令は自ら出でて案行し、不圖、袁安の家の門に至つた。人の
 行いた迹もないので、袁安は死んだと思ひ、人をして雪を除いて戸に入らしめた所、安の僵臥して居
 るのを見た。なせ出ないかといふと、大雪で人が皆、饑えて居るから、人に干むべからずと言つたさ
 うである。臺の前も、だんだん日が暖かになつた。氷の下の寒魚も、又して捕へることが出來よう。
 【餘錄】東坡は既に此詩を作つて黃門に示した、黃門曰く、冰下有魚、恐未易又耳、東風解凍、
 冰始解、莫若改爲冰解如何と、東坡は以て知言となしたといふことである。王文誥いふ、此說附會、
 解凍之意已到云と。

趙成伯家有麗人。僕忝鄉人。不肯開樽。徒吟春
 雪美句次韻一笑

趙成伯の家に麗人あり、僕郷人を忝うし、肯て樽を開かず。徒に春雪美句
 を吟じて、韻に次して一笑す

繡簾朱戶未曾開。繡簾朱戶未だ曾て開かず、
誰見梅花落鏡臺。誰か見ん梅花の鏡臺に落つるを。

試問高吟三十韻。試みに問ふ高吟の三十韻、
何如低唱兩三杯。何ぞ低唱の兩三杯に如かん。

莫言衰鬢聊相映。言ふこと莫れ衰鬢聊か相映すと、
須得纖腰與共回。須らく纖腰を得て與に共に回るべし。

知道文君隔青瑣。知道す文君の青瑣を隔つるを、
知道文君隔青瑣。知道す文君の青瑣を隔つるを、

梁園賦客肯言才。梁園の賦客肯て才を言はんや。

低唱兩三杯。東坡自注に、世傳、陶穀學士買得党太尉家故伎、遇雪、陶取雪水烹團茶、謂伎曰、党家應不識此伎、曰、彼粗人、安
有此景、但能於銷金煖帳下、淺斟低唱、喫羊羔兒酒、陶默然媿其言。【八】衰鬢。白樂天の詩に、一催衰鬢色。東坡の詩に、衰鬢
從教病葉零。【九】纖腰。細腰に同じ。元微之の詩に、媚語嬌不聞、纖腰軟無力。【一〇】知道。承知する義。【一一】文君。卓文君、
蜀郡臨邛の富人卓王孫の女。音を好む。司馬相如、琴心を以て之を挑む。相如は雍容閑雅。文君、之を悦び、夜亡げて相如に奔る。

【一三】青瑣。天子の宮門。門扉に、連瑣の模様を彫刻し、青漆にて塗る。漢舊儀に、黃門郎屬青瑣門、日暮入對青瑣門一拜、名曰夕
郎。【一四】梁園賦客。司馬相如をいふ。園は漢、梁の孝王の園。杜子美の詩に、醉舞梁園夜、行歌泗水春。

【題義】密州の倅である趙成伯の家に佳人が居る、東坡と同郷の人といふので、爲に春雪美句を吟じ、
韻に次したのが此詩である。

【詩意】佳人の住まつて居る室は、縫ひ取りの簾も、朱塗りの戸も、未だ曾て開かない。常に深閑に
居るので、誰も梅花の鏡臺に落ちるのを見ない。(佳人を見る事が出来ない。)試みに問ふ、高吟雪詩
の三十韻、それは秀才の衣帶上にあつたと傳へて居るが、何ぞ煖帳の下で淺酌しつつ低唱する兩三酒
杯に及ばうぞ。衰鬢相映するなど言つてはならない。須らく細腰の佳人を得て、共に回るべきであら
う。卓文君が青瑣門を隔てて居ることも、承知であらう。琴心を以て之を挑んだ梁園の賦客司馬相如
は、雍容閑雅、文君に悦ばる。

【餘録】漢の司馬相如、字は長卿、成都の人。藺相如の人と爲りを慕つて、名を相如と改む。孝景帝
に事へて、武騎常侍となる。時に、梁の孝王、來朝す。相如、王に従ふ所の游説の士、鄒陽、枚乘の徒
を見て説び、職を辭して、梁に客遊す。諸生と舍を同うして居り、子虛賦を著す。孝王卒するに及ん
で、家に歸る。武帝、子虛賦を讀み、之を善しとして曰く、朕、此人と時を同うするを得ざるを憾む
と。蜀人楊得意、時に帝に侍す。曰く、臣の邑人司馬相如いふ、自ら此賦を爲ると。帝、驚いて相如
を召す。又、子虛・烏有・亡是の三人を設けて問難を作る。帝、大に説び、拜して郎と爲す。是より屢
賦を獻じて、大に帝の意を得しが、後、病を以て茂陵に家居す。

成伯家宴造坐無由。輒欲效顰而酒已盡。入夜

古今體詩 成伯家宴造坐無由輒欲效顰而酒已盡入夜不欲煩擾戲作小詩求數韵而已

三二七

不_(三)欲_(三)煩_(三)擾_(三)戲_(三)作_(三)小_(三)詩_(三)求_(三)數_(三)酌_(三)而_(三)已_(三)

成伯の家宴す、坐に造るに由なし、輒ち響に效はんと欲して酒已に盡き、夜に入つて煩擾を欲せず、戯れに小詩を作つて、數酌を求むるのみ

道士令嚴難繼和

道士令嚴にして和を繼ぎ難し、

僧伽帽小却空廻

僧伽帽小にして却つて空しく廻る、

隔籬不喚隣翁飲

籬を隔てて隣翁を喚んで飲まず、

抱甕須防吏部來

甕を抱いて須らく吏部の來るを防ぐべし。

西施病心而曠其里、其里之醜人見而美之、歸亦捧心而曠其里、彼知美曠、而不_(三)知_(三)曠_(三)之_(三)所_(三)以_(三)美_(三)。曠は擘に同じ。【三】煩擾。煩はしくみだれる。史記、李將軍傳に、我軍雖_(三)煩_(三)擾_(三)、虜亦_(三)不_(三)得_(三)犯_(三)我_(三)。【四】道士令嚴云云 東坡の自注に、道士令嚴(佩巾)神樂中所謂離而復合者。【五】僧伽 僧徒をいふ。琅琊代醉篇に、僧伽、唐言_(三)袈_(三)僧_(三)。【六】抱_(三)甕_(三)云云 晉の畢卓字は茂世、少うして放達を希ふ。吏部郎となり、常に酒を飲み、職を廢す。鄰舍の郎、醜熟す、卓、醉に因つて、夜、其の甕間に至り、盗み飲んで、酒を掌るものの爲に縛せらる。明且、之を視れば、乃ち畢吏部なり。遽に其の縛を釋く。卓、遂に主人を引いて、甕の側に宴し、醉を致して去る。

【題義】趙成伯の家で、酒宴の催があつた。我も柄にない真似をしようとしたが、酒が盡きたから、小詩を作つたのである。紀昀いふ、此二首、當時原不_(三)當_(三)做_(三)詩_(三)、後人炫博收_(三)之_(三)、爲_(三)累_(三)不_(三)小_(三)と。

【詩意】趙成伯の家の酒宴は、興方に酣で、道士の佩巾も、離れては復合する。我は坐に造るに由なく、和を繼ぎ難い。又、僧徒の帽は小さくて、酒を容れるに足らない、却つて空しく廻る。籬を隔てて、隣翁を呼んで酒を飲まうともしない。ただ酒の甕を抱いて、酒盗人の畢吏部が來るを防ぐべきである。畢卓吏部は、隣舍の郎の醸した酒を盗み飲んで縛られた。常に人に謂つていふ、酒を得て數百斛の船に滿ち、四時の甘味(果實類)を兩頭に置き、右手に酒杯を持ち、左手に蟹螯を持ち、酒船の中に拍浮せば、便ち一生を了するに足ると言つた。(拍は拊で、掌を鳴らし節を撃つて相樂しむ貌である。)

成伯席上贈所出妓川人楊姐

成伯の席上、出す所の妓、川人楊姐に贈る

坐來眞箇好相宜

坐來眞箇好相宜し、

深注脣兒淺畫眉

深く脣兒を注いで淺く眉を畫く。

須信楊家佳麗種

須らく信すべし楊家佳麗の種、

洛川自有浴妃池

洛川自から浴妃の池あり。

よい人相。唐書、羊祜傳に、孺子有_(三)好_(三)相_(三)。【五】脣兒 口縁をいふ、兒は助字。【六】浴妃池 楊貴妃は西蜀に生る。嘗て誤つて池中に落つ、後人、呼んで浴妃池となす。

【題義】成伯の酒席上で韓旋した四川から來た妓、楊姐に贈つた詩である。

古今體詩 成伯席上贈所出妓川人楊姐

【詩意】宴は方に酣で、坐中の美人は、蜀の産、ほんとに人相が好い上に、深く唇に紅を注ぎ、浅く眉を畫いて居る。楊貴妃は西蜀の生れであるが、此の妓も、同じ蜀の出で、楊家佳麗の種、美人の系を引いて居ることと思はれる。楊貴妃は嘗て誤つて池中に落ちたが、幸にも怪我はなかつた。後人が其の池を浴妃池と呼んで居る。此の洛川にも自ら浴妃の池がある。妓もここに浴して其の凝脂を洗はれたことであらう。(凝脂は、かたまつた油のことで、白い皮膚を形容していふのである。)

鐵溝行贈喬太博

鐵溝行、喬太博に贈る

城東坡隴何所似。城東の坡隴何の似たる所ぞ、
 風吹海濤低復起。風は海濤を吹いて低うして復起る。
 城中病守無所爲。城中の病守爲す所なく、
 走馬來尋鐵溝水。馬を走らして來り尋ぬ鐵溝の水。
 鐵溝水淺不容輶。鐵溝水淺くして輶を容れず、
 恰似當年韓與侯。恰も似たり當年韓と侯と。
 有魚無魚何足道。魚あり魚なき何ぞ道ふに足らん、

【字解】(一) 鐵溝 陳沂の山東志に、鐵溝水、源出烽火火山、流經諸城縣東北一十里入濰水。(二) 喬太博 名は鉞、字は再功。前に出づ。(三) 坡隴 坡は阪。隴は畝。東坡の詩に、登高回首坡隴隔、惟見烏帽出復沒。(四) 何所似 杜子美の詩に、嘉陵江上何所似、石黛碧玉相因依。(五) 所爲 左傳に、夫上之所爲、民之歸也。莊子、漁父

駕言聊復寫我憂。

駕して言に聊か復我が憂へを寫す。

孤村野店亦何有。

孤村野店亦何か有らん、

欲發狂言須斗酒。

狂言を發せんと欲して斗酒を須ふ。

山頭落日側金盆。

山頭の落日金盆を側つ、

倒著接羅搔白首。

倒に接羅を着けて白首を搔く。

忽憶從軍年少時。

忽ち憶ふ軍に從ふ年少の時、

輕裘細馬百不知。

輕裘細馬百も知らず。

臂弓腰箭南山下。

弓を臂にし箭を腰にす南山の下、

追逐長楊射獵兒。

追逐す長楊射獵の兒なりしを。

老去同君兩憔悴。

老い去つて君と同じく兩ながら憔悴し、

犯夜醉歸人不避。

夜を犯して醉歸すれば人避けず。

明年定起故將軍。

明年定めて故將軍を起さん、

未肯先誅霸陵尉。

未だ肯て先づ霸陵の尉を誅せず。

諸侯王、白首無所遇者。

【一四】 輕裘

輕い皮衣、軽く暖かなるを貴ぶ。論語、雍也篇に、乘肥馬衣輕裘。【一五】 細馬 善い馬。

古今體詩 鐵溝行贈喬太博

篇に、世俗之所爲也。【一六】 容輶 輶は小車のながえなり。韓退之の詩に、溫水微茫絕又流、深如車輶、闊如輶。【一七】 韓與侯 韓退之の詩に、吾黨侯生字叔起、呼我持竿釣溫泉。【一八】 駕言云云 陶淵明の歸去來辭に、復駕言兮焉求。復、駕を命じて、世に出で交はるは、焉ぞ此を求めんといふ意。【一九】 狂言 杜牧之の詩に、忽發狂言驚滿坐。

【二〇】 斗酒 後赤壁賦に、我有斗酒藏之久矣。【二一】 側金盆 杜子美の詩に、夜闌接軟語、落月如金盆。【二二】 倒著接羅 晉書、山簡傳に、襄陽兒童歌曰、時時能騎馬、倒著白接羅。李太白の襄陽歌に、落日欲沒岷山西、倒著接羅花下迷。

接羅は白帽。【二三】 白首 白頭に同じ、史記、范雎、蔡澤傳贊に、游說

唐六典に、使司每歲簡細馬五十四。李太白の詩に、胡姬十五細馬馱。【六】長楊射獵兒。漢書、揚雄傳に、上將大誇胡人、以多禽獸、命右扶風、發民入南山、捕熊羆豪猪虎豹狐兔麋鹿、輸長楊射熊館、以網爲圍陸、縱禽獸其中、令胡人手搏之、上親臨觀焉、雄從至射熊館、還上長楊賦、以風諫。【七】憔悴。屈原の漁父辭に、顔色憔悴、形容枯槁。孟子、公孫丑に、民之憔悴於虐政。【八】犯夜醉歸云云。史記、李廣傳に、廣居藍田南山中射獵、嘗夜從一騎出、從三人田間飲、還至亭、霸陵尉醉呵止廣、廣驕曰、故李將軍、尉曰、今將軍、尚不得夜行、何乃故也。止廣宿亭下、居無何、廣爲右北平太守、請霸陵尉、與俱至軍斬之。

【題義】此詩は熙寧七年十二月、密州に於て作つたものである。紀昀いふ、文境拓開、音節亦直逼唐人。行は歌行の行で、詩の一體、琵琶行・短歌行などの類をいふ。

【詩意】城東の阪や壘の起伏して居るさまを形容して見ると、風が海濤を吹いて、或は低く、或は高くなるやうである。さて城中の病太守は爲す所もなく馬を走らし來つて鐵溝水邊を尋ねる。鐵溝の水は、至つて淺くして小車の轆をも容れない。太守の竿を持ちてここに釣するのは、恰も當年の韓退之と侯叔起とに似て居る。韓退之の詩にも、吾が黨の侯生字は叔起、我を呼び竿を持して温泉に釣るといふ言葉が見えて居る。又、同じく韓退之の詩に、此縦有魚何足求とある。魚のあるも、魚のないのも、何ぞ道ふに足らん。ただ駕を命じてここに聊か復、我が憂を寫すのみである。孤村や野店、我に於て亦、何かあらん。一つ狂言を發しようとして、一升酒を傾ける。落日没せんと欲す岷山の西、倒に接羅を著けて花下に迷ふ。山頭の落日は、恰も金の盆を側てるやうである。倒に白い帽を著け、白髮の頭を搔く。此の搔く白頭も、久しい間遇ふ所がなかつた。憶ふ昔、年の少い時分、軍に従つた

際、輕い皮衣や、上等の馬などには固より縁がなかつた。南山の下で、弓を臂にし、箭を腰にして、熊羆豪猪、虎も豹も、狄（黒ざる）獾（大猿）、狐兔麋鹿等をも捕へ、長楊射熊館の射獵兒と追逐したこともあるものを、老い去つて君と同じやうに兩ながら瘡せ衰へたので、行く人も道を避けない。昔、漢の李廣が南山に屏居中、嘗て夜、一騎を從へて歸り、霸陵尉に呵止されたことがある。そこで、廣の騎は故の李將軍であるぞと言ふと、尉は酔うて居たので、今の將軍でも、夜行は出來ない。何ぞ乃ち故をやと、威張つた。幾もなく廣は右北平の太守となると、この霸陵尉を請うて軍に至り、之を斬つた。今、喬太博も志を得ない點は李將軍に似て居る、併し明年は定めて、故將軍のやうに太博も起されやう。だが敢て李將軍のやうに、霸陵尉を誅しないと信ずる。王注に、禹功（喬太博の字）嘗欲換武、故有此句、其後、果換左藏、知欽州と。禹功、又詩を作つていふ、今年果起故將軍と。此言の明驗を言つたのであらう。

莫笑銀杯小答喬太博

銀杯の小なるを笑ふなかれ、喬太博に答ふ

陶潛一縣令

陶潛は一縣令、

【字解】一、陶潛、字は元亮、侃の曾孫、晉の名は淵明、宋に潛と改む。晉に仕へて州の祭酒となり、

獨飲仍獨醒

獨り飲み仍つて獨り醒む。

古今體詩 莫笑銀杯小答喬太博

猶將公田二頃五 猶ほ公田二頃五十畝を將て、

十畝

種秫作酒不種秔 秫を種えて酒を作つて秔を種ゑず。

我今號爲二千石 我今號して二千石と爲すも、

歲釀百石何以醉 歲ごとに百石を釀さば何を以て賓客を

賓客

醉はしめん。

請君莫笑銀杯小 請ふ君銀杯の小なるを笑ふこと莫れ、

爾來歲早東海窄 爾來歲早して東海窄し。

會當拂衣歸故邱 會當に衣を拂うて故邱に歸るべし。

作書貸粟監河侯 書を作つて粟を監河侯に貸り、

萬斛船中著美酒 萬斛船中美酒を著けて、

與君一生長拍浮 君と一生長く拍浮せん。

【題義】此詩は熙寧八年正月の作である。王文誥いふ、時減三削公使庫錢太甚、歲造酒不得過二百石、詩意專指此事、故題曰莫笑銀杯小也。

久しからずして解きて歸る。主簿に召さる、就かず。後、又、彭澤の令となる。【一】種秫作酒 晉書に陶潛爲彭澤令、在縣、公田悉令種秫、妻子固請種秔、乃以二頃五十畝種秫、五十畝種秔。【二】二千石 郡の太守は、年俸二千石、漢書、百官表に、郡守、秦官、掌治其郡、秩二千石。【三】拂衣 奮ひ起つをいふ。國語に、拂衣從之、人救之。【四】貸粟監河侯 莊子、外物論に、莊周家貧、故往貸粟於監河侯。【五】萬斛船中云云 晉書に、畢卓、嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生一矣。前にも出づ。

【詩意】凡そ醉ふには、各宜しき所がある。花に酔ふは晝に宜しい、其の光を襲ねるからである。雪に酔ふは夜に宜しい、其の潔を消すからである。樓に酔ふは暑に宜しい、其の清を資けるからである。水に酔ふは秋に宜しい。其の爽を浮べるからである。陶淵明は彭澤の一縣令のみ、獨り飲んで、仍つて獨り醒む。公田には悉く秫を種ゑしむ。妻子は固く種(秔に同じ)を種ゑんことを請うた。乃ち半は秫を種ゑ、半は秔を種ゑた。秫を種ゑて酒を作り、秔をば種ゑない所に、陶淵明の本色が見はれて居る。我は今、二千石と號し、一郡の長官であるが、歲ごとに百石の酒を釀し、それ以上は造られない。これでは何を以て賓客を十分に酔はしめることが出来ようぞ。請ふ君よ、銀杯の小さいことを笑ふことなかれ。(釀した酒が豊富でない)それは庫錢が甚しく減削されて、酒を造るにも百石を過ぎるを得ないからである。爾來、歲も早して、東海も窄くなつたから、ますます庫錢が足りない。されば必ず當に衣を拂つて奮ひ起つて故郷に歸らうと思ふ。歸つた上で、手紙を認め、粟を監河侯から借り、萬斛船中に美しい酒を満載し、四時の果實類を兩頭に置き、右手に酒杯、左手に蟹螯、かくて君と酒船の中に拍浮し、一生を送らうではないか。(拍は拊で掌を鳴らし、節を撃つて相樂しむをいふ。)

蘇東坡詩集 卷十三

古今體詩 四十三首

送段屯田分得于字

段屯田を送り、分つて于の字を得たり

勸農使者古大夫。農を勸むる使者は古の大夫、

不惜春衫踐泥塗。惜まず春衫泥塗を踐むを。

王事靡盬君甚劬。王事盬きことなく君甚だ劬る、

奉常客卿虬兩鬚。奉常客卿は虬兩鬚。

東武縣令天馬駒。東武縣令は天馬の駒、

泮宮先生非俗儒。泮宮先生は俗儒にあらず。

相與野飲四子俱。相與に野飲四子俱にす、

樂哉此樂城中無。樂いかな此の樂みは城中に無し。

谿邊策杖自攜壺。谿邊に杖を策いて自ら壺を攜へ、

【字解】 一 段屯田 段釋之をいふ。屯田は周禮、冬官に、有屯部、今日屯田司。 二 勸農使者 段屯田を指す。宋史、食貨志に、天禧四年、始詔諸路提點刑獄朝臣爲勸農使、使臣爲副使。 三 王事靡盬 盬は音コ、堅牢でないこと。王事は堅固ならざるべからず、故に王事に力を盡す。詩、唐風に、王事靡盬、不能蓺稷黍。小雅、四牡の篇に、王事靡盬、我心傷悲。 四 樂哉 樂は勞るる意。詩、小雅に、哀哀父母、生我劬勞。 五 奉常客卿

腰^(一)笏不煩何易于。笏^(二)を腰にして何易于を煩はさず。
 膠西病守老且迂。膠西の病守老い且つ迂、
 空齋愁坐紛墨朱。空齋愁へて坐し墨朱を紛はす。
 四十豈不知頭顱。四十豈頭顱を知らざらんや、
 畏人不出何其愚。人を畏れて出でざるは何ぞ其れ愚なる。

喬太博をいふ。王注に、應レ爲三太常博士二矣、時、趙杲爲三郡教授。查注に、奉常客卿を以て密倅趙成伯となすは誤なり。東坡が任に到り、年を経て、成伯が始めて來つて倅となる。
 【六】 虬鬚 三國、崔琰傳に、崔琰對三賓客、虬鬚直視。唐の張說にも、

虬鬚客傳あり。【七】 東武縣令 輿地廣記に、密州諸城縣、東漢、東武縣地。時に趙晦之は東武縣令であつた。趙晦之、名は昶、東坡詩集に見ゆ。【八】 天馬駒 史記大宛傳の注に、國有高山、其上有馬、取五色馬、置其下、與交生駒、汗血、因號曰三天馬子。【九】 泮宮 諸侯の學校、東西門以南は、水をめぐらし、以北は水なし、故に泮といふ。詩、魯頌に、明明魯侯、克明三其德、既作泮宮、淮夷攸服。時に趙杲卿、郡の教授たり。查注に、寧導道、趙明叔、皆爲三密州教授。【一〇】 腰笏不煩何易于 唐書に、何易于爲三益昌令、刺史崔朴、常乘春、從三賓客汎舟、索民挽舟、易于腰笏身挽、朴驚問レ狀、易于曰、方春百姓不耕、即蠶隙不可レ奪、縣令閒暇、當レ任三其勞、朴愧、疾驅去。【一一】 膠西 漢の膠西王の國、今の山東膠縣高密等の地。【一二】 四十豈不知頭顱 據道に、陶弘景與三從兄書云、昔任宣期三四十左右作三尙書郎、即抽簪高邁、今三十六、方作三奉請、頭顱可レ知、不レ如三早去。查注に、先生丙子生、至三乙卯二年恰四十。

【題義】 此詩は熙寧八年正月の作である。紀昀いふ、通篇不見三送三段之意、恐題有脱訛、詩語却極矯健一と。

【詩意】 農業を勧めるといふ名の使者は、宋、眞宗の天禧四年に始つた。即ち諸路の提點刑獄（宋の時に、提點刑獄・提點宮觀等の官がある）に詔して勸農使となし、使臣を副使となした。勸農使者は、地位をいふと古の大夫である。大夫の地位であつても、春衫（單衣）を着けて、泥塗を踐むことを惜しまない。それは王事盡きことなしで、力を王事に盡さなければならぬからである。段君には何時も甚だ劬勞をなして居られる。奉常客卿の喬太博は、虬鬚直視の英雄、東武縣令の趙晦之は、天馬の駒とも評すべき立派な人である。そして泮宮 諸侯の學問所、古はここで郷射を習はした）の先生趙杲卿も、俗儒ではない。そこで段屯田・喬太博・趙晦之・趙杲卿の四子は、相與に野飲して樂む。かかる樂みは、到底城中では見られない。一瓢の清酒兩三人、谿邊に杖を策いて、自ら酒の壺を攜へ、笏を腰にしてまでも、何易于を煩はさない。昔、何易于が益昌縣の令であつたとき、刺史崔朴が常に春に乗じて賓客を從へ、舟遊をなした。易于は笏を腰にして舟を挽くと、崔朴は驚いて、こは如何にと狀を問うた。易于曰く、民は方に耕桑で忙はしいから、故なく役してはならないと。朴は愧ぢ、直に跳つて舟を出で騎して還り去つたとか。此詩は此の故事に據つたのである。さて膠西の病太守（東坡自ら謂ふ）は年老いて且つ迂闊である。空齋に愁へ坐して墨や朱を書物に加へて居る。此の窮措大には前途見込はない。昔は仕官して四十前後に尙書郎と作ることを期した。今、我は奉請となるのみ。頭顱知るべきであるから、早く去る方がよい。人を畏れて出でざるは、愚の極である。

和段屯田荆林館

段屯田が荆林館に和す

南山有佳色。無人空自奇。

南山佳色あり、人の空しく自ら奇とするなし。

清詩爲題品。草木變芬菲。

清詩題品を爲し、草木芬菲を變ず。

謝女得秀句。留待中郎歸。

謝女秀句を得、留待中郎歸る、

便當勤鞭策。僕倦馬亦飢。

便ち當に鞭策を勤むべし、僕は倦み馬も亦飢う。

【字解】

【一】南山有佳色。黃庚の詩に、北山佳景勝南山。【二】題品。品題といふに同じ、品定めするをいふ。宋史、楊億傳

に、當時文士、咸賴其品題。【三】芬菲。花草の佳い香、芳美といふに同じ。沈佺期の詩に、瀟湘春有酒、岐路惜芬菲。【四】

謝女得秀句。謝女は謝安が兄謝奕の女道韞(王凝之の妻)。東坡の自注に、段有姪女在密州。杜子美の詩に、題詩得秀句。又、最

傳秀句。寰區滿。特にすぐれた句。【五】留待中郎。謝安をいふ。謝安は東山に棲遲し、年四十餘、始めて仕志あり。留待の字面は

五代史、馮道傳に、明宗擁兵犯京師、孔循勸道、少留以待云云。【六】鞭策。曲禮に、乘路馬、必朝服載鞭策。

【題義】此詩も前詩と同じく熙寧八年正月の作。段屯田が荆林館の詩に和したのである。

【詩意】南山戸に當つて轉た分明で佳色が多い。人が空しく之を奇としないで、清詩を作つて、頻に

品定めをする。満目の草も木も、好詩に入つて芳美となる。晉の謝道韞は、謝安の兄の女であるが、風韻が高邁で、文致も亦清雅。嘗て内集の時、俄にして雪が下る。謝安曰く、何の似たる所ぞと。安が兄の子朗曰く、鹽を空中に散らせば、差擬すべしと。道韞曰く、未だ柳絮の風に因つて起るに如かずと。段屯田にも、謝女に劣らない姪女を有たれるから、定めし詩を題して秀句を得られることであるからである。

出城送客不及步至溪上二首

城を出で客を送りて及ばず、歩して溪上に至る 二首

送客客已去。尋花花未開。

客を送りて客已に去り、花を尋ねて花未だ開かず。

未能城裏去。且復水邊來。

未だ城裏に去る能はず、且復水邊に來る。

父老借問我。使君安在哉。

父老我に借問す、使君安に在るや。

今年好風雪。會見麥千堆。

今年風雪好し、會ず見ん麥の千堆なるを。

【字解】

【一】借問。假に問ふ意。陶淵明の詩に、借問爲誰悲、懷人在九霄。【二】使君。漢の世、太守を府君といひ、刺史を

使君といふ。前にも出づ。【三】安在哉。高適の詩に、河漢徒相望、嘉期安在哉。東坡、赤壁賦に、此固一世之雄也、而今安在哉。

【四】會。必然の辭。會當凌絕頂、一覽衆山小。會是排風有毛質、會向瑤臺月下逢等、用例多し。

【題義】此詩は熙寧八年三月の作。王文誥いふ、此詩有春來六十日句、據東都事略、是年逢閏、立春當在正月、是作此詩、在三月中也、紀昀いふ、二詩、皆老筆直寫、無根柢、人強效之、便成淺率と。

【詩意】 我われは城中じやうちゆうを出いでて、客きやくの行くを送おくらうとしたが、客きやくは既に去さつて、間に合あはなかつた。我われは春はるを尋たづねても、春はるを見みない。花はながまだ開ひらいて居ゐない。併しかし、城裏じやうりに去さることも出で来きなく、暫しばしまた水みづ邊へんに來きつて遊あそぶ。父老ふらうは來きたつて試こころみに我われに問とふ、使君しきんは今日けふ此頃このころ、何處どこに居をられると。又またいふ、今年ことしは風雪ふうせつ好よく、豊年ほうねんの前兆ぜんてうであると。(韓退之かんだんしの言げんにも、春雲しゆんうん始めて繁しげくして時雪じせつ遂つひに降くだる、實じつに豊年ほうねんの嘉瑞かすうとある。)必かならず麥むぎの收穫しゆくわくが多おほくて、千堆せんたいなるを見みるであらう。

春來六十日。笑口幾回開。 春來六十日、笑口幾回開く。

會作堂堂去。何妨得得來。 會かず堂だう堂だうを作なして去さる、何なんぞ妨さまたげん得とく得とくとして來きたるを。

倦遊行老矣。舊隱賦歸哉。 倦けん遊行いゆく、老わいたり、舊きう隱いん賦さいを賦ふす。

東望峨眉小。盧山翠作堆。 東ひがしのかた望のぞめば峨眉がびせう小せうに、盧山ろざん翠みどり堆たいを作なす。

【字解】 【一】 笑口幾回開 白樂天の詩に、青春せいしゆん只有ただ九十じちゆう日にち、不な開ひらく口くち笑わらふ是こ癡人ちじん。杜牧とく之の詩しに、塵世ちんせい難がた逢あ開ひらく口くち笑わらふ。 【二】 作堂堂去 唐人の詩に、青春せいしゆん背せい我われ堂だう堂だう去さる、白髮はくはつ期き人じん故こ放ほう生せい。 【三】 得得來 得得とく得得とくは特とく地ちといふに同じ。ことさらといふ意いで、唐人の方言。僧貫休の詩に、一瓶いつべい一鉢いつぱつ垂し垂し老らう、萬水まんすい千山せんざん得とく得とく來きた。 【四】 倦遊 遊學いゆうがくに倦けんみ疲つかれるをいふ。史記しき、司馬相如ししやうしやう傳でんに、長卿ちやうしやう故こ倦遊けんいゆう、雖すい貧ひん、其人其人材さい足じやく依い也や。何遜かたせんとの詩しに、我われ本ほん倦遊けんいゆう客きやく、心こころ念ねん似に懸旌けんせい。懸旌けんせいと、心の動うごいて定さだまらざるに喩よふ。 【五】 老矣 左傳さでんに、燭しやく之の武ぶ曰い、臣しん之の壯也さうや、猶なほ不な如ごと人じん、今いま老らう矣や、無な能な爲な爲な也や。 【六】 歸哉 詩しに、振振しんしん君子くんし、歸哉きさい。 【七】 峨眉小 東坡とうぱの自注じゆちゆに、郡東ぐんとう盧山ろざん絶たつ類るい峨眉がびせう而しか小せうとある。 【八】 盧山 地理志ちりしに、山さん在ある東武とうぶ故城こてい東南とうとう、世謂せい之の盧山ろざん。陳沂ちんし、山東志しやんとしに、盧山ろざん在ある諸城しよてい縣けん東南とうとう四十五里しよじふご。

【詩意】 青春せいしゆんは只ただ九十じちゆう日にち、口くちを開ひらいて笑わらはないのは是こ癡人ちじんと。春はるになつて早ちやくや六十ちやく日にちを経へたが、笑わらふ口くちを幾回開ひらいたことであらう。青春せいしゆんは我われに背せいいて堂だう堂だうとして去さる。白髮はくはつとなつた此身このみも、何なんぞ妨さまたげん、萬水まんすい千山せんざん得とく得とく(ことさらに)として來きたるを。我われは既すでに遊學いゆうがくに倦けんみ疲つかれた客きやくである。又また、老わいて能なく爲なすことがない。久ひさしく隠かくれようとして歸かへ哉かなを賦ふし、東ひがしの方かた、盧山ろざんを望のぞむ。盧山ろざんは愛あいすべく、翠みどりが堆たいをなしたやうで、甚はなだ峨眉がびせう山さんに似にて居ゐる。ただ形かたちが小ちひさいのみである。(紀昀きいんいふ、縮合しゆくがふ得とく不な寂寞じやくもくと。)

游盧山次韻章傳道 盧山に遊び章傳道に次韻す

塵容已似服轅駒。 塵容ちんようは已すでに轅えん駒こに似にたり、
野性猶同縱壑魚。 野性やせいは猶なほ壑たにに縱ほなる魚うをに同おなじ。
出入巖巒千仞表。 出しゆつ入にふす巖がん巒らん千せん仞じんの表へ、
較量筋力十年初。 較量かうりやう筋力きんりよく十じゆ年ねんの初はつを。
雖無窈窕驅前馬。 窈窕えうてう前馬ぜんばを驅かる無なしと雖いんど、
還有鷗夷後車。 還また鷗夷おうしやの後車こうしやに挂かくるあり。
莫笑吟詩淡生活。 莫なか莫なれ詩しを吟ぎんじて淡あはき生活せいかつなるを、

【字解】 【一】 塵容 孔稚圭こうしけいの北山移文ほくざんいぶんに、焚たき芟製しやんせい而裂を荷衣かゐ、抗かた塵容ちんよう而走を俗狀じやくじやう。芟製しやんせい・荷衣かゐは隱者いんしやの服ふく、抗かたは身みを擧あげること。 【二】 服轅駒 史記しき、魏ゑい其武安きぶあん傳でんに、漢武帝かんむい怒いか内史ないし(鄭當時ていとうじ)曰い、公こう平生へいせい數言すうげん魏其ゑい武安ぶあん長短ちやうたん今日けふ廷論ていろん、局促きやくじやく效けう轅下駒えんか。 【三】 野性 唐たうの姚合やうがふの詩しに、野性やせい多おほ疎情そじやう、幽棲ゆうせい更さら稱しやう情じやう。章應物ちやうおうぶつの詩しに、野性やせい本ほん難がた音いん。 【四】 縱壑魚 山移文しやんいぶんに、焚たき芟製しやんせい而裂を荷衣かゐ、抗かた塵容ちんよう而走を俗狀じやくじやう。芟製しやんせい・荷衣かゐは隱者いんしやの服ふく、抗かたは身みを擧あげること。 【二】 服轅駒 史記しき、魏ゑい其武安きぶあん傳でんに、漢武帝かんむい怒いか内史ないし(鄭當時ていとうじ)曰い、公こう平生へいせい數言すうげん魏其ゑい武安ぶあん長短ちやうたん今日けふ廷論ていろん、局促きやくじやく效けう轅下駒えんか。 【三】 野性 唐たうの姚合やうがふの詩しに、野性やせい多おほ疎情そじやう、幽棲ゆうせい更さら稱しやう情じやう。章應物ちやうおうぶつの詩しに、野性やせい本ほん難がた音いん。 【四】 縱壑魚

當令阿買爲君書 當に阿買をして君が書を爲らしむべし。

漢の王褒傳に、褒爲下聖主得賢臣一頌云翼乎如鴻毛遇順風沛乎如

巨魚縱三大壑。【五】巖巖千仞表。晉、王衍傳に、巖巖清峙、壁立千仞。【六】十年初。韓退之が贈鄭兵曹詩に、樽酒相逢十載前、君爲壯夫我少年、樽酒相逢十載後、我爲壯夫君白首。【七】窈窕驅前馬。王注にいふ、言官伎引馬也。窈窕は、詩、周南に、窈窕淑女。揚雄方言に、秦晉間、美狀爲窈。注にいふ、言三閑都也。美心爲窈。注にいふ、言幽靜也。史記、李斯傳に、住治窈窕趙女、不立於側。前馬は、儀禮に、有執燭前馬。國語に、句踐卑事夫差、親爲夫差前馬。【八】鴟夷挂後車。漢書の陳遵傳に、揚雄酒箴、鴟夷滑稽、腹大如壺、盡日盛酒、人復借酤、常爲國器、託於屬車。注にいふ、鴟夷、韋囊以盛酒、卽今鴟夷勝也。詩に、命彼後車。【九】淡生活。全唐詩話に、裴令公居守東洛、夜宴牛酺、公索聯句、元・白有得色、公爲破題、次至楊汝士曰、昔日蘭亭無豔質、此時金谷有高人、白知不能加、遽裂之曰、笙歌鼎沸勿作冷淡生活、元顥曰、樂天可謂能全其名者也。【一〇】阿買。韓退之の贈張祕書詩に、阿買不識字、頗知書二分、詩成使之寫、亦足張吾軍。注にいふ、或問黃魯直、阿買是退之何人、答云、退之姪也、必有據而云と。

【題義】此詩も前詩と同じく、熙寧八年三月の作。紀昀いふ、前四句自佳、後半無聊塞白耳と。明の朱存理の鐵網珊瑚に、此詩を載せ、首行云、軾謹次傳道先生游盧山高韻、詩末又有闕訖幸卽付去人送公弼郎中、禹功大博、明叔教授、各乞一首一賦上。

【詩意】北山移文に、塵容を抗げて俗狀に走るとあるが、塵俗に馳せ廻ることは、既に局促（器量の小さい貌）として轅の下（二歳の馬）である。駒の力は小さいから、車を引いても動かない。ぐづぐづした人に喩へたのである。元來の野性は、壑に縦つ魚のやうで、沛乎として留めることが出来ない。それで、壁立千仞（仞は周尺の八尺）の巖巖に出入する。そして我が筋力（體力）を十年の初

と較量する。樽酒相逢ふ十年の前、君は壯夫であり、我は少年であつた。樽酒相逢ふ十年の後、我は壯夫で、君は白髪である。今は窈窕たる美人（官伎をいふ）の前車を驅るといふことはないが、幸に酒を盛つた鴟夷韋囊の後車に挂くるあり。酒に事缺くこともない。昔、白樂天は裴令公の夜宴で、聯句を索められた時、笙歌鼎沸勿作此冷淡生活と言つたが、此頃、我の詩を吟じて淡い生活をなして居ることを笑つてはならない。當に阿買をして君が書を寫さしめようと思ふ。（阿買は韓退之の姪である。退之が張祕書に贈る詩に、阿買は字を識らざるも、頗る八分（字體の名）を寫するを知る。詩成つて之をして寫さしむるも、亦、吾軍を張るに足るとある。此詩の結末は此の故事に據つたものである。）

盧山五詠

盧山の五詠

盧敖洞

盧敖洞

上界足官府、飛昇亦何益。上界官府足り、飛昇亦何の益あらん、還在此山中、相逢不相識。還此の山中に在り、相逢うて相識らず。

【字解】【一】盧敖洞。東坡の自注に、圖經云、敖秦博士、避難此山、遂得道とある。【二】上界足官府。韓退之の酬盧給事詩に、天門九扇相當開、上界真人足官府。張説の詩に、上界幡花合、中天伎樂來。【三】飛昇亦何益。神仙傳に、彭祖問白石生曰、

何不_レ服_二升天之藥_一、答曰、天上多_三至尊_一、相奉更苦_二於人間_一耳。顧況_三東の五源_一、番陽仙人王遙_二琴子_一高言、下界功滿、方超_二上界_一、上界多_三官府_一、不_レ如_二地仙快活_一。【四】在此山中_一、唐、僧無本の詩に、只在_二此山中_一、雲深不_レ知_二處_一。【五】相逢不_レ相識_一、劉希夷の詩に、相逢不_レ相識_一、歸去夢_二青樓_一。李太白の通塘曲に、相逢不_レ相識_一、出沒纒_二通塘_一。

【題義】熙寧八年三月、東坡は盧山に遊び、盧敖洞・飲酒臺・聖燈巖・三泉・障日峰の諸勝を周覽して、作つたのが、此の五詠である。紀昀いふ、不_レ必定是盧洞詩、而借以託_レ意、語自可_レ喜と。本集の超然臺の記に、其東則盧山、秦人盧敖之所_二從遁_一也、山以_二盧敖_一得名云云とある。秦の博士盧敖の難を避けた所が盧敖洞である。

【詩意】天上界には官府が多くて、地上人間の快活なるに及ばない。故に下界の功が満ちて上界に超ゆるといふことは、必ずしも幸福とは言へない。上界に飛昇した所で、果して何の益があらうぞ。此の山中に在るも、雲深うして尋ねるに由なく、相逢うても、相識らないのである。

飲酒臺

飲酒臺

博士雅好飲。空山誰與娛。博士雅飲を好み、空山誰と與にか娛まん。

莫向驪山去。君王不喜儒。驪山に向つて去る莫れ、君王儒を喜ばず。

【字解】一、空山、杜子美が武侯廟の詩に、空山草木長。二、驪山、陝西、臨潼縣の東南に在る。又、麗戎山ともいふ。其の

陽は即ち蓋田山、周の幽王、山下に死し、秦の始皇、此に葬る。其の麓に温泉ありて、唐の明皇、屢_レ之に幸す。長安志に、驪戎來居_二此山_一、故名。【三】君王不_レ喜_二儒_一、漢、酈食其傳に、初見_二沛公_一、騎士曰、沛公不_レ喜_二儒_一。

【詩意】盧敖博士は、もと、酒を好まれるも、空山友なくして、誰と與に對酌して娛まうぞ。されど、驪山に向ひ去つてはならない、驪山は秦の始皇が墓所である。史記の秦始皇本紀に、侯生・盧生、相與に謀つて曰く、始皇の人と爲り、天性剛戾、専ら獄吏に任じて、未だ爲に仙藥を求むべからずと。乃ち亡げ去る。始皇大に怒り、御史をして悉く諸生を按問せしむ。諸生傳へて相告引して、乃ち自ら除く。禁を犯すもの四百六十餘人、皆、之を咸陽に阮すとある。一説に驪山は始皇が儒を阮した處、故に驪山に向つて去つてはならない。君王（始皇）は儒生を喜ばないからである。盧生は即ち盧敖である。（紀昀いふ、此首太直、反不_レ如_二前首之不_レ切_一と。）

【餘錄】史記に載する所、諸生を阮するは、之を咸陽に阮するのである。然るに歐陽率更類書（唐、歐陽詢、曾て率更令たり。）の瓜部中に、古文奇文を載せていふ、秦始皇密令_二人種_一瓜驪山、劘谷中溫處、瓜實成、使_二人上書_一曰、瓜多有_レ實、有_レ詔、下_二博士諸生_一說_レ之、人人各異、則皆使_二往視_一之、而爲伏機、諸儒生皆至、方相難不_レ決、因發_レ機、從_レ之填_レ之、以_レ土皆壓死。今、新豐溫湯の處、愍儒郷と號す。

聖燈巖

聖燈巖

石室有金丹。山神不知祕。
何必吐光芒。夜半驚童稚。

石室金丹あり、山神祕するを知らず。
何ぞ必ずしも光芒を吐かん、夜半童稚を驚かす。

【字解】(一) 石室 神仙傳に、廣成子居崆峒之山、石室之中。(二) 金丹 道士が金石を煉りて作れる長生不死の藥。抱朴子に黄金入レ火、百鍊不銷、埋之畢天不朽、是爲金丹。韓退之の詩に、金丹別後知傳得。(三) 光芒 史記、天官書に、填星其色黃光芒。杜子美の詩に、疊浪日光世。

【詩意】山中の石室に、不老不死の金丹があるも、山神は之を祕することを知らない。何ぞ必ずしもさらさらする光を吐かうぞ。夜中に、童稚を驚かすのである。王注にいふ、此本詠聖燈而詩人立新意、以爲丹之光芒爾と。紀昀いふ、有至人貴忘機之感と。

三泉

三泉

皎皎巖下泉。無人還自潔。
不用比三星。清光同一月。

皎皎巖下の泉、人の還自ら潔うするなし。
用ひず三星に比するを、清光一月に同じ。

【字解】(一) 皎皎 皓皓に同じ。白い貌。楚辭、漁父に、安能以皎皎之白蒙世俗之塵埃乎。(二) 三星 二十八宿中の東方七宿に屬する心星の一名。詩の唐風に、綢繆東薪、三星在レ天。王文譜いふ、此即參中之三星也。(三) 清光同一月 清光は、月の清き光。李太白の詩に、明月看欲墮、當窗懸清光。王注に、傳曰、明星之多、不如一月之光。

【詩意】巖下の泉は、皎皎として白い。安んぞ能く皎皎の白きを以て世俗の塵埃を蒙らうぞ。人のまた自ら潔うすることがない。三星は即ち參星で、東方に見はれる。併し、其の三星に比するを用ひない。明星多しと雖も、一月の光に及ばないからである。(二句は、藝文類聚に引く所の文子に見え、又、淮南子の説林篇にも見えて居る。)

障日峰

障日峰

長安自不遠。蜀客苦思歸。
莫教名障日。喚作小峨眉。

長安自ら遠からず、蜀客苦だ歸るを思ふ。
障日と名けしむる莫れ、喚んで小峨眉と作す。

【字解】(一) 障日峯 水經注に、密水有二源、西源出奕山、亦曰障日山、晏謨曰、山狀障日、是有此名。名勝志に、山在諸城縣東三十里、亦名障日嶺。(二) 長安自不遠 晉、明帝紀に、帝年數歲、元帝坐置膝上、因長安使來、問曰、汝謂日與長安孰遠、對曰、長安近、不聞人從日邊來、元帝異之、明日宴羣僚、又問之、對曰、日近、元帝失色曰、何乃異向者之言乎、對曰、舉頭見日不見長安、由是益奇之。李太白が登鳳凰臺詩に、總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁。(三) 思歸 古樂府に、石崇作思歸引。劉禹錫の荊門懷古の詩に、咸陽終日苦思歸。(四) 作小峨眉 東域の自注に、其狀類峨眉、但小爾と。峨眉山は四川眉縣の南百里に在り、漢の南安の地。

【詩意】晉の明帝がまだ五六歳の時分、父の元帝が或日、坐して膝の上に置いた。長安の使が来たか

ら、明帝に、日と長安と、どちらが遠いと謂ふかと問うた。對へて曰く、長安の方が近い、なせといふに、人の日邊から來るといふことを聞かないからである。翌日、羣僚を宴せし時にも、同じことを問ふと、今度は對へて曰く、日近しと。元帝は何ぞ昨日の言葉と異なるかと意外に思はる。對へて曰く、頭を擧げると、日を見るも、長安を見ないと。元帝はますます之を奇としたといふ話がある。長安は遠くはないが、蜀の客は故郷を懐かしく、思歸の情に堪へないであらう。此地は古の都城で、渭水を隔てて、秦の咸陽宮に對する。そして長安の名は漢に始まつた。密州の障日山は、山狀が日を障る所から、其の名を得たが、障日などと名けてはならない。喚んで小峨眉となす。(峨眉山は蜀の眉縣、東坡の故山の南にある。障日山の峨眉山に似たるに因つて、食客思歸の興を起す所以である。)

次韻章傳道喜雨

章傳道が雨を喜ぶに次韻す

去年夏旱秋不雨。去年夏旱し秋雨らず、
海畔居民飲鹹苦。海畔の居民鹹苦を飲む。
今年春暖欲生蠓。今年春暖に蠓を生せんと欲す、
地上戢戢多於土。地上戢戢土よりも多し。
預憂一旦開兩翅。預め憂ふ一旦兩翅を開き、

【字解】一鹹苦 鹽からく苦い。爾雅に、鹹、苦也と見ゆ。北史、房豹傳に、濱海水味多鹹苦、豹命鑿一井、遂得甘泉、遐邇以爲政化所一。致。二蠓 唐韻に、蠓、蝗子也。春秋、宣公十五年、冬、蝗生。三戢戢 杜子美の詩に、小魚脫漏不可

口吻如風那肯吐。口吻風の如く那ぞ肯て吐かん。
前時渡江入吳越。前時江を渡りて吳越に入り、
布陣橫空如項羽。陣を布き空に横はる項羽の如し。
農夫拱手但垂泣。農夫手を拱いて但垂泣、
人力區區固難禦。人力區區固より禦ぎ難し。
撲緣鬢尾困牛馬。鬢尾に撲緣し牛馬を困しむ、
啖齧衣服穿房戶。衣服を啖ひ齧み房戶を穿つ。
坐觀不救亦何心。坐觀して救はず亦何の心ぞ、
秉畀炎火傳自古。秉りて炎火に畀ふるは古より傳ふ。
荷鋤散掘誰敢後。鋤を荷ひて散掘す誰か敢て後れん。
得米濟飢還小補。米を得飢を濟ふ還小補。
常山山神信英烈。常山の山神は信に英烈、
搗駕雷公訶電母。雷公を搗駕して電母を訶す。
應憐郡守老且愚。應に憐むべし郡守老い且つ愚、

レ紀、牛死牛生猶戢戢。【四】渡江 入吳越云云 東坡の自注に、去歲錢塘見三飛蝗、自西北來、極可畏也。前漢書に、英布反、上自將擊布、布兵精甚、上望三布軍、置陳如項羽、軍、上惡之。【五】拱手 手を組みて何事もしない。後漢書の公孫述傳に、天水隴西、拱手自服。【六】區區 小さい貌。賈誼の過秦論に、秦以區區之地、致萬乘之權。【七】撲緣 莊子、人間世に、愛馬者、以管盛矢、以蜃盛溺、適有蚊蠅僕緣、而拊之不時、則缺銜毀首碎胸。僕緣は僕僕然として緣り聚まる意。【八】鬢尾 鬢は類篇に、髮亂。尾、一本に毛に作る。【九】啖齧 衣服 北史に、後秦有蝗、齧三草木皆盡、牛馬至相啖毛。【一〇】不救亦何心 唐、姚崇傳に、謂倪若水曰、今坐觀蝗食苗、忍而不

欲把瘡痕手摩撫。瘡痕を把つて手ら摩撫せんと欲す。

山中歸時風色變。山中歸る時風色變じ、

中路已覺商羊舞。中路已に覺ゆ商羊の舞ふを。

夜窗騷騷鬧松竹。夜窗騷騷松竹を鬧し、

朝哇泫泫流膏乳。朝哇泫泫膏乳を流す。

從來蝗旱必相資。從來蝗旱必ず相資る、

此事吾聞老農語。此事吾老農の語に聞く。

庶將積潤掃遺孽。庶はくは積潤を將て遺孽を掃ひ、

收拾豐歲還明主。豐歲を收拾して明主に還さん。

縣前已審八千斛。縣前已に審す八千斛、

率以一升完一畝。率ね一升を以て一畝を完うす。

更看蠶婦過初眠。更に看る蠶婦初眠を過ぐるを、

未用賀客來旁午。未だ用ひず賀客の來つて旁午するを。

先生筆力吾所畏。先生の筆力は吾の畏るる所。

救、因以無年、刺史其謂何。【一】

乘界炎火。詩、小雅に、去其螟螣

及其蠹賊、無害我田穡、田祖有神、

秉畀炎火。【二】荷鋤散掘。陶

徵君の詩に、帶月荷鋤歸。江文通の

擬陶詩に、雖有荷鋤倦、濁酒聊自

適。朝野僉載に、唐、開元四年、河

南北、蝗蝻爲災、敕遣使與州縣

驅逐、採得一石者、與石粟、一斗

者、粟亦如之、掘坑埋之。【三】

常山山神。水經注に、扶洪之水、出

西南常山。唐十道四蕃志に、密州常

山、齊時、祈雨、常應、因以爲名。

【四】擣駕雷公。詞電母。唐の唐

元度の九經字様に、擣磨同通作揮。

王充論衡に、畫雷公左手引連鼓

右手推之。續仙傳に、東王父與玉

女投壺、有三不入者、天爲之笑、則

電。明の都印の三餘齋筆に、俗呼雷

電爲雷公電母、亦有所本也。宋史

蹴踏鮑謝跨徐庾。鮑謝を蹴踏して徐庾に跨る。

偶然談笑得佳篇。偶然談笑佳篇を得、

便恐流傳成樂府。便ち恐る流傳樂府を成すを。

陋邦一雨何足道。陋邦の一雨ぞ道ふに足らん、

吾君盛德九州普。吾君の盛徳は九州に普し。

中和樂職幾時作。中和樂職幾時に作る、

試向諸生選何武。試みに諸生に向つて何武を選ぶ。

儀衛志に、雷公電母族。【五】把瘡痕。瘡痕。漢、功臣表に、瘡痕未平。後漢、王郎傳に、元元創痍已過半矣。韓退之の詩に、摩手拊之。【六】商羊舞。家語に、齊有二足之鳥、舒翅而跳、齊侯使使問孔子、孔子曰、此鳥名商羊、昔、童兒謠曰、天將大雨、商羊鼓舞。【七】騷騷。風の動く貌。張衡の思文賦に、寒風凄其永至兮、拂雲岫之騷騷。【八】

法。露の垂れる貌。謝惠連の詩に、法法露盈條。【九】蝗旱相資。五行志に、旱則魚螺變爲蟲蝗。埤雅に、春遺魚子如粟、埋於泥中、明年水及故岸、則化而爲魚、如遇旱乾、水縮不及故岸、則其子久聞、爲日所暴、乃生飛蝗。【一〇】老農。論語、子路篇に、吾不如此老農。【一一】積潤。唐、常袞の賀雪の表に、積潤溼通。【一二】遺孽。徐陵の書に、殲厥兇渠、曾孽遺孽。【一三】收拾。散つたものを一處に集める。歐陽修が詩に、殘章與斷藁、草草各收拾。【一四】已審八千斛。東坡の自注にいふ、今春及今得蝗子、八千餘斛と。【一五】蠶婦過初眠。東坡の自注に、蠶一眠、則蝗不復生矣。【一六】旁午。往來の繁きをいふ、漢の霍光傳に、昌邑王受蠶以來二十七日、使者旁午。顏師古いふ、一縱一橫爲旁午と。【一七】筆力。劉孝綽の詩に、奇文爭筆力。【一八】蹴踏鮑謝。跨。徐庾。庾信と前後詩文を以て南朝に鳴る。【一九】流傳。世に布きわたること。郭受の詩に、新詩海內流傳遍。宋の鮑照、齊の謝朓、徐陵、庾信と前後詩文を以て南朝に鳴る。【二〇】樂府。漢詩の一體。漢書、禮樂志に、至武帝、定郊祀之禮、乃立樂府、采詩夜誦、有趙、代、秦、楚之謳。樂府詩集の序に、漢惠帝二年、使樂府令備籥管、更房中樂、武帝定禮、乃立樂府。【二一】中和樂職。漢、王褒傳に、益州刺史王襄、欲宣風化於衆庶、

聞王褒有三俊材、使頌漢德、作中和樂職宣布詩、選好事者、令依鹿鳴之聲、習而歌之、時、汜鄉侯何武爲童子、選在歌中、久之、武等學長安、歌大學、下轉而上聞、宣帝召見武等觀之、皆賜帛、謂曰、此盛德之事、吾何足以當之。

【題義】此詩は熙寧八年四月の作で、東坡の自注に、禱常山而得とある。四月初吉、東坡は齋居蔬食して、常山に禱り、祭常山の文を作つた。禱つて歸り、三日の後、雨が十分降つたので、章傳道は喜雨の詩を作つた。之に次韻したのが此詩である。紀昀いふ、只說旱蝗相資之苦、而雨之可喜自見、此背面烘託之法と。

【詩意】去年の夏は旱がつづき、秋も雨が降らないので、海邊の居民は、鹽からい海水ばかりを飲料として居つた。今年又、春が暖かい爲に、蝗子が生じようとして、地上に戢戢とあつまること、土よりも多い。心配なのは、此の蝗子が一旦二つの翅を開いた時のことで、口吻は風を吹かうとする如くなるも、那ぞ肯て口中の氣を吐かうぞ。其の作物を害することも、想ひやられる。去年、錢塘縣に飛蝗を見たが、西北から來つて、極めて畏るべき有様であつた。昔、漢の英布が反いた時、高祖は自ら將として之を撃つた。布の兵は精銳で、其の陣を置くこと、項羽の如くであつたといふが、今蝗子の陣を置く工合は、恰も之に類似して居る。農夫も、手を組んで、何事もなし得ない。但垂泣するのみである。思へば人力は極めて小さく、固より飛蝗の害を禦ぐことが出來ない。かくて飛蝗は牛や馬の鬚尾に、僕僕然として縁り聚まつて、頻に之を困しめる。又、衣服を啖つたり齧んだり、房や戸にも穴を穿つたりする。今、坐して蝗が苗を食ふのを觀、忍んで救はなければ、因つて不作凶年となる。刺史

其れ之を何とか謂はうぞ。併し田祖、神農氏の神靈によつて、此の悪い蟲も自然になくなる。田地の傍で火を焼けば、自ら蝗子なども飛び込んで死するやうになる。火を好むは、蟲の天性だが、又、神靈が然らしめたのである。昔、河の南北に蝗蝻が災をなしたので、州縣に救し、もし、驅逐して蝗一石を探り得たるものには、粟一石を、蝗一斗を得たものには、粟一斗を與へることにした。そして坑を掘つて之を埋めたといふことがあるが、鋤を荷つて散掘するに、誰か敢て後れよう。忽ち蝗害が少くなつた。又、米を得て、飢を濟ふのであるから、一面、民生にも小補があつた。ここに密州常山の山神は、雨を祈りて、常に應ずるより、常山と名けたさうである。常山の山神は、まことに英烈の神様で、雷公を揮駕し、電母を訶る。雷公は力士の如く、左手に連鼓を引いて、右手に之を推つて居る。電母は、火を吐いて鞭を施す。老い且つ愚な郡守が瘡痍を把つて、手から摩撫しようとして居るのも、まさに憐むべきである。山中から歸る時、風模様も變つて、途中で既に雨が降り出した。夜の窗も風の動く音がして松や竹を鬧して居る。朝の畦(田圃)には露が垂れて、膏乳を流したやうである。從來、旱の時には蝗があるが、蝗と旱とは附物であることは、經驗を積んだ老農から聞いて居る。どうか積雨の潤ひで、蝗子の遺孽をば掃ひ除き、豊年を收拾して明主に還さうと思ふ。縣前已に八千斛の蝗を害にした。(害は穴藏である)率ね一升を以て一畝を完うするのである。更に蠶婦の初眠を過ぎるを見る。蠶が一眠すると、蝗は復、生じない。今は、賀客の往來織るが如きを用ひない。佳篇を見るが何よりの事である。先生の筆力は、吾の畏れる所で、かの鮑照や謝朓を蹴たふし踏みたふし、

徐陵も庾信も、直に凌駕する。(鮑照・謝朓・徐陵・庾信、何れも前後詩文を以て南朝に鳴つた人である。)今度、圖らずも談笑の間に、かかる佳篇を得た。便ち世の中に流傳して遂に樂府を成すであらう。陋邦の一雨などは、何ぞ道ふに足らん。吾が君の盛徳は九州に普く行きたつて居る。所謂中和樂職宣布の詩は、何れの時に出來たものであらう。即ち王褒が作つたもので、何武は年十四五の時分、成都の楊覆衆等と共に、習うて之を歌うた。宣帝は武等を宣室に召して、此れ盛徳の事、吾、何ぞ以て之に當るに足らんと仰せられた。(此詩の結句に、試向諸生選何武とあるのは、此の故事に據つたのである。)

【餘録】熙寧八年、旱と蝗と相繼ぐ、東坡は四月初吉、齋居蔬食して、常山に禱り、祭常山之文を作つた。本集、祭常山之文に、惟吏與神、其職惟通、殄民廢職、其咎惟均、哀我邦人、遭此凶旱、流殍之餘、其命如髮、而飛蝗流毒、遺種布野、使其變躍飛騰、則桑柘麥禾、舉罹其裁、民其罔有子遺、吏將獲罪、神且乏祀、茲用慄慄危懼、謹以四月初吉、齋居蔬食、至於閏月、若時雨沾洽、蝗不能生、當與吏民、躬執牲幣、以答神休、嗚呼我州之望、不在神乎、克有常徳、以名茲山、若曰歲之豊凶在天、非神之所得、專吏將亦曰、民之休戚在朝廷、我何知焉、則誰任其責矣、上帝與吾君、愛民之心一也、凡吏之請於朝者、既不致不盡、則神之可謂以謁於帝者、宜無所不爲、尙饗。

謝郡人田賀二生獻花

郡人田賀二生花を獻するを謝す

城裏田員外、城西賀秀才。

城裏田員外、城西賀秀才。

不愁家四壁、自有錦千堆。

愁へず家四壁なるを、自ら錦千堆あり。

珍重尤奇品、艱難最後開。

珍重尤も奇品、艱難最も後に開く。

芳心困落日、薄豔戰輕雷。

芳心落日に困み、薄豔輕雷を戦はす。

老守尤多病、壯懷先已灰。

老守尤も多病、壯懷先づ已に灰。

殷勤此粲者、攀折爲誰哉。

殷勤此の粲たるもの、攀ち折る誰が爲にするや。

玉腕揜紅袖、金樽瀉白醅。

玉腕紅袖を揜し、金樽白醅を瀉ぐ。

何當鑷霜鬢、強插滿頭回。

何か當に霜鬢を鑷し、強ひて滿頭に插みて回るべき。

【字解】(一)員外、唐百官志に、太宗省内外官、定制爲七百三十員、吾以此待天下賢材、足矣、然是時已有員外郎置、

(二)秀才、漢、賈誼傳に、河南守聞其秀才、召置門下。(三)四壁、漢、司馬相如傳に、家徒四壁立。(四)錦千堆、謝庭皓、詞

賦を以て名を著はす、時に錦繡堆と號す。楊巨源が看花詩に、一林堆錦映千燈。(五)珍重、大切にす。張羽の詩に、珍重函封

寄千里。又、人に身を大切にすや、勸める尺牘上の用語。梁書、王僧孺の傳に、握手戀戀、難別珍重。(六)奇品、珍品といふに

同じ。宋、周密の癸辛雜識に、彩畫本草一部、極奇、此書中奇品也。(七)最後開、古詩に、最好花常最後開。(八)芳心、花のかんばし

い心。虞美人詞に、芳心寂寞寄寒枝。(九)壯懷已灰、韓退之の詩に、風雲入壯懷、泉石別幽耳。莊子、齊物論に、而心固可使

如死灰一乎。(一〇)殷勤、懇懇と同じ。鄭重の意。李太白の詩に、惜別空感勲。(一一)此粲者、詩、國風に、三英粲兮。又、見此

榮者。國語に、歌三爲羣、人三爲衆、女三爲衆。東坡の自注に、賀獻魏花三朶とある。魏花は、魏家の紫牡丹をいふ。【三】玉腕指紅袖。王注に、小説載詩、吹火紅唇動、指紅玉腕斜。東坡の詩に、玉腕半指雲碧袖。指は腕をまくること。【四】全樽瀉白醅。陳子昂の詩に、銀燭吐青煙、金樽對綺筵。陸龜蒙の詩に、村餉白醅紅。醅は酒の漉さざるもの。【五】霜鬢。杜牧之の醉題に、金鑷洗霜鬢、鑷は毛ぬきにて毛髪を抜き去ること。霜鬢は、裴度が詩に、灰心綠忍事、霜鬢爲論兵。【六】插滿頭。杜牧之の九日詩に、菊花須插滿頭歸。

【題義】郡人田生。賀生が牡丹を獻じたので、謝を道うたのである。紀昀いふ、本色語、極雅健、此老境不易效、無其火候、(火候は學力の意)而效之、便入香山門戶と。

【詩意】城中の田員外も、城西の賀秀才も、住み家は徒らに四壁の立てるが如くであつて、何の家財もなければ、設備もない。併し自ら文章が錦の千堆のやうである。昔、謝庭皓は詩賦を以て其の名を著し、時に錦繡堆と號したが、今、二生も之に類して居る。殊に珍しい牡丹の花をば、珍重に函封して、遠く寄せられたことを謝する。一種の天香が分外に奇であつて、而も色色艱難を経て、花が常に最後に開く所が好い。ただ芳心が落日に苦しみ、薄い花の豔色も軽い雷と戦つて居る。これは東坡の自注に、昨日雷雨とあるを言つたのであらう。老いた太守の我は、尤も多病で、當年の壯懷も今は死灰の如くになつてしまつた。賀秀才から鄭重に贈られた此の榮たる紫牡丹の三朶は、誰が爲に攀ち折つたか。美しい腕は、紅の袖をまくつて、金樽の白醅(にこり酒)を瀉ぐ。何時か當に霜髪を抜き去つて強ひて滿頭に挿んで回るべきであらう。

惜花

花を惜しむ

吉祥寺中錦千堆。吉祥寺中錦千堆、
 前年賞花眞盛哉。前年花を賞す眞に盛なるかな。
 道人勸我清明來。道人我に勸めて清明に來らしむ、
 腰鼓百面如春雷。腰鼓百面春雷の如し。
 打徹涼州花自開。涼州を打徹すれば花自ら開く、
 沙河塘上戴花回。沙河塘上花を戴いて回る。
 醉倒不覺吳兒哈。醉倒して覺えず吳兒の哈ふことを、
 豈知如今雙鬢摧。豈知らんや如今雙鬢摧け、
 城西古寺沒蒿萊。城西の古寺蒿萊に没するを。
 有僧閉門手自栽。僧あり門を閉ちて手自ら栽う、
 千枝萬葉巧剪裁。千枝萬葉巧に剪裁す。
 就中一叢何所似。中に就いて一叢何の似たる所ぞ、
 馬瑙盤盛金縷杯。馬瑙盤に金縷杯を盛る。

古今體詩 惜

花

【字解】(一)惜花。王文譜いふ、惜牡丹也。(二)錦千堆。東坡自注に、錢塘花最盛處。(三)道人。智度論に、得道者、名爲道人。餘出家者、未得道者、亦名道人。(四)清明。春分の次の氣節で寒食の節の後、兩日を清明の節といふ。(五)腰鼓。文獻通考に、腰鼓之制、大者瓦、小者木、皆、廣首織腹。(六)涼州。涼州破は、樂曲の名。晉の末西涼の人が中國に傳へた舊樂。雜へるに羌胡の聲を以てす。其の歌曲を涼州といふ。(七)花自開。南京羯鼓錄に、明皇嘗遇三月初、詣且、宿雨初晴、景色明媚、小殿亭內、柳李將吐、歎曰、對此景物、豈可不與他判斷之乎、遣高力士、取羯鼓、上臨軒縱擊一曲、名三春光好、回顧柳杏皆拆、上指笑、

而我食菜方清齋。而我我菜食つて方に清齋す、
 對花不飲花應猜。花に對して飲まず花應に猜ふべし。
 夜來雨雹如李梅。夜來雹を雨らす李梅の如し、
 紅殘綠暗吁可哀。紅は殘し綠は暗く吁哀むべし。

謂嬾嬌曰、此一事不喚我作三天公可乎。【八】醉倒岑參の詩に、斗酒相逢須醉倒。白樂天が洛城花の詩に、醉倒亦何妨。【九】雙鬢摧王維の詩に、獨坐悲雙鬢、空堂欲二更。蘇子由の詩に、相逢十年驚我

老、雙鬢蕭蕭似秋草。【一〇】蒿萊。吳師道の詩に、不妨歸臥守蒿萊。【一一】剪裁。徐凝の詩に、珠藥瓊花開剪裁。【一二】馬瑤盤。唐、裴行儉、平都支遮旬、獲三馬腦盤廣二尺、文采燦然。杜子美の詩に、內府殷紅馬腦盤。【一三】清齋。支遁の詩に、令月華清齋。王文誥いふ、公時以旱蝗齋素見紀元錄。【一四】雨雹如李梅。春秋に、天雨雹、同じく僖公三十三年に、李梅實。風俗通に、漢文帝、後元年に、雨雹如桃李深三尺。【一五】紅殘綠暗。齊己の詩に、紅殘綠暗海棠枝。韓琮の詩に、綠暗紅稀出鳳城。

【題義】錢塘の吉祥寺に、牡丹花を惜んだのである。紀昀いふ、信手寫出、有曲折自如之妙也。

【詩意】吉祥寺の後は、牡丹が地上を照らして、恰も錦綉段を開いたやうである。前年、ここに花を賞した時は、真に盛であつた。出家の道人は、我に清明の佳節に来るやうにと勧めた。花見の時は腰鼓を百面も揃へて、春雷の如くに涼州破の曲を打ち徹したので、牡丹の花も、自ら開いたのである。それに就いて思ひ浮ぶのは、唐の玄宗皇帝が、二月初、宿雨が初めて晴れ、柳や杏が將に開かうとしたとき、命じて羯鼓を取り來らしめ、軒に臨んで、春光好といふ一曲を縦撃せられた。曲が終つて、柳杏を回顧するに、皆、折いて居たので、帝は指し笑ひながら、嬾嬌に、此の事は我を喚んで天公としないで可からうかと仰せられたさうである。吉祥寺の花見も之に似て居る。かくて沙河の塘の

上、牡丹を頭に戴いて回り、酔ひ倒れて、吳兒の哈ふことをも覺えなかつた。其の當時は今日かく雙鬢が枯れ摧けて、城西の古寺も蒿萊に埋没するやうにならうとは思はなかつたであらう。此寺の僧は、門を閉ぢて、手自ら牡丹を栽えた。千枝萬葉、巧に美を鬪はして居る。其中でも、一叢は何に似たる、馬瑤の盤に、金縷の杯を盛つたやうである。我は菜を食つて、方に精進中であるから、花に對しても酒を飲まない。花の方でも定めし我を不審に思つて居ることであらう。夜來、雹が降つた。大さは李梅のやうである。雹の爲に牡丹花の紅の色も殘はれ、綠の色も暗くなつた。さても哀しむべきである。(東坡の自注に、錢塘吉祥寺花爲第一、壬子清明、賞會最盛、金盤綵籃以獻於座者、五十三人、夜歸、沙河塘上、觀者如山、爾後、無復繼也、今年諸家園圃、花亦極盛、而龍興僧房一叢尤奇、但衰病牢落、自無以發興耳、昨日雨雹、知此花之存者、有幾、可爲太息也とある。)

和頓教授見寄用除夜韻 頓教授が寄せらるるに和し、除夜の韻を用ふ

我笑陶淵明種秫二頃半。我は笑ふ陶淵明、秫を種うる二頃半。
 婦言既不用、還有責子歎。婦言既に用ひず、還子を責むる歎あるを。
 無絃則無琴、何必勞撫玩。絃なければ則ち琴なし、何を必ずしも撫玩を勞せん。
 我笑劉伯倫、醉髮蓬茸散。我は笑ふ劉伯倫、醉髮蓬茸散するを。

二豪苦不納。獨以錫自伴。
 既死何用埋。此身同夜旦。
 孰云二子賢。自結兩重案。
 笑人還自笑。出口談治亂。
 一生溷塵垢。晚以道自盥。
 無成空得嬾。坐此百事緩。
 仄聞頓夫子。講道出新貫。
 豈無一尺書。恐不記庸懦。
 陋邦貧且病。數米銖稱炭。
 慚愧章先生。十日坐空館。
 袖中出子詩。貪讀酒屢暖。
 狂言各須慎。勿使輸薪粢。

二豪は納れられざるを苦しみ、獨り錫を以て自ら伴ふ。既に死す何ぞ埋むるを用ゐん、此身は夜旦に同じ。孰か云ふ二子賢なりと、自ら兩重の案を結ぶ。人を笑ひ還自ら笑ひ、口を出して治亂を談す。一生塵垢に溷れ、晚に道を以て自ら盥ふ。成る無くして空しく嬾を得、此の百事の緩に坐す。仄に聞く頓夫子、道を講じて新貫を出す。豈一尺の書なからんや、恐らくは庸懦を記さざらん。陋邦貧しくして且つ病み、米を數へて銖もて炭を稱る。慚愧す章先生、十日空館に坐し、袖中より子が詩を出し、貪讀して酒屢暖むるを。狂言各、須らく慎むべし、薪粢を輸さしむるなかれ。

【字解】(一)頓教授 名は起、鄆州の人。子由と同じく洛中に赴いたことが、樂城集に見えて居る。(二)種林二頃半 陶淵明が公田の二頃五十畝に秫を種ふ、五十畝に秠を種ふたことは、前に出づ。晉書、陶潛傳に、爲彭澤令、公田悉令吏種秫。林稻。

貴子歎 陶淵明が貴子詩に、雖有五男兒、總不好紙筆。【無絃琴】絃は琴瑟の絲。梁、昭明太子の陶靖節傳に、淵明不解音律、而蓄無絃琴一張。李太白の詩に、陶令今日醉、不知五柳春、素琴本無絃、漉酒用葛巾。【劉伯倫】晉の劉伶、字は伯倫、性尤も酒を嗜む、嘗て酒德頌一篇を著す。嘗て鹿車に乘じ、一壺酒を携へ、人をして錫を荷ひ之に隨はしめ、謂つて曰く、死せば便ち我を埋めよと。【醉髮蓬散】晉書、阮孚傳に、蓬髮飲酒。【二豪苦不納】酒德頌に、俯觀萬物擾擾焉、如三江漢之載浮萍。二豪侍側焉、如三蠛蠓之與三螟蛉。二豪は貴介公子と摯紳處士である。餘録を見よ。【六】同二夜旦 夜旦は晝夜をいふ。莊子の大宗師篇に、死生命也、其有二夜旦之常天也。【七】結二兩重案 傳燈錄に、北禪和尚問僧曰、什麼院、曰資福、師曰、福將何資、曰兩重公案。又、同書に、據歎結案、又兩重公案、皆禪宗語、如此類甚多、宗門公案、有二千七百。公案は具には話頭公案といふ。禪家に於て、悟道上の問答を公衆に開示するを公府の案牘に喩ふ。【八】溷塵垢 莊子、達生篇に、彷彿乎塵垢之外。【九】出新貫 韓退之の會合聯句に、析言多新貫、據抱無昔滯。【一〇】一尺書 說文に、牘、書版也、長一尺爲率。杜子美が逢劉主簿詩に、分手開元末、連年絕尺書。史記、匈奴傳に、漢遣單于書、牘以三尺一寸。【一一】數米云云 莊子の庚桑楚篇に、簡髮而櫛、數米而炊、切切乎又何足以濟世哉。【一二】稱炭 朝野僉載に、章莊稱炭而鑿、多少一籌必覺之。【一三】坐空館 潘岳が懷舊の賦に、空館闕其無人。【一四】酒屢暖 晉、孫盛の傳に、嘗詣殷浩談論、食冷而復暖者數四。【一五】狂言 杜牧之の詩に、忽發狂言驚滿坐。【一六】輸薪粢 漢、劉輔傳に、成帝欲立趙婕妤爲后、輔上書、坐繫共工獄、論爲鬼薪。漢書、刑法志に、罪人、獄已決定、爲城旦舂、滿三歲爲鬼薪、白粢。惠帝紀、應劭の注に、取薪給宗廟爲鬼薪、坐擇米使正白爲白粢、皆、三歲刑也。

【通義】頓起教授の寄せられた詩に和したのである。東坡が徐州に移つた時、頓起は來つて考官となる。唱和の詩もある。胸紀いふ、入手恣逸之至、惜後幅有瑕耳と。

【詩意】我は笑ふ陶淵明、淵明は彭澤の縣令であつたとき、公田には悉く秫を種ゑしめた。妻子は固く稷を種ゑるやうにと請うたから、淵明は乃ち公田の二百五十畝に秫を種ゑる五十畝に稷を種ゑたと

古今體詩 和頓教授見寄用除夜韻

いふことである。(林は黏粟、以て酒を作る。)淵明は既に婦言を用ひなく、又、詩を作つて、其の子を責めていふのに、我は白髪が兩鬢に被つて、老い衰へたので、わが子の生立を望むことが深い。我に五男兒あるが、何れも學問を好まない。是れ天運で、如何ともし難い。又、すべきやうもない。暫く杯中の酒を進めて、自ら楽しんで、憂を忘れやうと。かくて、陶淵明は、日に酒に酔うて、門前五株の柳に、春が来たことをも知らずに居つた。素琴一張、絃もかけず、徽をも具へない。毎に撫でて、之を和し、但、琴中の趣を得ば足る、何ぞ絃上の聲を勞せんやと言つた。併し、絃がなければ、琴もない。何ぞ必ずしも撫玩する勞を取らうぞ。又、我は笑ふ劉伯倫、終日、酒に酔ひ、醉髪が蓬の如く茅の如く、ばらばらに散つて居る。酒徳頌、所謂二豪も側に侍して、納れられないで苦しんで居る。かくて鹿車に乗り、一壺の酒を携へ、人をして鍤を荷ひて、之に隨はしめ、我もし死なば、便ち埋めよと言つたさうである。併し、既に死んでしまへば、埋めることも、要しない筈である。元來人の死生は、天の命する所で、猶ほ晝夜の別のあるやうなものである。淵明も伯倫も、之を思はないやうである。孰かいつ、陶淵明、劉伯倫の二子は賢であると。禪家の悟道を公開して、人を笑ひ、又、自らを笑つて居る。(紀昀いふ、出落輕捷と。)そして口を出して、治亂を談じ、一生、世の塵垢に溷されて居る。晩年には、道を以て自ら盟つたが、一事の成るなく、空しく癩困(なまけつかれる)を得て、此の百事の緩慢に居る有様である。承はれば頓起先生には斯道を講じて、新しい見解が多いさうである。就いては一尺の書牘を戴けますまいか、戴いたにしても、恐くは庸儒のことをば記さないでせう。

私の邦は貧乏である上に、民も疲れきつて居る。米を數へて炊ぎ、鉄を以て炭を稱つて居る。顧みれば章先生(章傳道)に對して、まことに慚愧に堪へない。章先生は十日間も空館に坐つて、袖中から子が詩を取り出し、之を食讀して、之を肴に酒を屢々暖めた。一體、狂言は人を驚かすものであるから、各、須らく慎むべきことと思ふ。漢の劉輔は、成帝が趙婕好を立てて后としようとした時、腐木は以て柱となすべからず、卑人は以て主となすべからずと言つたので秘獄に繋がれた。幸に辛慶忌等の救護の上書があつたので、死を減じ、論じて鬼薪と爲した。繰り返していふが、言語を慎み、鬼薪・白粲などの刑を輸してはならない。(紀昀いふ、二句、太露太直と。)

【餘録】陶淵明の責子詩に、白髮被兩鬢、肌膚不復實、雖有五男兒、總不好紙筆、阿舒已二八、懶惰故無匹、阿宣行志學、而不愛文術、雍、端年十三、不識二六與七、通子垂九齡、但覓三梨與栗、天運苟如此、且進三盃中物。淵明に子五人ある、長を舒といひ、次を宣といひ、三を雍といひ、四を端といひ、五を通といふ。皆、小名である。此詩は我子の俊傑でないことを責め、之を天運に歸し自ら杯中の酒を飲んで憂悶を釋いたのである。詩人玉屑に、黄山谷曰、觀淵明此詩、想見其人、慈祥戲謔可觀也、俗人便謂、淵明諸子、皆不肖、而淵明愁歎見於詩耳、所謂癡人前、不得說夢也云云。劉伯倫の酒徳の頌に、有大人先生、伯倫自ら稱す以天地爲一朝、萬期爲須臾、日月爲扇、八荒爲庭衢、行無轍跡、居無室廬、幕天席地、縱意所如、止則操卮執觚、動則挈榼提壺、唯酒是務、焉知其餘、有貴介公子、搢紳處士、聞吾風聲、議其所以、乃奮袂攘衿、怒目切齒、陳說禮

法、見非蜂起、先生於_レ是、方捧_レ盃承_レ槽、銜_レ杯漱_レ醪、奮_レ髯踞_レ蹠、枕_レ麴藉_レ糟、無_レ思無_レ慮、其樂陶陶、兀然而醉、豁爾而醒、靜聽不聞_レ雷霆之聲、熟視不_レ覩_レ泰山之形、不_レ覺_レ寒暑之切_レ肌、利慾之感_レ情、俯觀_レ萬物擾擾_レ焉、如_レ江漢之載_レ浮萍、二豪侍_レ側焉、如_レ蜾蠃之與_レ螟蛉。

和子由四首

子由に和す 四首

韓太祝送遊太山

韓太祝太山に遊ぶを送る

偶作_二郊原十日遊_一

偶_二郊原十日の遊を作す_一

未應_二回首厭籠囚_一

未_二だ首を回して籠囚を厭ふべからず_一

但教_二塵土驅馳足_一

但_二塵土に驅馳して足らしめ_一

終把_二雲山爛漫酬_一

終_二に雲山を把つて爛漫酬ゆ_一

聞道逢_二春思濯錦_一

聞道らく春に逢うて濯錦を思ひ、

更須_二到處覓菟裘_一

更_二に須らく到處に菟裘を覓むべし_一

恨君不_二上東封頂_一

恨_二む君が東封の頂に上つて、

夜看_二金輪出九幽_一

夜_二金輪の九幽を出づるを看ざるを_一

【字解】 太祝 職官分紀に、

太常寺官屬有_二太祝_一。 【二】 郊原

郊野平原と熟す。祖詠の詩に、慙意

在_二郊原_一。 【三】 塵土 李正封が詩

に、千門尙烟火、九陌無_二塵土_一。 【四】

把_二雲山_一 元次山の巧説に、鄉無_二君

子、則友_二雲山_一。 【五】 爛漫酬 白樂

天の枕上作詩に、頼是從前爛漫游。

爛漫は、物の満ちて溢れんとするを

いふ。莊子、在宥篇に、大徳不_レ同、

而性命爛漫矣など其の用例である。

【六】 濯錦 蜀記に、錦城南有_二濯錦江_一。成都古今記に、濯錦江、自_二州西北二分派、東流至_二州北街、過入_二文富坊、東流至_二膠坊尾、又向_レ南流、於_二興聖觀、直東南至_二大慈寺前、有_二濯錦江橋是也_一。 【七】 覓菟裘 菟裘は魯の邑、左傳、隱公十一年に、公曰、使_レ營菟裘、吾將_レ老焉。 【八】 上東封頂 史記の封禪書に、武帝封禪上_二太山、乃令_二三人上_レ石立_二之太山巔_一。 【九】 金輪 太山記に、太山東南峯名_二日觀、鷄一鳴見_二日出_一。漢官儀に、日觀、鷄一鳴時、見_二日出_一、長三丈許。劉禹錫の詩に、羅浮山、赤波千萬里、湧出黃金輪。 【一〇】 九幽 黃庭經に、九幽日月洞空無。

【題義】 子由が樂城集に、韓宗弼太祝送_レ遊_二太山_一詩を次韻した詩がある。詩にいふ、羨君官局最優游、笑我區區學問囚、今日登臨成_二獨往、終年勤苦粗相酬、春深綠野初開_レ繡、雲解青山半脫_レ裘、回首紅塵讀書處、煮_レ茶留_レ客小亭幽と。子由は時に齊州掌書記であつた。

【詩意】 たまたま郊野平原に出遊を試みられたままで、未だ首を回して籠囚を厭ふなどといふ自由の身にはならない。ただ世の塵土に在つて驅馳することを思ふままにされ、終に雲山を友として、十分の勝遊が出来たのであらう。聞けば、春に逢つて錦城の濯錦江の美觀を思ひ出され、更に到る處に、菟裘の地を覓められるといふことである。菟裘は、魯の地である。昔、魯の隱公が、いつまでも攝政して居たので、羽父といふもの、これは國を桓公に譲る意志がないものと推量し、或日のこと、隱公に申し上げるやう、私は桓公を亡きものに致さうと存すると。隱公曰く、我の今日まで我が身をば退かなかつたのは、桓公の年がまだ少い爲である。追ては此の魯國を桓公に譲り、我は菟裘邑に別に隱居所を建築させ、老後をここに送らうと欲すると。これが菟裘の典故である。さて、太山に遊ぶ君が其の東封の頂である日觀に上つて、夜、金輪の九幽から出て來る壯觀を看ないのが残念である。

送春

春を送る

夢裏青春可得追。

夢裏青春追ふことを得べし、

欲將詩句絆餘暉。

詩句を將て餘暉を絆がんと欲す。

酒闌病客惟思睡。

酒闌にして病客惟睡らんことを思ひ、

蜜熟黃蜂亦懶飛。

蜜熟して黃蜂亦飛ぶに懶し。

芍藥櫻桃俱掃地。

芍藥櫻桃俱に地を掃ひ、

鬢絲禪榻兩忘機。

鬢絲禪榻兩ながら機を忘る。

憑君借取法界觀。

君に憑つて法界觀を借取し、

一洗人間萬事非。

人間萬事の非を一洗せん。

【四】惟思睡 歐陽文忠公の和梅公儀二詩に、寒侵病骨惟思睡、花落春愁未解醒。

【五】蜜熟黃蜂亦懶飛 白樂天禽蟲十

二章に、蠶老繭成不庇身、蜂肌蜜熟屬他人。

【六】鬢絲禪榻 唐闕史に、杜牧之、自以三年漸遲暮、常追賦感舊二詩、一詩、即鬢絲

禪榻者。杜牧之が題禪院二詩に、就船一棹百分空、十歲青春不負公、今日鬢絲禪榻畔、茶烟輕颺落花風。禪榻は禪牀に同じ、坐禪を

組むこしかけ。【七】忘機 世事を忘れる。李太白の詩に、我醉君亦樂、陶然共忘機。【八】法界觀 華嚴經法界觀、清涼澄觀禪

師、述以明華嚴品中法界大旨。【九】人間萬事非 杜子美の送韓十四二詩に、歎息人間萬事非。

【詩意】春を青陽といひ、芳春といひ、青春・陽春といひ、三春・九春といふ。春は生意が充ち満ち

て居る。九十春光好く、紅塵紫陌の中といふ詩は、此間の消息を傳へて居る。夢裡の青春は、追ふこと

が出来来るから、詩句を借りて斜陽を寫さうと思ふ。春の酒宴が酣になると、耳が熱する。併し、病

客は惟、睡らうとする。蠶が老いて、繭が成る。而も繭は蠶の身を庇はない。蜂は飢ゑて、蜜は熟す

る。而も他人の口に入る。かくて黃蜂も亦、飛ぶに懶いのである。春の暮れ行くを惜めども、春は留

まらない。芍藥も、櫻も、桃の花も、俱に散つて地を掃つた。まことに、鬢絲禪榻の感がある。若い

時分、嬉遊に耽つたものが老いて、淡泊な生活に餘生を送る時の感じである。淡泊な生活に入れば、

心機が一轉して、すべて世事を忘れる。君に憑つて華嚴品中の法界觀を借り、其の力によつて人間萬

事の非を一洗したいものである。(東坡の自注にいふ、來書云、近看此書、余未嘗見一也と。)

【餘録】樂城集の次韻劉敏殿丞送春原作二詩に、春去堂堂不復追、空餘草木弄晴暉、交游歸雁行

將盡、蹤跡鳴鳩懶不飛、老大未須驚節物、醉狂兼得避危機、東風雖有經旬在、芳意從今今日非。

首夏官舍即事

首夏官舍の即事

安石榴花開最遲。

安石榴花開くこと最も遅く、

絳裙深樹出幽菲。

絳裙深樹幽菲を出す。

吾廬想見無限好。

吾が廬は想ひ見る限りなく好きを、

古今體詩 和子由四首・送春・首夏官舍即事

【字解】【一】首夏 初夏に同じ。

謝靈運の詩に、首夏猶清和、芳草亦未歇。【二】即事 其の場で見た

ことを詩に作る。【三】安石榴 張

三五九

客子倦遊胡不歸。客子遊に倦む胡ぞ歸らざる。
 坐上一樽雖得滿。坐上一樽滿を得と雖も、
 古來四事巧相違。古來四事巧に相違ふ。
 令人却憶湖邊寺。人をして却つて湖邊寺を憶はしむ、
 垂柳陰陰晝掩扉。垂柳陰陰晝扉を掩ふ。

華の博物志に、張騫使西域、還得三安石榴。寶子野の酒譜に、扶風傳云、頓遜國有三安石榴、取汁停盆數日成美酒。宋書、張暢傳に、求三甘蔗安石榴。【四】絳柑。白樂天の山石榴の詩に、題詩報我何所云、苦云色似三石榴。王涯の宮詞に、綺樹宮娥著三降柑。【五】吾廬想見無限好。陶淵明の讀山海經の詩に、孟夏草木長、遶屋樹扶疎、衆鳥欣有託、吾亦愛三吾廬。鄭谷の子規詩に、春山無限好、猶道不如歸。【六】容子。遊子に同じ。史記、范雎傳に、得無與諸侯客子俱來乎。王粲の詩に、客子多悲傷。【七】胡不歸。詩、邶風に、式微式微胡不歸。【八】坐上一樽。後漢書、孔融傳に、常嘆曰、坐上客常滿、樽中酒不空、吾無憂矣。【九】四事巧相違。謝靈運の擬鄴中詩序に、朝遊夕讌、究歡愉之極、天下良辰、美景、賞心、樂事、四者難并。【一〇】憶湖邊寺。王注にいふ、湖邊寺、蓋先生憶三杭州西湖也と。【一一】垂柳陰陰。梁、元帝の詩、巫山巫峽長、垂柳復垂楊。陰陰は茂りて暗い貌。王維の詩に、陰陰夏木轉三黃鸝。

【詩意】安石榴は花の開くことが、最も遅い。開いた時は、赤い裙のやうに深い樹から幽な花が、ちらちらと見える。紅の膚、紫の萼、我が廬の限もなく好いことが想ひ見られる。我が廬は限なく好いも、遊子は遊びに倦んで胡を歸らざるといふ。坐上客が常に満ち、樽中の酒も空しくないので、朝遊夕讌も宜しい。併し古來、良辰・美景・賞心・樂事の四者は、巧に相違うて并せ難いのである。人をして杭州、西湖の湖邊寺を憶はしめる。寺は垂柳が陰陰として、晝扉を掩うて居る。【餘録】樂城集の次韻趙至節推首夏原作詩に、首夏尋芳也未遲、繞園紅紫尚菲菲、無心與物真皆可、有酒逢人勸莫違、夢逐三楊花、無限思、身慚啼鳥不如歸、官居寂寞如三僧舍、海燕憐貧故入扉。

皆可、有酒逢人勸莫違、夢逐三楊花、無限思、身慚啼鳥不如歸、官居寂寞如三僧舍、海燕憐貧故入扉。

送李供備席上和李詩

李供備を送り、席上李詩に和す

家聲赫奕蓋并涼。家聲赫奕として并涼を蓋ひ、
 也解微吟錦瑟旁。也解く錦瑟の旁に微吟す。
 擘水取魚湖起浪。水を擘いて魚を取れば湖は浪を起し、
 引杯看劍坐生光。杯を引いて劍を看れば坐に光を生ず。
 風流別後人人憶。風流別後人人憶ひ、
 才器歸來種種長。才器歸り來らば種種長せん。
 不用更貪窮事業。用ひず更に窮事業を貪ることを、
 風騷分付與沈湘。風騷は分付して沈湘に與へよ。

【字解】一 李供備 名は昭綬、時に黎陽都監を以て洛に歸り、親を省す。供備は其の官名である。宋史、職官志に、供備庫使といふがある。職官分紀に、自內客省使、至皇城使以下、謂之東班。自三宮苑使以下二十名、謂之西班。供備使在西班内。二 家聲 家名といふに同じ。司馬遷の報三任安書に、李陵既生降、類三其家聲。三 赫奕 光の赫く貌。文選の何晏、景福殿賦に、赫奕昭鑠、若日月之麗天也。四 蓋并涼 後漢書の鄭太傅に、有三并涼之人、并州は、古、十二州の一、直隸の舊正定、保定、山西の舊太原、大同等の地方。涼州は、今の甘肅、秦安縣地方。五 也 字彙に、發語辭。亦に似て軽い。岑參の詩に、也知鄉信日應疎。六 解 字彙に、曉也。よくと訓す。不信人間鬢解華、何曾送客解依依、解放三胡鷹、逐三塞馬、能騎三代馬、獵三秋田。七 微吟 小聲にて詩をう

たふ。漢、中山靖王傳に、雍門子壹微吟。文選、魏文帝、樂府、燕歌行に、短歌微吟不能長。【六】錦瑟 杜子美の詩に、暫醉佳人錦瑟旁。【七】擘水云云 韓退之が詩に、擘水看蛟噴。【八】引杯 杜子美の宴左氏莊詩に、檢書燒燭短、看劍引杯長。【九】風流 晉書、樂廣傳に、天下言風流者、以三王、樂爲稱首。【一〇】才器 是たらしきがあつて役に立つ。晉書に、周浚引譚爲從事、愛其才器。後漢書、郭鎮傳に、趙興子峻以才器稱。【一一】種種 髪の短い貌。左傳、昭公三年に、我髮如此種種。【一二】風騷 風は風雅、騷は離騷。因つて詩文の事を風騷といふ。高適の詩に、晚晴催翰墨、秋興引風騷。【一三】分付 人に物を分け與へる。漢書、原涉傳に、分付諸客。【一四】沈湘 楚辭に、伍胥兮浮江、屈子兮沈湘。唐、孟浩然の詩に、觀瀟湘壯枚發、屈痛沈湘。枚乘の七發に、觀瀟湘乎廣陵之曲江、至則未見瀟湘之形也、徒觀水力之所到とある。

【詩意】李供奉の家名は、赫赫と照りかがやいて、并州・涼州を蓋うて居る。李氏は又佳人錦瑟の傍に在つて、よく小聲で詩を歌つて居る。絃聲は水を擘いて、嘉魚も躍り出し、やがて湖上に浪を起すかと疑はれる。酒杯を引いて劍を看ると、坐に光を生ずる感がある。別後には、人人當年の風流を憶ひ、歸り來れば、才器も多少、長ずることであらう。更に窮事業を貪ることなどは全く無用のことと思ふ。詩文は分付して湘江に沈んだ屈原に與へるがよい。

【餘録】樂城集の次下韻李昭敏供奉燕三別湖亭一原作上詩に、池亭雨過一番涼、雲髻羅裙客三兩旁、不覺行人離恨遠、貪看積水照三筵光、滿堂樽俎歡方劇、極目江湖意自長、歸去伊川瀟灑地、不須遺念屬三清湘。

西齋

西齋

西齋深且明。中有六尺牀。西齋深く且つ明かに、中に六尺の牀あり。

病夫朝睡足。危坐覺日長。病夫朝に睡足りて、危坐日の長きを覺ゆ。【もあらず。】

昏昏既非醉。踽踽亦非狂。昏昏として既に醉へるにあらず、踽踽として亦狂するに。

寒衣竹風下。穆然中微涼。衣を寒く竹風の下、穆然として微涼に中る。

起行西園中。草木含幽香。起つて西園の中を行く、草木幽香を含む。

榴花開一枝。桑棗沃以光。榴花一枝を開き、桑棗沃かにして以て光る。

鳴鳩得美蔭。困立忘飛翔。鳴鳩美蔭を得、困立飛翔を忘る。

黃鳥亦自喜。新音變圓吭。黃鳥亦自ら喜び、新音圓吭を變ず。

杖藜觀物化。亦以觀我生。藜を杖いて物化を觀、亦以て我生を觀る。

萬物各得時。我生日皇皇。萬物各々時を得、我生は日に皇皇たり。

【字解】【一】六尺牀 晉書、賀循傳に、武帝賜賀循以六尺牀。南史に、賀革有六尺方牀、思義未達、則橫臥其上。白樂天が小院酒醒詩に、好是幽眠處、松陰六尺牀。【二】睡足 白樂天の詩に、日高睡足猶慵起。【三】危坐 端坐に同じ。史記、日者傳に、正襟危坐。管子、弟子職に、危坐鄉師。晉の夏統傳に、危坐如故、若無所聞。【四】昏昏 孟子、盡心篇に、今以其昏昏、使人昭昭。白樂天の詩に、且效醉昏昏。【五】踽踽 獨り行く貌。詩、唐風に、獨行踽踽。孟子、盡心篇に、踽踽涼涼。踽踽は親しむものなきをいひ、涼涼は人に厚くせざるをいふ。【六】寒衣竹風下 詩經に、淺則揭の詩傳に、揭、褻衣也。柳宗元の詩に、苦熱中夜起、登樓獨褻衣。戴叔倫の詩に、不知竹雨竹風夜。【七】穆然 おだやかな貌。詩大雅に、吉甫作頌、穆如清風。【八】中微涼 宋玉の風賦に、其風中人。同じく宋玉の九辯に、薄寒之中人。唐、柳公權、與太宗聯句に、薰風自南來、殿閣生微涼。【九】

幽香 幽馥に同じ。温庭筠の詩に、綠渚幽香生白蘋、參差小浪吹魚鱗。【一〇】沃以光 詩、衛風に、桑之未落、其葉沃若。沃若は、みづみづしくつやがある。【二】得美蔭 莊子、山木篇に、視一蟬方得美蔭而忘其身。【三】變圓吭 文選、左太沖の蜀都の賦に、鴻鸞鶴侶、鸞鸞鶴侶、雲飛水宿、呀吭清渠。鮑明遠の舞鶴賦に、引員吭之纖婉。【三】杖藜 莊子、讓王篇に、原憲杖藜而應門。【四】物化 莊子、齊物論篇に、周與胡蝶、則必有分矣、此之謂物化。淮南子に、春女思、秋士悲、而知物化。【五】觀我生 周易に、觀我生、進退未失道也。劉禹錫の賦に、觀物之餘、遂觀我生。傅毅の舞賦に、在巖岷、在水湯湯、與志遷化、容不虛生。此詩と韻を用ひる同じ。【六】得時 文選、古詩に、盛衰各有時。陶淵明の歸去來の辭に、羨萬物之得一時、感吾生之行休。【七】皇皇 禮、檀弓に、既葬、皇皇如有所望而弗至。揚子に、仲尼皇皇。陶淵明の歸去來の辭に、寓形宇內、復幾時、曷不委心任去留、胡爲乎皇皇欲何之。皇皇は、栖栖といふに同じ。

【題義】西齋を寫したのである。紀昀いふ、善寫夷曠之意、善用託染之筆、寫物處、全是自寫、音節字句、亦皆一一入古、此東坡極經意之作と。唐宋詩醇にいふ、目見耳聞、具有萬物各得其所一氣象、昔人稱淵明爲古閒淡之宗、此則升堂入室矣と。

【詩意】西齋は奥深い家造ではあるが、光線の工合が大變よいので、あたりが明るい。中に六尺の牀があつて、其の上に横臥することが出来る。(白樂天の所謂好し是れ幽眠の處、松陰六尺の牀の言葉が味はれる。)病夫も十分に朝寢をした。さて起きて端坐し、よくよく日の長いのを覺える。心持が終日昏昏としては居るが、酔うて居るのではない。獨り行いて、人と親しまないが、狂して居る譯でもない。竹風の下、衣を褰げると、穆然として微涼を生ずる。起つて西園の中を歩み行くと、草木が幽香を含んで居り、榴花も美事な一枝を開いて居る。また桑や棗の葉は、みづみづとして而も光澤があ

る。鳴く鳩も、美しい蔭を得て、其の蔭に困立し、高く飛び翔けることも忘れて居る。黃鳥も亦、自ら喜んで、新しい音が圓吭を變ずる。更に藜を杖いて心靜に物化を觀る、(物化とは萬物變化の理、すなはち大自然の作用をいふ。)既に物化を觀、又、以て我生を觀る。陶淵明は萬物の時を得るを羨み、吾が生の行くゆく休むを感ずと言つたが、我が生はまた幾時ぞ、前途も知れて居る。而も日に皇皇として彷徨ふのは、一體、何處に之かんとするのであるか。

小兒

小兒

小兒不識愁。起坐牽我衣。
我欲嗔小兒。老妻勸兒癡。
兒癡君更甚。不樂愁何爲。
還坐愧此言。洗盞當我前。
大勝劉伶婦。區區爲酒錢。

小兒は愁を識らず、起坐に我が衣を牽く。
我小兒を嗔らんと欲す、老妻は兒の癡を勸む。
兒は癡なるも君は更に甚だし、樂まず愁へて何をか爲さん。
還坐に此言を愧づ、盞を洗うて我が前に當る。
大に劉伶が婦の、區區として酒錢の爲にするに勝る。

【字解】【一】嗔 氣を盛にして怒る。曠は怒氣の盛に目元に見ゆる。【二】兒癡 韓退之の和侯協律詠筭詩に、兒癡謂盡兒。【三】洗盞 さかづきをすすぐ。蘇東坡の詩に、洗盞酌鸞黃。【四】劉伶婦 晉書に、劉伶嘗過甚、求酒於其妻、妻捐酒毀器、涕泣諫曰、君酒太過、非攝生之道、必宜斷之、伶曰、善、吾不能自禁、唯當視鬼神、自誓耳、便可具酒肉、妻從之、伶跪祝

日、天生劉伶、以酒爲名、一飲一斛、五斗解醒、(二日醉をさます)婦兒之言、慎不可聽、仍引酒御肉、醜然復醉。【五】區區小きくつまらぬ心。文選、古詩に、一心抱區區。杜子美の詩に、頼有蘇司業、時時與酒錢。

【題義】劉伶は酒を妻に求める、妻は酒を捐て、酒器を毀ち、涕泣して之を諫めた。東坡は小兒の癡を愁へる、妻は盞を洗うて東坡に飲ましめ、愁へて何をか爲さんと言つた。大勝劉伶婦、區區爲酒錢といふのが此詩の骨子である。

【詩意】小供は頑是なく、我が愁のあるをも識らないで、起きるにつけても、坐るにつけても、我が衣を牽いて離さない。それで我は小供を叱り付けようとした。すると、老いた妻は、兎角、小供の癡を勧める傾向があつていふのに、小供は固より癡である。併し、あなたの癡であることは、更に甚しい。一體、あなたは樂します、愁へて何をなさるのかと。我は此言葉にも亦少からず愧ぢ入つた。かくて、老妻は盞をすすいで我が前に當る。晋の劉伶(字は伯倫)は、嘗て酒を妻に求めると、妻は君、飲み過ぎなさるな、攝生の道でないと諫める。伶はいふ、當に神明に誓つて酒を斷つべしと。妻は乃ち酒を具へる。すると、伶は跪いて祝して曰く、天、劉伶を生じ、酒を以て名を爲さしめる。一飲一斛、五斗醒を解す、(二日醉をさます)婦人の言葉などは、慎んで聽いてはならないと。酒を引き肉を御し、陶然として復酔うたといふ話もある。東坡の妻の盞を洗うて東坡に言つたのは、此の劉伶の妻の、區區として酒錢の爲にする言葉に勝ること萬萬であると思ふ。

寄劉孝叔

劉孝叔に寄す

君王有意誅驕鹵。君王は驕鹵を誅するに意あり、

椎破銅山鑄銅虎。銅山を椎破して銅虎を鑄る。

聯翩三十七將軍。聯翩三十七將軍、

走馬西來各開府。馬を走らし西より來りて各府を開く。

南山伐木作車軸。南山に木を伐りて車軸を作り、

東海取鼉漫戰鼓。東海に鼉を取りて戰鼓を漫にす。

汗流奔走誰敢後。汗流れて奔走し誰か敢て後れん、

恐乏軍興汗質斧。恐くは軍興に乏しく質斧を汗さん。

保甲連村團未遍。保甲連村なるも團未だ遍からず、

方田訟牒紛如雨。方田訟牒紛として雨の如し。

爾來手實降新書。爾來手實新書を降し、

抉剔根株窮脈縷。根株を抉剔して脈縷を窮む。

詔書惻怛信深厚。詔書惻怛信に深厚なるも、

【字解】(一)劉孝叔 名は述。進士に擧げられ、溫、耀、眞三州に知たり。神宗の時、侍御史に擢んでられ、數々事を論じて剴切なり。王安石と獄事を争うて合はず、出でて江州に知たり。歳を踰えて崇禧觀に提擧たり。東坡、杭州に倅たるとき、孝叔と虎丘に會し、其の二詩に和す。孝叔、年七十二、卒す。紹興の間、其の風節を録して、祕閣修撰を贈る。

(二)君王 神宗を指す。左傳、昭公十二年に、與君王一哉。(三)誅驕鹵 神宗の西夏を誅滅するに意あるをいふ。驕鹵は高ぶつて傲慢なる虜。鹵は擄に通ず、掠むる意。漢書、匈奴傳に、胡者、天之驕子也。(四)椎破銅山 戰國策に、引椎椎破之。銅山は鄧通が錢を鑄た處、漢書に、賜通蜀嚴道銅山、得三自鑄錢。

吏能淺薄空勞苦。吏能淺薄にして空しく勞苦す。
平生學問只流俗。平生學問只流俗、
衆裏笙竽誰比數。衆裏笙竽誰か比數せん。
忽令獨奏鳳將雛。忽ち獨り鳳將雛を奏せしむ、
倉卒欲吹那得譜。倉卒吹かんと欲す那ぞ譜を得ん。
況復連年苦饑饉。況んや復連年饑饉を苦しむ、
剝齧草木啖泥土。草木を剝齧し泥土を啖ふ。
今年雨雪頗應時。今年雨雪頗る時に應ず、
又報蝗蟲生翅股。又報す蝗蟲翅股を生ずるを。
憂來洗盞欲強醉。憂へ來つて盞を洗ひ強ひて酔はんと欲す。
寂寞虛齋臥空。寂寞たる虚齋空齋に臥す。
公厨十日不生烟。公厨十日烟を生ぜず、
更望紅裙踏筵舞。更に望む紅裙筵を踏んで舞ふ。
故人屢寄山中信。故人屢々寄す山中の信、

又、三國志、董卓傳に、悉椎破銅人鐘
【五】鑄銅虎符。漢書、文帝紀、
二年に、初與郡守爲銅虎符。竹使
符。注にいふ、銅虎符、第一至第五、
國家當發兵、遣使者至郡合符、
符合乃聽受之。竹使符、皆以竹箭
五枚、長五寸、鑄刻篆書、第一至第
五、符以代古之圭璋、從簡易也。
【六】聯翩。聯翩は連翩
に同じ、杜子美の詩に、聯翩收三
京。柳子厚の古東門行に、漢家三十
六將軍、東方雷動、陳雲、宋史、兵志
に、熙寧七年、詔、總開封府畿東西河
北路、分置將副、自河北始、自第
一將以下至三十七將、在河北四路、
自三十八將以下、共七將、在三府
畿、自第二十五將以下、共九將、在
京東、自第三十四將以下、共四將、
在京西、凡三十有七。續通鑑長編に
七年九月癸丑、置三十七將、選嘗

只有當歸無別語。只有當歸歸るべきあつて別語なし。
方將雀鼠偷太倉。方に雀鼠を將て太倉を偷み、
未肯衣冠挂神武。未だ肯て衣冠神武に挂けず。
吳興丈人眞得道。吳興の丈人眞に道を得、
平日立朝非小補。平日朝に立つ小補にあらず。
自從四方冠蓋鬧。自從四方冠蓋の鬧がしきより、
歸作二浙湖山主。歸つて二浙湖山の主と作る。
高蹤已自雜漁釣。高蹤已に自ら漁釣に雜はる、
大隱何嘗棄簪組。大隱何を嘗て簪組を棄てん。
去年相從殊未足。去年相從したが未だ足らず、
問道已許談其粗。道を問ひ已に許して其の粗を談ず。
逝將棄官往卒業。逝に將に官を棄て往いて業を卒へんとす。
俗緣未盡那得睹。俗緣未だ盡きず那ぞ睹るを得ん。
公家只在雲溪上。公の家は只雲溪の上に在り、

經戰陣、大使臣、專掌訓練、將有三正
副、皆給虎符、又於陝西選兵官一
訓練。【七】南山伐木云云。續通鑑
長編に、熙寧七年八月、遣內侍、籍
民車、以備邊、以沈括(字存中)
言而罷。【八】取置云云。詩、大
雅に、鼙鼓逢逢、矇矓奏公。史記、
李斯傳に、建翠鳳之旗、樹靈鼙之
鼓。【九】敢後。後は殿すること。
論語、雍也篇に、非敢後也、馬不
進也。こゝは後れを取らないとい
ふ意。【一〇】軍興。縣官が財物を徵
發して、軍用に供するを軍興といふ。
漢書、趙廣漢傳に、勅蘇賢爲騎士、
屯霸上、不語屯所、乏軍興。
【一一】汗質斧。質一本に資に作る
は非なり。質は鑽と通ず、史記、范雎
傳に、臣之胸、不足當樞質、而要
不足以待斧鉞。又、一語無効、請
伏斧質。又、石慶傳に、罪當伏斧

上有白雲如白羽。上に白雲あり白羽の如し。
應憐進退苦皇皇。應に憐むべし進退苦だ皇皇。
更把安心教初祖。更に安心を把つて初祖に教ふ。

實。漢書、梅福傳に、雖伏質橫分、臣之願也。【三】保甲連村云云。正字通に、宋、元豐以諸路義勇、改爲保甲。宋史、兵志に、保甲者熙寧變募兵之新制也云云。【四】方田

訟牒云云。後漢、馬嚴傳の注に、劉徽、九章算術曰三方田第一。晉、王羲之傳に、文符如雨、倒錯違背、不復可。知。宋史食貨志に、方田之法、分五等以定稅、則凡田方之角立、土爲岸、植木以表之、有方帳、有莊帳、有戶帳、分析典賣、官給契、縣置簿、皆以今所方之田爲正、見於籍者、二百四十八萬四千三百四十九頃。【四】手實降新書。唐制は人民に其の年齢・財産等を申告せしむ。唐六典に、歲終具民之年與、地闊狹、爲鄉帳、言使民自具其年齒與田產多寡之數也。宋、呂惠卿亦、手實法を行ふ、其法、制五等丁產簿、官爲定立物價、使民自供手實、各以田畝屋宅、資貨產畜、隨價自占、隱落者許告、五等既定、乃定所當輸錢、民家尺椽寸土、檢括無遺、至於鵝豚、亦徧抄之。文獻通考、職役考に詳なり。困學紀聞に、管子、地員篇云、其立后而手實、手實之名、始見於此。又、新書といふは、魏志の注に、作兵書十餘萬言、諸將征伐、皆以新書從事。【五】扶剔根株。韓退之の進學解に、爬羅剔抉。列子に、五山根株不相連著。漢書、趙廣漢傳に、根株窟穴所在。【六】惻怛。痛みなしむ。禮記、問喪に、惻怛之心、痛疾之意。【七】深厚。漢書、儒林傳に、文章爾雅、訓辭深厚。【八】吏能淺薄。吏能は官吏の才能。後漢書、堅鐔傳に、世祖以其吏能署主簿。董仲舒の書に、經術淺薄。【九】只流俗。東都事略に、安石爲神宗言朝士朋比之情、且曰、陛下欲以先王之正道、勝天下流俗、故與流俗相爲輕重、流俗權重、則天下之人歸流俗、陛下權重、則天下之人歸陛下、今姦人欲敗先王之正道、以沮陛下所爲、而天下之權、已歸於流俗一矣。蘇子由が擯んでられて、條例司檢詳となり、安石と忤ひ、罷めらる。神宗曰く、蘇軾如何、轍に代らしむべきやと。安石曰く、軾兄弟、學本流俗、朋比沮事云云。漢書、司馬遷の傳に、若望僕不相師、而用流俗人之言。注にいふ、望、怨也、流俗謂隨俗人之言、而流移其志也。【一〇】裘裏笙等。東郭濫竿の故事、韓非子、內儲說に、齊宣王好笙、必三百人齊吹、南郭先生不善笙、而濫於三百之中、以食祿、潘王立、欲一吹之、先生乃逃。【一一】比數。漢書、司馬

遷傳に、刑餘之人、無所比數。杜子美の秋雨歌に、長安布衣誰比數。【一二】風將雜。舊曲の名。吳兢樂府古題要解に、風將雜、漢世樂曲名也。晉、糜璠百一詩に、爲作陌上桑、反言風將雜。晉書、樂志に、吳歌十曲、一曰、子夜、二曰、上柱、三曰、風將雜。【一三】倉卒。文選、李少卿答蘇武書に、前書倉卒、未盡所懷。後漢、順帝紀に、即位倉卒、典章多缺。【一四】苦饑饉。大雅、召曼に、糗我饑饉、民卒流亡。【一五】虛齋。陸游の詩に、短榻水紋簾、虛齋山字屏。【一六】空甌。甌は酒を容れる小瓶。禮記に、君尊瓦甌。【一七】公厨十日云云。三輔決錄に、第五頌、倫之子、洛陽無主人、鄉里無田宅、寄止靈臺中、或十日不炊。白樂天が題李山人詩に、厨煙無火室無妻。【一八】紅裙踏筵舞。杜子美の詩に、越女紅裙濕、燕姬翠黛愁。韓退之の感春詩に、豔姬踏筵舞、清眸射劍戟。【一九】當歸歸云云。孫盛雜語に、姜維詣諸葛亮、與母相失、後得母書、令求當歸、維曰、良田百頃、不在一畝、但有遠志、不在當歸。吳志、太史慈傳に、太史慈從孫策爲將、曹公聞其名、遣之書、以策封之、發書無所道、但貯當歸一爾。【二〇】將雀鼠偷太倉。韓退之の詩に、家請官供不報答、無異雀鼠偷太倉。【二一】衣冠挂神武。挂冠の意。後漢書、逢萌傳に、萌謂友人曰、三綱絕矣、不去、禍將及人、即解冠、挂東都城門、將家屬浮海、客於遼東。杜子美の詩に、君王自神武、駕馭必英雄。【二二】吳興丈人云云。事實類苑に、劉孝叔、東吳端清之士也、強仕之際、已恬於進云云。丈人は長老の稱。易、師卦に、師貞、丈人吉。【二三】冠蓋開。紀昀いふ、四方冠蓋開、當作四方冠蓋開如雲と。王文誥いふ、前有紛如雨。後必不作開如雲と。冠蓋は車のおほひをいふ。【二四】浙。浙江東路、浙江西路。【二五】高蹤。高い行ひ。漢書、楊雄傳に、躡三皇之高蹤。後漢書に、高鳳隱漁釣、終於家。晉書に、郭翻家於臨川、不交世事、惟以漁釣射獵爲娛。張升與任彥堅書に、纏繆思好、庶蹈高蹤。【二六】大隱。白樂天の詩に、大隱住朝市、小隱住丘樊。王康琚の詩に、小隱隱陵巖、大隱隱朝市。【二七】簪組。李太白の詩に、絃歌詠唐堯、脫落隱簪組。簪は冠をとめる爲に髪に挿すもの。組は冠又は印につけるひも、綬の類。【二八】談。其粗。戰國策に、蘇子謂舍人曰、我談粗而君動。【二九】逝將。毛詩に、逝將去汝、適彼樂土、樂土樂土、爰得我所。【三〇】卒業。漢、楚元王傳に、遣子郢客與申公俱卒業。莊子、漁父篇に、請因受業、而卒業大道。【三一】俗緣未盡。廬山蓮社雜錄に、謝靈運、欲投名入社、遠公不許、靈運謂生法師曰、白蓮道人將無謂我俗緣未盡、而不知我在家出家久矣。【三二】響谿。川の名。浙江、吳興縣の南に在る。輿地志に、響谿在湖州府城、響者、以衆流合集爲義、凡四水、曰苕溪、前溪、餘不溪及

北流水、通謂之營溪、一日、四水蕩激時、嘗然有聲、故名。【四】 皇皇 栖栖といふに同じ。禮、檀弓に、既葬、皇皇如三有望而弗至。【四】 安心 傳燈錄に、二祖謂達磨曰、我心未安、請師安心、達磨曰、將心來、與汝安、二祖良久曰、覓心了不可得、達磨曰、吾與汝安心竟。【四五】 初祖 達磨大師を云ふ。

【題義】 此詩は熙寧八年四月十一日、劉述に寄せたのである。劉述は湖州吳興の人である。紀年録に、送劉述に作るは誤である。紀昀いふ、灑氣旋轉、伸縮自如、託諷處、亦不甚激と。灑は天邊の氣をいふ。此詩は首として神宗帝の時に於ける征伐の意を言ふ。熙寧三年十一月、京畿、河北、京東西路に詔して三十七將を置く。將官遂に州郡の長吏と衡を争ふ、故にいふ、聯翩三十七將軍、走馬西來各開府と。又、保甲法（諸路の義勇兵）を立て、諸州をして民を聚めて之を教へしむ。禁令が苛急であるため、往往去つて盜を爲す。郡縣は敢て以て聞せず、故にいふ、保甲連村團未遍と。五年に、方田均稅法（東西南北各千歩を一方田とし、地味によつて、租稅を五等に分つ）を立て、司農に詔し、條約并に式を天下に頒ち、每歲、九月に地を分つて計量し、稅數を均定し、明年三月に至つて以て民に示す。戶帖に書し、以て地符となす。故にいふ、方田訟牒紛如雨と。七年に、呂惠卿は手實法（人民をして其の家族の數、財産などを申告せしめ、之に課稅する）を建て、民をして自ら其家の物産を上らしめる。天下之を病めるにより、八年十月に至つて、乃ち罷む。故にいふ、爾來手實降新書と。神宗は西夏を誅滅する意があつて、邊隙を開いた。安石は帝の意を迎へ、四夷を鞭答するには、必ず財用豐裕にして、其の志を行ふべしと。是に於て神宗の世は、理財を以て急となし、兵連り禍結

んで、南征西伐、幾んど亂に至つた。此詩は此の時事に及んで居る。

【詩意】 神宗は大に四夷を攘ひ、先烈を恢張しようとし、王安石を金陵に起して、之に付するに大政を以てした。安石は帝の意を逢迎し、以爲らく兵を養ひ、武を奮ふには、先づ財を聚めなければならぬと。理財を以て急務となし、例の新法を行つたのである。又、銅山を摧破して、銅虎符を鑄た。其の武備のことをいふと、三十七將軍を連翩分置し、先づ河北より始め、第一將より以下、十七將に至るまでは、河北四路に在る。第十八將より以下七將は、京畿に在る。第二十五將より以下九將は、京東に在る。第三十四將より以下四將は、京西に在る。凡そ三十七將である。馬を走らし、西より來つて、各幕府を開いて居る。かくて終南山から木を伐り來つて、兵車の軸を作る。又、東海に鼉鱷の一種を取つて、其の皮で軍太鼓を造る。そして漫に用ひる。戰陣に臨みては、汗を流して奔走し、誰か後れを取らうぞ。併し恐らくは軍用に供すべき財物の徵發が乏しいといふ廉で、刑罰され、やがて鑽斧を汗す運命に終るであらう。鑽は斧臺にするつけ、刃を上に向けた刑具である。さて宋は諸路の義勇兵即ち郷戸團を改めて保甲となし、姦盜を察せしめたが、其の保甲も盜賊を逐ふことが出來なく、却つて盜賊となつたものが多い。保甲が連村に設けられたが、其の集團は未だ徧く行き渡らない。東西南北、各千歩を一方田となし、方田の角に土を立てて岸となし、木を植ゑて之を表す。かくて地味によつて租稅を五等に分つ。方帳があり、莊帳があり、そして戶帳もある。官は契を給し、縣は簿を置いて、計量均定したが、方田訟牒、紛として雨の如くであつた。神宗は熙寧七年の春、大旱

があつたので、憂が容色に見はれ、保甲方田等の事を罷めようとした。安石曰く、水旱は常數で、堯帝や湯王の代でも免れざる所である。但、當に益人事を修むべきであると。神宗曰く、此れ豈細事ならんや、朕、今恐懼する所以のものは、正に人事の未だ修まらざる所あるが爲のみと。呂惠卿は手實の法を建て、人民に家族・財産を申告せしめて、之に課税し、秋毫を析ちて檢括するので、天下之を病む。八年十月に至つて乃ち罷めた。故にいふ、爾來手實降新書と。課税の深刻なる、凶豊を以て其の法を張弛しない。どこまでも、根株を扶剔（くじり出す）して、脈縷を窮めた。是に於て詔書が降つて、痛み悲しみたまふことが信に深厚であつた。これは熙寧七年、二月乙丑に詔して曰く、朕涉道日淺、政失三厥中、以干三陰陽之和。乃冬迄春、早暵（かわく）爲虐、省膳避殿、冀以消變、歴日滋久、未蒙三休應、中外臣僚、竝許實封、直言朝政缺失と。然るに吏は上意に副はなく、才能が淺薄で、空しく勞苦をして居る。（紀昀いふ、二句、詩人之筆と。）安石は、凡そ其の新政を議するもの、皆、流俗を以て之を詆る。故に平生學問只流俗と言つたのである。昔、齊の宣王、人をして竿を吹かしむるに、一吹必ず三百人、南郭先生は竿を吹くことが出来ない。三百人の内に濫吹して祿を食んで居た。宣王が亡くなつて、文王が位に即いた。曰く、寡人竿を好むも、一一之を聽かんと。南郭先生は驚いて逃げたといふ話がある。衆裏に吹く筈や竿は、誰が比べて數へようぞ。故に濫吹が出来る譯である。忽ち舊曲、鳳將雛を奏せしむるも、倉卒の際、吹かうとしても譜を得られない。（紀昀いふ、妙に於用此、便不露激訐之痕、前人立此比體、原爲二種難著語處、開法門と。）時事も之に類

し、倉卒の際、言を盡し難い。まして凶年が打ち續いて、民は流亡し草や木を剝いで食み、泥土をば掴んで啖ふ。今年は雨雪が頗る時に應ずるも、またまた蝗蟲が翅や股を生じたとの報がある。憂へ來つて盞を洗ひ強ひて酔はうとするも、寂寞たる虚齋に、酒がなく、空な瓶を枕にして臥する。公の厨には炊烟が起らないが、妓女は筵を踏んで舞つて居る。故舊からはしばしば山中よりの音信を寄せられるが、只、當に歸るべきとあつて、別の言葉もない、我は方に雀や鼠が太倉の米を偷んで居るやうなもので、未だ敢て冠を解いて山中に歸らない。吳興の長老は、眞に道を得て居る。平日は朝廷に立つて補ふ所が多い。四方車馬の鬧しい土地から歸つて、浙江の東西路并に湖山の主となる。丈人の高蹤は、已に自ら漁釣に雜つて、紅塵の外に在る。而も眞の隱者は何ぞ曾て衣冠を棄てようぞ。去年、一寸相會つたが、また忽ち離れて、殊に物足らない氣がする。それは熙寧七年に、東坡が將に密州に赴かうとして、李公擇に書を與へていふ、孝叔丈、向有經由之約、今已不遂、其後雖重見於湖、而此約終不果行とあるを指したのである。道を問ひ、已に許して、其のあらましを談じた。ここに將に官を棄てて、往いて、其の業を卒へようとする。我は家に在つて、家を出づることが久しい。併し俗縁が未だ盡きないので、實現が出来ない。君の家は、湖州府城の霄谿の上に在る。上に白雲が白羽の如く繞つて居る。緬に想ふと、心馳に堪へない。應に憐むべし、此身は進退はなはだ安からず、彷徨として歸する所がない。更に安心を把つて初祖に教へた達磨を懷ふのである。（王文誥いふ、時孝叔游心方外、特用二問道句、留作種子、便於此處收煞、否則公既未退而孝叔亦不出、此詩無二結處）

矣、其間道一層、且是孝叔丈、當日身分、詩法細密如此、若以譚空、當一事件事論、即大可笑矣

【餘錄】宋史、兵志に據るに、熙寧三年、始連比其民、以相保任、詔畿内之民、十家爲一保、五十家爲一大保、十大保爲一都保、有保長、保正云云。又いふ、凡義勇保甲民兵、共七百一十八萬二千餘人。明の鄧元錫（字は汝極）が函史に、保甲法行、民憂無錢買弓矢、兼戍邊、有截指斷腕、以避丁者、知開封府韓維以聞、帝問安石、安石對曰、未必然、然愚民難與慮始、即有之、亦不足怪也。

查初白いふ、熙寧八年四月十一日、軾作詩、寄劉述、君王有意四句、是時、朝廷遣使諸路、檢點車器、及置三十七將官、軾將謂、今上有意征討西夏、以譏諷朝廷、諸路遣使及置將官、張皇不便、又、南山伐木云云、以譏朝廷法度屢變、事目煩多、吏不能曉、又、況復連年苦饑饉云云、意謂、近來饑饉、飛蝗蔽天、以譏朝廷政事缺失、新法不便之所致、又云、酒食無備、齋厨索然、以譏諷朝廷減削公使錢太甚、公事既多、早蝗又甚貳政、巨藩尙如此窘迫、所以言山中故人寄信令歸、但軾貪祿、未能便挂冠而去、又、四方冠蓋闐如雲二句、以譏諷朝廷近日提舉官所至生事苛碎、故劉述乞宮觀歸湖山也云云。

孔長源挽詞二首

孔長源が挽詞 二首

少年才氣冠當時。

少年才氣當時に冠たり、

晚節孤風益自奇。

晩節孤風益々自ら奇なり。

君勝宜爲夫子後。

君勝は宜しく夫子の後たるべく、

林宗不愧蔡邕碑。

林宗は蔡邕の碑に愧ぢず。

南荒尙記誅元惡。

南荒尙ほ記す元惡を誅するを、

東越誰能事細兒。

東越誰か能く細兒に事へん。

耆舊如今幾人在。

耆舊如今幾人かある、

爲君無憾爲時悲。

君の爲に憾なく時の爲に悲しむ。

【字解】(一) 孔長源 名は延之、

長源は其の字、新淦縣の人。孔子四十七世の孫。幼にして孤貧、晝は書を帯びて耕鋤し、夜は松を燃して書を読む。慶曆の間、進士に擧げられ、九遷して司封郎中に至る。平生、惟周敦頤・曾鞏と最も友とし善し。(二) 挽詞 挽歌に同じ。葬る時、柩の車の縛を牽くもの歌。晉書、樂志に、挽歌出平漢武帝。晉、崔豹の古今注に、薤露・蒿里二章、李延年、今爲二

夫庶人、使挽柩者歌之、世呼爲挽歌。(三) 晩節 晩年に同じ。漢書、鄒陽傳に、晩節末路。杜子美の遺悶詩に、晩節漸於詩律類也、莫與之倫。幾字は君嚴、弟幾字は君勝。(四) 君勝 韓退之が孔幾墓志銘に、孔世卅八、吾見其孫、白而長身、寡笑與言、其尙餘人、皆來會葬、同志者、乃共刻石立碑、蔡邕爲文、既而謂涿郡盧植曰、吾爲碑銘多矣、皆有慚德、惟郭有道、無愧色耳。(五) 南荒 漢、王褒が移金馬碧雞文に、處三南之荒。唐、嚴維(字は文正)の詩に、臣心瞻北闕、家事在三南。東坡の詩に、笑說南荒底處所、祇今榕葉下庭臯。(六) 元惡 尙書に、元惡大憝。荀子に、元惡不待教而誅。(七) 東越 また東粵に作る。今の福建閩侯縣の地。(八) 細兒 韓退之の詩に、魯連細兒黠。史記、陳軫傳に、莊舄、越之鄙細人。查注に、細兒、當指越州秦鹽法之人、孔因是罷官。(九) 耆舊 老人をいふ。後漢書、魯恭傳に、至三列卿郡守者數十人、而其耆舊大姓、或不蒙薦舉。

古今體詩 孔長源挽詞二首

【題義】此詩は熙寧八年四月の作、孔長源を悼んだ辭である。長源は、言を口より出す能はざるが如きも、義を見るに及んでは、慷慨して辯ずる。老いて益、自ら強め古を守る。齟齬すと雖も、以て其の意を易へない。詩に林宗不愧、蔡邕碑とあるは、曾子固が其の墓に志した語である。紀昀は此詩を評して太激便傷、雅と言つた。

【詩意】孔長源は小供の時分から學藝を厲み、才氣は當時に比ぶものがなく、郷舉進士の第一となつた。晩年は孤立で助けなく、益、自ら不遇となつた。(奇は數奇の意)孔戡字は君勝は、立派な人格である。孔夫子の子孫として少しも恥かしくない。又、郭林宗の碑が建つたとき、撰文した蔡邕曰く、吾はこれまで多くの碑銘を爲つたが、皆慙徳がある。惟、郭有道は愧色なしと。孔長源は孔夫子の子孫であることは、孔君勝と同じく、碑銘に對して愧づる色のないことは郭林宗に似て居る。長源が廣東轉運判官であつた時、雷州の守方倪が不善をなしたので、官屬共に之を告げた。倪は要して其の書を奪ひ、悉く官屬を收め、其孥を併せて、獄に繋いだ。長源は馳せ至り、倪を取つて吏に屬し、繫逮された七百餘人を縦つた。倪は法に坐して斬に當せらる。南荒で元惡を誅すとは、此事を指したのである。長源は後、越州に知となり、宣州に改められたが、未だ至らない中に、越州で鹽法が行はれなものは、長源が鹽法を沮壞した爲だと奏するものがあつたので、坐して官を罷められた。東越誰か能く細兒に事へんとは、此事を指したのである。耆舊は凋落して只今幾人かある。君の爲に憾みなく、時の爲に悲しむのである。

小堰門頭柳繫船。

小堰門頭柳 船を繋ぎ、

吳山堂上月侵筵。

吳山堂上月筵を侵す。

潮聲夜半千巖響。

潮聲夜半千巖響き、

詩句明朝萬口傳。

詩句明朝萬口傳ふ。

豈意日斜庚子後。

豈意はんや日庚子の後に斜ならんとは、

忽驚歲在巳辰年。

忽ち驚く歳の巳辰の年に在るに。

佳城一閉無窮事。

佳城一たび閉づ無窮の事、

南望題詩淚灑牋。

南望詩を題して淚牋に灑ぐ。

【字解】【一】小堰門 杭州城門

の名。圖經を按ずるに、仁和縣一十

三里に在る。臨安志に、城東保安門、

舊名小堰門。本集の詩、開西湖狀に

錢氏有國時、郡城之東有二小堰門、昔

人以二大小二堰一隔二絕江水、不二放入

城。【三】柳繫船 唐の顧非熊が

江邊柳詩に、根靈復繫船。【三】

吳山 杭州圖經、輿地志に、吳山本

名胥山、避二伍相、故改爲二吳山。吳山

の堂は、有美堂。【四】千巖 文選、

謝惠連の雪賦に、瞻山則千巖俱白。

【五】詩句明朝 東坡の自注に、長源自越過二杭、夜飲二有美堂上、聯句長源詩云、天目遠隨二雙鳳一落、海門遙覺二兩潮趨、一坐稱善。

【六】萬口傳 鄭谷の詩に、不知幾首南行曲、留與二巴兒二萬口傳。杜子美の送二章二二詩に、念我能書二數字二至、將詩不二必萬人傳。

【七】日斜庚子後 漢、賈誼傳に、爲二長沙傳、有服、飛入二誼舍、自傷悼、以爲壽不得長、廼爲賦、以自廣曰、庚子日斜、服集二余

舍、止二於坐隅、親甚閑暇。【八】巳辰年 後漢書に、鄭玄夢、孔子告之曰、起、今年歲在二巳辰、明年歲在二巳辰、既寤、以二識合二之、

知二命當終。識曰、歲在二龍蛇二賢人嗟。辰を龍となし、巳を蛇となす。【九】佳城 墓地をいふ。西京雜記に、滕公駕至二東都門、馬

鳴蹄不二肯前、以二足跑地、久之、滕公使二士卒掘二馬所跑地、入二三尺所、得二石槨、有二銘曰、佳城鬱鬱、三千年見二白日、吁嗟滕公居二

此室、滕公曰、嗟乎天也、吾死其即安二此乎、死遂葬焉、滕公は前漢の夏侯嬰。

【詩意】杭州城の小堰門は、其の昔、錢氏が國を有つた時分、江水を隔絶せんが爲に建てたものであ